モニタリングラブ

夏のラジオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モニタリングラブ

【Ｎコード】
Ｎ６２５５Ｋ

【作者名】
夏のラジオ

【あらすじ】
中学三年に進級し、片想いの相手で、かつての友人でもあるキーコと再び同じクラスになった。でも、彼女はなぜか冷たい。腹が立ったので、僕は彼女の部屋に監視カメラをしかけて、プライベートをモニタリングすることにした。

1　キーコ

そのときのキーコの髪型は、ツインの三つ編みだった。「そのとき」というけれど、中学入学時に長い髪をばっさりときり、ショートカットにイメチェンするまでは、ずっと三つ編みで通していたはずだ。服装は覚えていない。何しろいつ頃の時期だったか覚えていないので、薄着だったか厚着だったかも定かではない。

僕はテレビゲームをやっていた。ツーディーの横スクロール型アクションゲームだ。迫りくるモンスターをばっさばっさと剣でなぎ倒していく。操作性においてはジャンプにやや問題がある。地面を歩く半分のスピードでジャンプするので、慣れておかないと、なんでもない落とし穴に「すっ」と落っこちてしまう。このゲームが高難度とされる一番の要因だ。

「すごーい。りっくん、上手だねえ」

前のめりになってテレビ画面を見つめるキーコは、しきりに感嘆の声を上げていた。

僕はこのゲームが得意だった。五面の空のステージは、およそ八割が落とし穴の難関ステージだったが、なぜか歩ける雲の上をぴょんぴょんと飛び移りながら、次々と画面をスクロールさせる。キーコに褒められるたびに得意気になり、「たいしたことないよ」、「ほれ、もういっちょ」、などニヒルな口調で呟いていた。

雲から足を踏み外す。

「惜しーい」

まるで自分のことのように悔しがるキーコ。そういえば彼女はタ

イト気味のワンピースを着ていた。四つん這いでうなだれる彼女のスカートの裾から、ピンク色のパンティが覗いたのを覚えていた。

「次はキーコの番」

キーコにコントローラーを渡そうとするも、彼女はかぶりを振った。

「私はいい。りっくんがやってるの、見てたほうが面白いから」

そう、とだけ僕は口にし、再び雲を渡る作業に戻った。「すっごーい」とキーコはまた瞳を輝かせていた。「見ていたほうが面白い」という感覚は理解できなかったが、「彼女はそうゆうタイプの子なんだろうな」と納得していた。

キーコの家だった。時間帯はもちろん昼間だ。学校帰りではなかったはずで、日曜日だと思う。なぜそんなことになったのかは分からないが、僕は生まれて初めて女の子の家に遊びにきていた。ゲームは、ハードもソフトもキーコのもの。いや、ひょっとしたら彼女のお兄さんのものだったのかもしれない。

二つの部屋が一続きとなった六畳の和室。部屋の内装はよく覚えていない。洋服ダンスが置かれていただろうか。部屋が二つあれば洋服ダンスの一つや二つ置かれているのは当然だといえるが。ただ、間どりははっきりと覚えている。覚えているというか、知っている。和室が二つ、洋室が一つ、ダイニングキッチンが一つの三ディーケー。左右は逆になっているが、僕の部屋とまったく同じだ。

僕とキーコの家は、同じ市営住宅の同じ棟にあった。建物の左右中央に三つの階段があり、それぞれ一階につき二部屋を擁する四階建て。つまり、建物全部で二十四の部屋がある。僕が暮らすのは、右側の階段を三階まで上がった左側の部屋。三〇五。キーコが暮ら

すのは中央の階段を三階まで上がった右側の部屋。三〇四。僕とキーコはお隣同士だったが、双方の部屋をいききするには、まず階段を下りて建物を出、それからまた隣の階段を三階まで上がらねばならなかった。

キーコとの親交は小学二年生のときから始まっていた。一学期の始めに彼女がどこからか転校してきたのだ。第一印象は忘れていない。先生に手を引かれて教室に入ってきた彼女に、僕はぼうっと見惚れてしまった。背中を這うツインの三つ編み。すらっとした身体の線。量産型といえるような美しくも醜くもない顔立ち。いや、それらに惹かれたわけではない。彼女の最大の魅力はその笑顔にあった。新たな環境への不安や戸惑い、そういったものを微塵も感じさせず、彼女はにこにこと目を細めて笑っていた。

当然ながら、キーコはすぐにクラスに打ち解けた。女子も男子も彼女の机をとり囲み、彼女にさまざまな質問をぶつけていた。僕はというと、そんな様子を横目に見ながら、仲のよかった男子と新作ゲームの話に花を咲かせていた。キーコと話したいのは山々だったが、あの中に割り込んでいく勇気が僕にはなかった。

「手塚(てづか)くんって私と同じ団地なんだよね」

キーコが転校してきて一週間ばかりが経過していた。放課後だった。ランドセルを背負い、「一緒に帰ろう」と男子と教室を出ようとした矢先、キーコにそう話しかけられた。相変わらず、にこにこしていた。僕とキーコが同じ市営住宅に住んでいることを、このとき初めて知った。

「じゃあお前ら、一緒に帰ればいいじゃん」

はやし立てるようにいったのは、一緒に帰ろうとしていた男子だ。明らかに目にいやらしさが滲み出ていた。

嬉しかったのも確かだが、それ以上に恥ずかしかった。ただ、一般の小学校低学年の男子なら、「なんで、お前なんかと一緒に帰らなきゃなんねえんだ」と邪険な態度をとるだろうが、僕にはそんな勇気すらもなかった。

キーコと一緒に帰った。話した内容は覚えていないが、その時間がとても楽しかったから、以後何度も一緒に帰ることになったのだと思う。本当に何度も何度も一緒に帰った。「お前らできてんじゃねえか」とからかわれ、気まずい思いをすることもあったが、次第にそんな声も気にならなくなっていった。

小学校六年まで、キーコとはずっと同じクラスだった。近所ということで親同士の仲もよく、もはや公認のカップルといえたかもしれない。席が隣同士になったときは、先生もよく授業中に僕らをからかっていた。「いちゃいちゃするのもいいけど、ちゃんと黒板を見なさいよ」。みんなの爆笑の中、僕とキーコは頬を赤らめてうつむいたものだった。

それでも、僕がキーコの家に遊びにいったのはたった一回だけだったし、彼女が僕の家にきたことはない。あの、二人でゲームをやったひとときが、親交を校外にまで及ばせた唯一の時間だったのだ。

話を戻すことにする。「二人でゲームをやった」といっても、あの日結局、キーコは一度もコントローラーを握らなかった。最後まで僕のプレイをはたから見ているだけだった。「見てたほうが面白い」と彼女はいった。あのときは納得したが、実は今となってはその考えを改めていた。

そんな馬鹿な。友達がゲームをしているところを見ているだけな

んて、僕だったら発狂してしまいそうだ。「はあ」とか溜息をついてしまいそうだ。「下手くそ」とか罵ってしまいそうだ。まあ、僕が異常にゲーム好きなだけかもしれないが。

ただ、思うことがある。この世で一人、その子がプレイしているところを見ているだけで満足できそうな人物がいる。キーコだ。僕にとってのキーコ。それなら、彼女にとっては――。

意味はない。こんなことを考えても遅過ぎる。万が一、あのときのキーコが僕に好意を寄せてくれていたとしても、もう彼女はそばにいない。百万里も、いや、十万光年も離れた場所へいってしまった。

小学校を卒業し、家のすぐ近くの中学に入学した。僕とキーコは初めて別々のクラスになった。始めの頃は廊下などで顔を合わせると一言二言声をかけ合っていたし、一緒に帰宅することもあった。しかし一月ほど経過すると、変化が訪れた。僕らをからかう周りの声に、僕は小学校時代と同じく、「しょうがねえなあ」とにやけてみせていたが、彼女のほうは本気で顔をしかめるようになった。廊下で声をかけようとしたときには、顔をそらしてそそくさと逃げられた。彼女の拒絶の空気を感じとった僕も、いつしか自分から彼女を避けるようになっていった。

さて、キーコが僕から離れてしまった理由は、僕の中にだが諸説ある。まず一つは僕という男の、魅力のなさに気づいてしまった説。別に顔は悪くない。それなりに背も高い。学業もまあまあか。ただ、僕はかなり暗い男子だった。ゲームが上手いというのは、小学校ではそれなりの権威を持てたが、中学ではまるで通用しなかった。ゲームを卒業し、部活動に傾倒することこそ正義と見なされたからだ。事実、陸上部へ入部するキーコを尻目に、僕はゲームがしたいから

という理由で帰宅部を選択した。友達も限りなく少ない。その数少ない友達も、同じくゲーム好きな、周りの生徒から暗いとされている男子ばかりだった。

思春期説。僕はこの説を推している、というか希望している。中学生になったキーコは、以前のように異性と気軽に接することができなくなってしまった。その異性が自分の好きな相手となったら尚更だ。素直になれず、素っ気ない態度をとってしまう。一緒に帰るところを級友に見られるのが恥ずかしい。話しているところを、笑い合っているところを、恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい。

他にも幾つかあるが、一貫しているのはキーコが変わってしまったということ。事実、彼女は明らかに変化していた。

頭の禿げ上がった眼鏡の男性教師が、教壇に立って話していた。このたび僕が在籍することになった三年四組の担任、岩口（いわぐち）だ。おそらく四十代前半で、授業では国語を教えている。上下をジャージで統一し、腕を組みながら、無駄にダンディーな低い声を生徒たちにまき散らしていた。話の内容は、受験がどうのこうの、男女の交際が、家庭が、という普遍的なもの。

僕は後ろから二番目の、中央やや右寄りの席にいた。出席番号順であらかじめ決まっていた席だが、教室のかなり広い範囲が見渡せるという点で割と気に入った。目の前に、二年から引き続き同じクラスとなった塚田（つかだ）の大きな背中がある。紺色の学生服の肩辺りに白いふけがついていた。「いやなものを見てしまったな」と、僕は慌てて目をそらす。

目をそらした先に、キーコがいた。僕から見て左側、窓際の一番前の席だ。始めは、教室に明かりが点いていないため、窓からの逆

光でほとんど影だけしか見えなかったが、だんだんと目が慣れていった。彼女は教壇に顔を向けていたが、右手で頬づえをついているため、横顔はほとんど見えなかった。髪の毛は以前より少し伸びたようで、ちょうど首すじが隠れる長さとなっている。セーラー服のトップスの裾から、わずかに生身の腰が覗いていた。

始業式を終えたあとの、ホームルームだった。三年に進級し、僕らは再びめぐり会った。「このまま何ごともなく平穏に中学を卒業し、キーコと二度と顔を合わさずに生きていけたらどんなに気楽だったろう」とも考えた。でも、本当はやっぱり嬉しかった。二年の月日の中で、二人の距離は果てしなく広がってしまったけれど、その距離をまた縮められるかもしれない。「最後のチャンスを神さまがきっと恵んでくれたのだ」と信じることにした。

他の生徒だってみんなそうだが、キーコは相槌一つ打たず、つまらなそうに岩口の話に耳を傾けていた。そんななんでもないことが、とても悲しく感じる。なぜなら、彼女はキーコだからだ。僕がよく知るキーコは、休み時間はもとより授業中も、朝礼中も、どんなときも、いつもあのにこにことした笑顔を浮かべていた。

キーコは変わってしまった。

でも、この期に及んで僕はまだ彼女のことが好きだった。

1　キーコ（後書き）

基本的に毎週火曜更新予定です。

2　滝のように

「おい、深海（ふかみ）」
僕のマドンナの姓を気安く呼ぶ男の声に、振り返りはせずとも、思わず肩をぴくつかせてしまった。
「知ってるか？　コジマのやつ、部活さぼってデートしてやがったんだぜ」

「マジで？」
興味津々といった表情を浮かべるキーコ。彼女の周りを数人の女子生徒が囲んでいた。椅子に片足をかけて座っており、目前の男子にスカートの中身が見えてしまわないか不安だった。もっとも、体操服のハーフパンツを下にはいている可能性が高いが。

「マジで、マジで」
男が僕の脇を抜けていった。机のあいだを縫って歩き、斜めにジグザグにキーコのもとへ。陸上部の小金井（こがねい）だ。やかましいやつで、いつも教室中に響き渡る声で話す。
「しかもさ、相手の名を聞いて驚くなよ。なんと、タカクだったりするわけよ」

「なおちゃん？　マジで？」
近くの女子と顔を見合わせるキーコ。僕の知っている彼女は、マジで、などといった言葉をはいたことはなかったな、とまた感傷的になる。

「そんでさ、フィリアを仲間にする条件ってのがあんじゃん」
「え？　ああ」
こちらを向いて座る、前の席の塚田に視線を戻す。学生服が悲鳴

を上げそうな巨漢で、天然パーマの髪の毛を中途半端に伸ばしている。今日も肩にふけを溜めていた。
「あれって面倒くさいんだよな。ベンガー城陥落までにレベルを二十まで上げないとダメだし」
「だよなあ」
細い目を更に細めて、彼は笑った。引き続き彼と、次世代ハード〈ハウスコード〉の新作ロールプレイング、〈ドラグーンザネクスト〉について語り合いながら、また目だけをキーコに向けた。
小金井は風のように去っていた。代わりに、隣の席の中西（なかにし）というロンゲのやや不良っぽい男子と笑い合っていた。キーコのその笑顔は、例のにこにこ笑顔とは種類が違っていた。
「ヴェスタリアで最初に戦うボスいんじゃん」
「ああ」
それにしても、と僕は改めて思う。キーコは本当に可愛くなった。量産型タイプとはいったが、その平凡な顔立ちが、見ている者に妙な安心感を与えているということに、いつしか気がついていた。キーコが可愛くなったというより、僕の見る目が変わったのかもしれない。
「あいつって、眠らせるよりかはしびれさせたほうが楽だよな」
「いや、しびれさせたら再戦のときにしびれ耐性がついちまうんだよ」
こうしてまた同じクラスになるまで、僕は滅多にキーコと顔を合わせなかった。彼女は部活があるので、下校時には基本的に鉢合わせない。登校時はよく、ばったりと出くわしもしたが、次第に彼女

の家を出る時刻のパターンが分かり、僕から時間をずらすようにした。彼女の顔をまともに見られない時期が続いたので、僕の中で彼女を美化しているのでは、とも懸念されたが、まったくそんなことはなかった。

「そうか、なるほどね。メモしとこう、メモ」

「頭で覚えりゃいいじゃんか」

新学期が始まり、一週間が経過していた。キーコとの距離は、今のところ縮まる気配がない。口を聞くどころか、目すら合わせていない。僕がいつも彼女を注視しているというのに目が合わないということは、あちらは僕になどまるで興味がないということだろう。いいのだ。百も承知だ。

そろそろ行動に移さねばならない、と僕は考えていた。このままだらだらと日々を追っていたって何も進展しない。神さまがくれたチャンスを無駄にしてはいけない。

行動、といえるほどのものではないのかもしれない。僕は今日中にキーコに話しかけようと目論んでいた。二年近く口を聞いていないにしても、僕らのあいだには長年に渡って積み上げてきた絆があるはずだった。気まずい反応を見せられはしても、さすがに冷たくあしらわれはしないだろう。

とはいえ、もう昼に近づいていた。僕のそばをキーコが通ったり、キーコが一人きりで席に座ってぼうっとしていたり、これまでに何度も話しかけられそうなシチュエーションがあったが、そのすべてを流してきた。ああ、僕はなんて意気地なしなんだろう。

それでも決意は曲げていなかった。四時限目の理科の授業が終わ

り、昼休みになってしばらく、ついに僕は立ち上がった。まずは教室の後ろの僕のロッカーへ向かう。特に用はないが、ロッカーの中を探ってみる。そのまま窓際へ歩く。窓のふちにひじをかけ、景色を眺める。ボールを追って、広いグラウンドを走り回る数人の男子生徒。昼食の時間を遊びに割くとは、なんという愚か者たちよ。空は今日も見事な五月晴れ。四月だけど五月晴れ。

キーコを見た。

後ろの席の穂積（ほづみ）さんと、ぼそぼそ話をしている。肥満気味のおとなしそうな女子生徒だ。やかましいやつ、不良っぽいやつ、おとなしいやつ。キーコの交友範囲の広さに戦慄を覚える。それなら暗いやつ、もカバーしてもらおうじゃないか。

窓際を一直線に歩いた。歩を進めるごとにキーコとの距離が縮まっていく。三メートル、二メートル、一メートル。彼女は逆側に身体を向けているし、僕は抜き足差し足忍び足だしで、気がつかない。

シミュレーションしておいたキーコとの二年ぶりの会話を頭に思い描く。久しぶり。ああ、久しぶり。なんか、随分と話してなかったね、はは。そうだね、ふふ。志望校は決まった？　ううん、まだ、りっくんは？　僕もまだ。そっか。

キーコの真横にきたとき、まず穂積さんが僕に顔を向けた。そして、それに釣られる形でキーコも僕を見る。しかし、次の瞬間には光の速度で再び顔を背けてしまった。

僕はショックを受けた。そのショックは停止させかけた足にまで伝わってしまった。僕はあれえ、ないなあ、などと何かを探している振りをしながら、その場を素通りした。

落胆して自分の席に戻ると、ドカ弁を広げてもぐもぐと頬を張らせている塚田が、きょとんとした表情を浮かべていた。
「教室にアイテムは落ちてないぞ」
僕ははあ、と溜息をついた。

五時限目は体育の授業だった。三組と合同で、グラウンドでサッカーを行う。女子は体育館だ。キーコがいないと寂しいのも確かだが、僕のへなちょこドリブルを見られないで済むという点では万々歳だった。

ジグザグドリブルのタイムを計った。学年で最も背の高いバスケ部の生田（いくた）というやつが、前回のサッカー部の面々の記録を塗り替え、大いに湧いていた。僕の直前に臨んだ塚田が、スタートの合図と同時に、蹴ろうとしたボールを踏みつけ、後頭部を強く打って保健室へ連れていかれた。みんなは爆笑していたが、とてもじゃないが僕はそんな気になれなかった。塚田を不憫に思ったのもそうだが、それ以前の問題だった。

鏡を見なくとも分かるほど、僕は青い顔をしていた。さっきからずっと吐き気をもよおしている。昼食の弁当が原因だ。おふくろのやつめ、おかずを冷凍食品の油ものばかりでまとめやがって。おかげで胃もたれを起こしてしまったではないか。

しかしながら、僕の顔色の悪さに誰も気がつかない。具合が悪いので保健室にいっていいですか、と自分からはいえなかった。僕の運動音痴は周知の事実で、体育の授業から逃げたというふうに思われたくないからだ。

吐き気を必死でこらえながら、僕は記録に臨んだ。コーンは全部

で五つ。二つ目のコーンまではサッカー部並の動きを見せることができた。しかし、その後はいわずもがな。三つ目のコーンの右側に通す際にボールを大きく蹴りだしてしまい、あらぬ方向へ転がっていく。四つ目のコーンの左側を抜くまでに十秒はかかった。しかも、そこでも同じことを繰り返し、五つ目も十秒。トータル三十七秒という記録だった。何ごともなかったように次の生徒のスタートがきられ、サッカー部の彼が生田の記録を破り、また湧いた。なんだか、記録なしの塚田にさえ負けた気分だった。

六時限目の数学の授業中に、吐き気はだいぶ収まった。目の前には大きな背中。体育を終えて教室に戻ると、けろっとした顔で塚田はそこにいた。災難だったな、と僕が笑うと、おかげで体育から逃れられたぜ、と悪びれもせずに彼は返した。

「フレイが覚える技を、表にまとめてみたんだけど」

「あ、ああ。ちょっと待っててくれ」

塚田を泣く泣く振りきり、僕は立ち上がった。六時限目を終え、あとはホームルームを残すのみとなっていた。只今、生徒たちは帰りの準備を進めながら、担任の岩口を待っている。キーコの周りには、二人の女子生徒と一人の男子生徒がいた。女子生徒は穂積さんと、セミロングの髪を茶に染めた不良タイプの渚（なぎさ）さん。男子生徒は、エッフェル塔生田だった。窓際の一番前という立地の悪い席にも関わらず、よくもまあ人が集まるものだ。にこにこ笑顔は消え失せても、人を惹きつける魅力は健在だということか。

ホームルームを終えたあと、という手もあった。時間が限られる現在よりも、会話をしやすいだろう。しかし、僕は敢えてこの時間を選んだ。最後まで先延ばしにするのは嫌だと思ったのもそうだし、それ以上に、話しかけて無視されて、そのまま逃げられる心配がないというのも大きかった。

膝ががくがくに震えていた。自分が本気なのだというのを意識させられる。昼休みのときは半分逃げ腰だったのかもしれない。

まるで行進でもしているかのような硬い動きで、歩を進める僕。息が荒くなり、また吐き気をもよおしてくる。この吐き気は例の胃もたれによるものではなく、緊張による錯覚なのだろうと自分にいい聞かせる。僕の異変に気がついた生徒もいるようで、頬に幾らかの視線も感じるようになっていた。キーコ一味の中では、ヤンキー渚さんが、キーコの話に相槌を打ちながらも、真っ直ぐにこちらを見すえていた。

やがて、キーコ一味全員の視線を浴びた。彼らの目の前で、僕はついに立ちどまったのだ。ぴたっと会話もとまる。彼らだけではなく、教室全体がしんとしていた。

「何？」

声をかけてきたのは渚さんだった。がんをつける、というのだろうか。そんな目つきだ。ぱっちり二重瞼。悔しいが、美人だ。いや、そんなことはどうでもいい。とにかく、僕は答えられなかった。吐き気はピークに達している。そのときですら、吐き気は錯覚だと思い込んでいた。

渚さんがぷっ、と吹きだした。無礼にも僕を指差す。

「こいつ、なんなの？　息荒いし、きもいんですけど」

穂積さんと生田は笑わないでくれた。あまり僕と親しくないからかもしれない。まあ、渚さんもそうなのだが。キーコは僕から視線を外し、不機嫌そうな表情で窓の外に目を向けている。消しゴムを軽く上空に投げキャッチする、という動作を繰り返している。ひょ

っとしたら、僕が用のあるのは自分だと察しているのかもしれない。

ころん、とキーコの消しゴムが僕の足もとに転がった。ふう、と気だるげな息をはき、彼女が床に手を伸ばした。なぜそれを合図にしようと思ったのかは分からないが、僕は一度深く息を吸い込み、いよいよ話しかけようとした。ところが、声は出てこなかった。

その代わり、とんでもないものが滝のように口から飛びだした。

ついにキーコが口を開いてくれた。

「ギ、ギャー！」

キャー、ではなくギャーだった。

3　謝らないわけには

悲痛そうに顔を歪ませながら、キーコがばっと飛び起きた。肩を小刻みに震わせ、声にならない声で何かを喚き続けている。

「な、何してんだよ、お前！」

生田が怒鳴った。渚さんは先ほどまでの威勢のよさはどこことやら、今にも逃げだしそうな体勢で鼻をつまみながら、怯えたようにただキーコと僕を見比べていた。僕はというと、これ以上の被害を食いとめようと両手で必死に口を塞いでいた。指のあいだからポタポタとそれが床に滴り落ちている。

オブラートに包んでいうと、おふくろの弁当だった。僕の口に入ったはずのご飯や油もの尽くしのおかずたちが、原理に従わず、再びまた僕の口から出てきた。たまたま真下にキーコの後頭部があり、彼女がそれを頭から浴びてしまう形となった。

教室内の至るところから悲鳴が上がっている。非情な男子の笑い声まで聞こえる。僕にもキーコにさえも、決して好意的とはいえない視線が集まっている。

「大丈夫？」

始めにキーコに駆け寄ったのは穂積さんだった。頭どころか、肩や背中までもがおふくろの弁当まみれになっているキーコの腕をとり、そのままどこかへ引き連れていく。進行方向にいた僕がさっと脇に寄ると、近くにいた渚さんが椅子から立ち上がり、僕から遠ざかった。

キーコはもう静かになっていた。僕の目の前を通ったときに彼女

の表情を窺おうとしたが、うつむいていたためよく見えなかった。ただ、目もとを手で覆っているのは確認できた。泣いていたのだろうか。

キーコが教室を出るときには、多数の女子生徒を引き連れていた。みんなキーコを案じたり励ましたりしている。僕はぼうっとその様子を見守っていた。すでに吐き気はなく、代わりに得体の知れない喪失感のようなものを味わっていた。ああ、保健室に連れてくのかな、と他人ごとのように心の中で呟いた。

「大丈夫か」

生田が声をかけてきた。なんともいえない複雑な表情を浮かべている。他の生徒もだいたい同じような顔で、あからさまな非難のまなざしを僕に向けている者は少ない気がした。一応は、たった今の僕の行いが故意によるものではないと理解してくれているのかもしれなかった。それとも、学級内での評価が地に落ちることになるであろう、この同級生を哀れんでいるのか。

学級委員の横井（よこい）さんという眼鏡をかけた女子生徒が、乾拭き用の黄色いモップを持ってきた。それを床に散らばったおふくろの弁当にかぶせようとしたとき、一人の男子がそれを制した。

「待て待て」サッカー部の青木（あおき）という、がっちりとした体躯のやつだった。

「そんなもん拭いたら、そのモップ使えなくなっちまうだろうが」

「だってえ」唇を尖らせる横井さん。一旦目を落とし、じっとおふくろの弁当を見つめた。

「じゃあ、青木くんが雑巾で拭いてくれる」

「はあ！？」青木は目と口をひし形にした。
「ふざけんなよ。なんで俺がやんなきゃいけねえんだよ！　お前がやればいいだろ！」
「絶対無理だし」

「ぼ、僕がやりますんで」
すかさず僕はいった。敬語になってしまったのは、胸を支配する罪悪感からだった。教室の隅の掃除用具入れに小走りで向かうと、女子生徒たちが僕の動きに合わせて反動を繰り返した。磁石のエヌ極にエヌ極を近づけたときのさまに似ていた。

ひざまずいておふくろの弁当を拭きとる僕を、みんなは黙って見下ろしていた。そんなときに岩口が教室に入ってきた。一人で片づけをする僕を見て眉をひそめ、
「お前ら、手伝ってやるっていう気にはなれんのか」
と生徒たちに向かっていった。事情は聞いているのだろう。

率先して動いたのは横井さんだった。しぼった雑巾を持ってきて、僕の隣に四つん這いになる。献身的ないい子だと思う。おふくろの弁当のほとんどはキーコと一緒に保健室へ運ばれたため、床に散らばったものはもともと少なかった。もうほとんど僕が掃除し終えていたこともあってか、岩口は他の生徒がまったく動こうとしないのを咎めたりはしなかった。

水分を吸った跡はどうしても残ってしまうが、とりあえずは片づけを終えた。その頃には穂積さんを始め、キーコにつき添って教室を出ていった女子生徒たちもみんな帰ってきていた。ただ、キーコは戻らなかった。

廊下に設置された流し台で手洗いとうがいを終え、教室に戻ると、

岩口の指示で全員が席についていた。僕が席につくとき、塚田がちらっと後ろを振り返ったが、話しかけてはこなかった。

「深海はもうちょっと時間がかかりそうだから、とりあえず先にホームルームを済ませておく」

岩口はたった今の騒動を話題にはせず、淡々とした調子で必要事項を述べ、いつもよりも少しだけ早めに学級委員に終礼を促した。ただ、生徒が散開したあと、ちょっと、と僕を手招いたのだった。

「はい」

僕は教壇へ歩いた。そのときには、女子が僕から距離を置く現象は収まっていた。

「大丈夫か」

若干声を落とし、岩口は訊いた。もう一度はい、と僕は答える。

「まあ別にわざとじゃないんだから、そう気を落とすなよな。ただ明日、ちゃんと深海には謝っとけ。いいな」

またはい、と頭を下げ、僕は自分の席に戻った。

「いったい、どうしちゃったんだよ」塚田がぎこちない笑みを浮かべた。

「確かにお前、ちょっと具合悪そうだったけど、なんでわざわざ深海さんの上で吐いちまうんだ？」

「吐きたくて吐いたわけじゃない」

塚田と目を合わせず僕は黙々と、かばんに教科書やノートを詰め込んでいった。

「そうか」ふう、と呆れたように息をつき、塚田は立ち上がった。

「とりあえず、俺は部活いってくるわ。ちゃんと深海さんに謝ったほうがいいぜ」

黙って頷くと、塚田はかばんを持ってそそくさと教室から出ていった。彼は意外にも吹奏楽部に在籍していた。

一分ほど経ってから、僕も席を立った。何人かの生徒がこちらを目で追っていた。彼らの視線から逃げるように教室を抜けだし、早足で廊下を歩く。三年の教室は二階にあり、四組の教室は階段のすぐそばにある。階段を下りたすぐ脇には保健室があった。明日といわずに今、キーコに謝まるべきか、と一瞬頭をよぎったが、よしておいた。

保健室の前を通るとき、閉ざされた引き戸の向こうから女子生徒の笑い声が聞こえた。そういえば、何人かの女子が「これからキーコの様子を見にいこう」と駆けていったを覚えている。中ではきっと、あんな言葉こんな言葉で僕が罵られているのだろう。キーコも加わっているだろうか。当然だ、と僕は思った。

学校から自宅まで、距離にして百メートルから二百メートルほど。時間にして五分とかからない。あっという間に僕は見慣れた市営住宅、右側の階段に帰還した。教室を出た瞬間から、僕はずっとうなだれて歩いていた。団地の階段を上るあいだも、何度も何度も溜息を繰り返した。

兄弟はおらず、両親は共働きだった。かばんの中に忍ばせてある合い鍵をとりだし、玄関扉を開錠した。中に入り、居間として使っている和室のソファにぐったりと腰を下ろす。壁の時計を見やると、四時半少し前だった。

制服を着替える気力も湧いてこなかった。明日どんな言葉でキーコに謝ればいいのか。もし彼女がこの世のものとは思えないぐらいの、ひどい罵声を浴びせてきたら……いや、もう学校にはいきたくない。同級生たちの視線が怖い。次々とネガティブな思考が、頭の中に浮かび上がってくる。これでキーコと会話する口実ができた、というポジティブな考え方にはなれなかった。むしろ、もう彼女を振り向かせるのはあきらめるから、今日のことはなしにしてください、これからも平穏な学校生活を遅らせてください、と必死に神へ祈りたい心境だった。

しかしだ。謝らないわけにはいかない。その平穏な学校生活は、少なくとも謝らない限りは戻ってこない。明日、とにかく明日。もともと嫌われていたのだ。どんな言葉をかけられてもつらくなんてない。そう自分にいい聞かせ、ようやく僕は立ち上がれた。

もう外出する予定はないので、パジャマに着替える。赤いストライプの、目に優しくないデザインが特徴的だ。誰もいない家の中をぽつぽつと歩き、やがて僕は自室への扉を開けた。

六畳の洋室だ。ベッドがあり机があり本棚があり、おまけにテレビとゲームもあり、ビデオもある。僕は一日のほとんどをこの部屋で過ごしていた。大抵のことはこの部屋だけでこと足りるからだ。

窓からは団地の前の駐車場が見える。目線を上げれば、かすかに学校も見える。学校を見て先ほどの悲劇をまた連想してしまった僕は、その思いを振りきろうとテレビをつけた。この時間によくやっている、二時間ドラマの再放送には興味がない。僕がテレビをつけるのは、よっぽど観たい番組がない限り、テレビゲームをするときだ。ゲームをしていればきっと嫌なことを忘れられるはずだ、と僕は思った。

ドラグーンザネクストを始めたのだが、わずか二分足らずでハウスコードの電源を落とした。このゲームは、パーティキャラクターの名前を自由に変えられる。ヒロインの名前にキーコとつけた、いつかの僕を心底呪った。

だいぶ前に飽きていた、スリーディーアクションゲームを始める。シージーによる美しい自然の中を、銃を持ってほふく前進するミリタリーゲームだった。久々にプレイするとこれがまた予想以上に面白くて、僕はすぐに夢中になってしまった。ミッションを幾つかクリアしたところで時計を見ると、もう六時を過ぎていた。

はっと僕はコントローラーを持つ手をとめた。隣の部屋から人の気配を感じる。僕はそっとベッドの上に乗り、壁に耳を寄せた。

隣の部屋とはつまり三〇四号室、キーコの家の洋室だった。以前遊びにいったときは和室までしか入らなかったが、洋室がキーコの部屋としてあてがわれているのを僕は知っている。なぜなら、聞こえてしまうからだ。キーコ一人のときはさすがに無理だが、彼女が自室に友達を呼んだとき、賑やかな話し声が、薄い壁を伝わってかすかに響く。キーコには兄もいたはずだが、聞こえるのは決まって女子の声なので、洋室はキーコの一人部屋だと僕は推測している。

本日も女子の声のみ聞こえる。残念ながら、話している内容までは分からない。とにかく、楽しげな様子だ。少なくとも、キーコを含めて三人はいる。放課後に保健室を訪ねていた女子たちか。部活終わりだろうから、部活仲間かもしれない。

そういえば、と僕は思った。キーコはすぐ隣に住んでいるのだ。明日学校で謝るよりも、夜のうちに彼女の家を訪問したほうが賢明

なのではないか。周りの生徒の目を気にしなくて済むし、キーコもさすがに自宅の玄関先で僕に罵声を浴びせたりはしないだろう。それにだ。できるだけ早く謝りたかった、といえば誠意を示すことだってできる。

これだ、と僕は決心した。キーコの友達が帰ってから、直接彼女の家に出向こう。

となると、お詫びの品として菓子折りでも持っていったほうがいいだろうが、そんなものはない。買う金もない。さてどうするべきかと悩んだ挙句、僕はテレビを置いた台の下から、プラスチックのケースをとりだした。そのケースの中に僕が所持するハウスコードのソフトが山ほど入っており、面白かったものを幾つかキーコに贈ろうと考えたのだ。

女の子受けしそうな可愛らしいアクションゲームとパズルゲームを三本。人にあげるのは惜しかったが致し方ない。とにもかくにも、これで準備は整った。あとはキーコ一人になるのを待つのみだ。

なんだか随分と気持ちが楽になった。楽になったところで、日課にとり組むとしよう。僕はベッドの下に潜り込み、奥から一冊の雑誌を引っ張りだした。

4　凍死してしまいそうなほど

七時前におふくろが帰宅し、半頃に夕食のため自室を出た。そのときまで、まだキーコは友達を帰していないようだった。居間のテーブルで冷凍食品の餃子をおかずに黙々と食事をしていると、八時頃には父さんが帰ってきた。

「急に降りだしたな」

姿を見せるなり、苦笑しながら父はいった。身長が百八十以上あり、やたらと背広の似合う人だった。その背広の肩辺りが、雨に濡れている。すっかり日も暮れており、窓の外に雨が降っている様子は見てとれなかったが、耳を澄ますと確かにしとしとと雨音が聞こえた。

「あら」おふくろは意外そうに口をすぼめた。

「私が帰ってきたときは、晴れてたのに……」

四十過ぎの父に対し、おふくろはまだ三十五だ。明るい茶のショートボブカットの髪型と、すらりとした体型が、実年齢よりも更に若々しく見せている。

「おい、陸（りく）。ちゃんと勉強やってるか」寝室で着替えを済ませた父が僕の隣に座り、僕の肩に腕を回してきた。ティーシャツにジャージという姿だ。

「頼むから公立の高校に受かってくれよ。うちじゃあ私立の学費なんて払えないからな」

「分かってるよ」

ぶっきらぼうに答え、食後のアイスコーヒーをストローで啜った。

今年に入ってから、顔を合わせるたびにそう念を押されるようになった。そりゃあ、僕だって我が家の財政難には薄々と勘づいているのだから、公立の高校に受かるレベルの成績を保とうとは心がけている。

「なんだ、その態度は」眉間にしわを寄せる父。

「お前はなあ、いつも、いつも、ゲームばっかりして、ちっとも試験勉強をしとらんだろうが。三年になったらもう、入試なんてあっという間だぞ」

「ちゃんと合間には勉強してるよ」おふくろがなだめるように、父にいった。それから僕に顔を向ける。

「ね？　陸ちゃん」

僕は答えず立ち上がり、浴室へ向かった。「風呂から上がったら勉強しろよ」と、背中越しにまた父の威圧的な声を聞いた。

キーコの部屋から、賑わいは消えていた。ただ、夕食をとったり入浴したりしているうちに、今夜彼女の家を訪ねるのが億劫になり始めていた。

やはり、緊張するのだ。学校での例の件を謝るとかどうこうじゃない。キーコと二年ぶりに口を聞く、という当初からの不安が、今になって胸に押し寄せてきた。思えば事件の直前、渚さんたちと話をするキーコの前に僕が姿を現したときも、彼女は僕を無視し、はっきりと拒絶の意志を示していた。

今夜中に謝るべきだ。しかし、冷凍食品の夕食と緊張のせいで、また吐き気をもよおしている。こんな状態で会えば、同じ過ちを繰り返してしまうのではないか。それに、急に降り始めた雨のことだ

ってそう。雨の日に訪ねられるのはあまりいい気がしないのではないか。ただもう一方で、それらの考えが単なる逃げのとりつくろいだというのを理解している自分もいた。

僕は大きく溜息をつき、お詫びのゲームソフトが入ったビニール袋を手からさげた。結局はいくことにした。あとはもうなるようになれ、と天に任せるしかない。

部屋の窓から外を覗いた。降りはかなり激しくなっている。まずは、こんな時間のこんな雨の中にどこへ出かけるのかを、両親にきちんと説明しなければならない。僕が夜一人で出歩くなんてことは、今までに一度もなかったからだ。もちろん、正直にいうつもりはない。何か上手い口実を考える。キーコの家にいくだけで、たいして時間はかからないだろうから、休んでいた友達に宿題のプリントを渡しにいく、といったところでオーケーだろう。今の時間まですっかり忘れていた、とつけ加えよう。

僕は部屋を出て、居間でテレビを観てくつろぐ両親にそう告げた。二人とも若干訝っていた様子だったが、「気をつけていきなさい」と送りだしてくれた。

玄関外の階段を下りる歩調よりも、胸の鼓動のほうが幾分早かった。「ふう」と何度も大きな息をはきながら、僕はしきりに服装の乱れを直した。ティーシャツにジャケット、チノパンツ、まるで休日に街へ繰りだすかのような格好だった。今からキーコと会うのだから当然だ。

一階まで下りたところでビニール傘を広げ、壁に沿って一直線に隣の階段を目指した。ばたばたと雨が傘を打つ。足もとを濡らさないよう注意する。

肌寒さもあり、ぐっとあごを締めて僕は歩いた。あっという間に中央の階段にたどりつき、そこを上る前に一度、深呼吸をした。緊張感は拭えなかったが、意を決し歩を進めた。

くすんだ蛍光灯の光のもと、僕は立ちどまる。三階のキーコの家の、玄関の前までやってきた。実は、ここまでは過去に何度も足を運んでいた。いずれも小学校時代だが、先刻の口実のように、キーコが風邪で欠席した際に連絡帳やプリントを届けたり、宿題がまるで分からず彼女に写させてもらったりもした。ああ、あの日々はどこにいってしまったのだろう。これからの展開次第で、また戻ってきてくれるだろうか。

もう一度、深呼吸をした。キーコは父を早くに亡くしており、おばさんと、僕とは面識のないお兄さんとの三人暮らしだ。おそらく最初はおばさんが顔をだすはず。夜分遅くに申し訳ありません――いや、お久しぶりです、が先か。

キーコのおばさん、それからキーコとの会話を五分近くはシミュレーションし、僕はようやく呼び鈴を鳴らした。同時にふと、事前に電話をしておくべきだったか、と頭をかすめたが、すぐに振り払った。そんなことをして、くるな、といわれたら、もう二度と話しかけることなんてできないような気がする。

ガチャ、と扉が外に開いた。はい、といった応答がまるでなかったため、僕は心持ち緊張感を高めた。そして、僕の予感は当たっていた。

中から身を乗りだして、ドアノブを握る人物。それは紛れもなくキーコだった。薄い長袖のティーシャツ。下にはスウェットのパン

ツをはいていた。その髪の毛や服には、おふくろの弁当をかぶった名残などもちろんなく、生まれ変わったかの如し清潔さに溢れていた。玄関の白熱灯はついておらず、キーコの背後から生活的な明かりが届いていた。

僕はとり乱した。キーコ自らが応対する可能性を、なぜか一パーセントも考えていなかった。「ああ」とか「うう」とか、呻き声に近いものをただ口にするだけで、こんばんは、の「こ」の字も出てこない。一方のキーコは無言、しかも無表情で、哀れな僕の姿をじっと見つめているだけだった。

「ご、ご、ご、ごめん」

とようやく言葉らしい言葉が僕の口から出た。キーコの反応はない。表情も読みとれない。僕が頭を下げていたからだった。

「いいよ」

僕はばっと顔を上げた。キーコは同じ表情のまま少しだけ顔をうつむかせていた。こんなときになんだが、とても可愛いらしく見えた。

「わざとじゃないんでしょ。だったら、いつまでも根に持ったりしない」

「もちろん、わざとなんかじゃないよ」

こくりこくりと何度も頷き、僕は興奮気味に話した。すると、つばがキーコの顔に飛んでしまい、彼女が顔をしかめてそれを拭った。

「ごめん」とまた恐縮して謝る。

「もう用はない？」冷たい口調でキーコはいい放った。徐々に扉が閉められていく。

「だったらまた明日ね。おやすみ」

確かにひとまずの謝罪は終えたが、だめだ、と僕は思った。このまま帰ってしまってはきっと、明日の朝にはもと通り。僕らの関係はこれっぽっちも修繕しない。

「ちょっと待って」

がっしりと扉をつかむ。キーコは訝しげに眉を寄せた。

「渡したいものがあるんだ。お詫びの品っていうか」ビニール袋を差しだす。

「キーコ、ゲーム好きだったよね。この中に何個か入ってるから、もしよければ遊んでくれない？」

キーコがビニール袋を受けとる隙に、僕はまた扉を全開させた。袋からケース入りのソフトをまとめて抜きだすキーコ。一つずつ、表裏のジャケットをじっくりと眺める。やがて顔を上げ、こう訊ねてきた。

「これって、なんのソフト？」

「なんの、って……ハウスコードのだけど」

「ああ、シーエムでよくやってるやつね」納得したように頷き、キーコはソフトを袋に直した。そしてそれを僕に突き返してきた。

「悪いけど、ゲームなんてとっくの昔に卒業しちゃったし、ハウスコードも持ってないから」

がーん、と僕はショックを覚えた。よく考えたら、昔、キーコの家で遊んだのは、当時ですら古くなっていたはずの数世代前のハードだった。その後彼女はゲームから遠ざかり、最新ハードのハウスコードを所持してすらいなかったというのか。

「そ、そうか」落胆を表情にださないようにそう呟きつつ、僕は袋を受けとった。
「じゃあ今度、もうちょっと古いやつを改めて持ってくるから」
「もういいってば」面倒くさそうにキーコはかぶりを振った。
「ゲームなんかしないっていってるでしょ。学校でのことはもう本当にいいから」
また扉を閉めようとする。僕はなんだか無性に悔しくなり、気がつけば叫んでいた。
「待ってくれ！」
辺りが静かなだけに、その声は団地中に響き渡ったかもしれない。キーコの家族が様子を見にくるかとも懸念されたが、奥から誰かが顔を覗かせることはなかった。
唖然とした表情のキーコに向かって、僕は声を落としつつも続けた。
「昔はよく、一緒に帰ったりしたじゃんか。キーコの家に遊びにいったりもしたじゃんか。中学に入ってからも、僕はずっとそのままの関係を続けていくつもりだったのに、なんでキーコは僕を避けるんだ」
キーコはうろたえるように目を泳がせた。
「別に避けてるわけじゃ……」
「避けてる」キーコの言葉をさえぎり、僕はきっぱりといった。
「僕はずっとそのことを気に病んでいた。だから、久々に同じクラスになったのを機に、キーコに話しかけようとしたんだ。それがあ

んなふうになってしまったのは本当に悪かったと思う」
ほんの少しだが、涙声になっていた。自分でも、情けないなあ、とは思う。「でもさ、結局なんなんだよ。わけも分からずにキーコに嫌われて、こうして謝りにきても冷たく突き放されて。そもそもの理由を教えてくれよ。僕が何かをしたのか？　何かしたなら謝るから」

それだけ話し終えたとき、キーコは考え込むように足もとに目を落としていた。互いに沈黙し、十秒ほどが経過した。やがてキーコはふっ、と和らいだ息をはき、僕と目を合わさずに呟いた。

「私が悪かったよ。ごめん」

目の前がパッと明るくなった気がした。
絶えず降り続ける雨音が、まるで僕への喝采の音に聞こえた。僕とキーコの二年越しの確執が、ついにこの瞬間幕を閉じた。まだそうと決まったわけじゃないのに、僕は確信していた。

気まずそうに視線を下げ、キーコは続けた。
「りっくんのこと、嫌いになったってわけじゃないんだ。ただ、二人で仲よくしてるところを友達とかに見られたりするのが、すごく恥ずかしく感じるようになって」
希望通り、思春期説が当たっていた。

「りっくんには悪いなって思ったんだけど、でもだんだんと環境とかも変わって、そのうちりっくんのことが頭から消えちゃったというか、なんていうか……」

もう充分だった。キーコが突然僕を邪険に扱い始めた理由がはっきりしただけでも、大満足だった。

「また、一緒に遊ぼうよ」
笑顔を作り、僕は敢えてそういった。「え？」と僕を見つめるキーコ。
「この二年間のことは僕も忘れる。だからさ、前と同じように友達として、残りの一年間を仲よくやっていこうよ」

少しのあいだ、逡巡していたが、
「前と同じように、とはいかないかもしれないけど」キーコはこくりと頷いた。
「分かった。仲よくやっていこう」
そして、ほんのわずかであるも笑みを浮かべた。

僕は涙腺が緩むのを必死でこらえた。もはやいつ以来だったかも分からない久しぶりの、僕に向けられたキーコの笑顔を前にして、胸を震わせた。

「これ、受けとってよ」
ハウスコードのソフトが入ったビニール袋を、キーコにまた返す。
「え？　だって……」
キーコは戸惑いの混じった表情を見せた。
「そのうちキーコのお兄ちゃんが、ハウスコードを買ってくるかもしれないじゃん。どうせ僕はやらないんだし、キーコが持ってたほうが有意義だ」
気持ちが昂っていた。ゲームソフトのことなんて本当はどうでもいい。ただ、どんな話題でもいいからキーコといつまでも話していたかった。何せ、二年間もおあずけを食らっていたのだから。

「えー」
眉をひそめつつも、キーコは目を細めていた。笑っている。僕との会話を楽しんでいる。
「そうだ」えへへ、と僕はにやけた。
「仲直りしたんだから、仲直りの握手をしよう。さあ、手をだして」
冗談じみてそういい、右手を差しだす。すると、キーコの顔が一瞬強張ったように見えた。さすがに調子に乗り過ぎたか、と僕は不安になったが、すぐにキーコの表情は緩んだ。杞憂だったと分かり、胸を撫で下ろす。
「りっくん」
キーコは優しげに微笑んだ。
その天使のような笑顔に僕は釘づけとなり、思わず頭をぼうっとさせた次の瞬間、
バン！　と不自然な衝突音が足もとから響いた。
「え？」
僕は地面に視線を落とした。どこかで見た気がするビニール袋が、コンクリートの上に寝そべっている。ビニール袋の中からこれまた見覚えのあるゲームソフトが飛び出ており、その中の一つは階段を数段下りた先にまで達していた。
はっ、とキーコに視線を返すと同時に、僕は背筋に氷点下の寒気を覚えた。
彼女は先ほどまでとは打って変わった、氷よりも冷たいまなざしで、僕を睨みつけていたのだ。

「今日のことは忘れてあげる」その口調すら、凍死してしまいそうなほど冷たかった。
「だから、もう二度と私に話しかけないで」
勢いよく扉が閉ざされる。キーコを引きとめようと突きだした手が、空しく宙をさまよった。
それから約五秒後、雨音だけの静まり返った空間に再び扉が開く音。僕の背後、キーコの家の向かいの玄関だった。しわがれた女性の声を背中に聞く。
「ちょっとさあ、いい加減にしてくれない。あんたら、今、何時だと思ってんの？」
返事どころか、僕は後ろを振り向きもしなかった。口をぽっかりと開け、ひたすらキーコの家の玄関扉を見つめ続けた。

5　理性を失ってしまうのは

翌朝登校すると、キーコは渚さんや数人の男子に囲まれて楽しげに話をしていた。僕が教室に入ってきた瞬間一人の視線が僕に移り、それに伝染してキーコや他の面々も順々に僕を一瞥した。そして、くすくすと顔を見合わせて笑っていた。ひょっとしたら僕の話題かもしれなかった。

「よお」

塚田が何ごともなかったかのような、いつもの朝の挨拶をしてきた。挨拶を返し、僕も自分の席につく。

「昨日レベル上げやってたらさ、トードランド地方にミニモンが出たぜ」

「ミニモン？」

「知らねえのかよ」仕方ねえなあ、というふうに塚田は溜息をついた。

「伝説のモンスターだよ。滅多に出てこないけど、倒したらミニモンソードっていう凄まじい武器を落とすんだぜ」

「倒したのか？」

「倒せるわけないだろ」

僕は何も答えず、教材をかばんから机の引きだしに移していった。僕のそんな様子を見て、塚田もつまらなそうに前を向き直してしまう。少しだけ罪悪感を覚える。いつもなら僕も積極的にゲームの話に乗ろうとするのだが、今日はさすがにそんな気になれなかった。

「手塚くん」

珍しく女子に声をかけられる。「ん？」と僕が声のしたほうに顔

を向けると、視界の隅で塚田も顔を動かしていた。

声をかけてきたのは佐野(さの)さんだった。面長な顔と細い目のせいで男子の人気はまるでないが、将来美人になる可能性を秘めているともいわれる。キーコと同じようなショートカットをしている。彼女は中学三年間を通して僕とずっと同じクラスだった唯一の女子生徒だ。女子との接点がほとんどない僕からすれば、親しいといえる部類に入る。彼女の後ろにはもう一人、目つきの悪いおさげ髪の女子がいた。三宅(みやけ)さんといって、こちらはほとんど口を聞いたことがない。

佐野さんは意地の悪い笑みを浮かべていた。

「深海さんにゲームソフトをあげたんだって？」

「え？」僕は目を丸めた。

「う、うん。もう知れ渡っちゃったんだ」

三宅さんが口もとを手で覆う。明らかに笑いをこらえている。彼女をちらっと見てから佐野さんは続けた。

「あのさあ、深海さんは手塚くんと違ってゲームオタクじゃないんだから、そんなもんあげたって逆効果に決まってるでしょ。私だって、深海さんの身になったら怒りたくもなっちゃうよ」

「えっ」思わず立ち上がりそうになるが、自重する。

「キーコ、なんかいってた？」

それから横目でキーコを見やる。とり巻きたちはみんな、時折こちらに探るような視線を入れていたが、彼女だけはそっぽを向き続けていた。

「名前で呼んでるし」
三宅さんのその言葉に、佐野さんたちはアイコンタクトをとって笑い合った。かつての僕とキーコの関係を知らないのだろう。僕は何もいわずに二人を睨みつけた。

佐野さんは答えた。
「『あんなもん持ってきたって許すか。せっかくならケーキでも持ってこい』って笑ってた」
その光景を思いだしたのか、三宅さんがまたぷっと吹きだす。僕の目の前にきて、正々堂々と大笑いしてほしいと思う。

「いや、本当にさ。手塚くんを傷つけようと思っていってるんじゃないよ。ただのアドバイス。二年まで同じクラスだったよしみというかさ。とにかく、今度はちゃんとケーキを持って謝りにいきなさい」

「キーコは……」
僕がそういいかけたところで、チャイムが鳴った。朝のホームルームの開始を告げるものだ。佐野さんと三宅さんは、僕の言葉の続きを促すこともなく、そそくさと自分の席についた。

岩口が姿を現して、教壇で話を始めた。そのあいだ、僕はキーコの横顔を眺め続けていた。

佐野さんの話が本当なら、キーコは自分をゲームオタクの仲間にされたのに腹を立てたというわけか。キーコがいまだにゲーム好きだと思い込んでいた昨日までならいざ知れず、今となってはその気持ちも分からないでもなかった。

しかし、そうなるとあれはなんだったのか。

すでにゲームソフトを差しだした後だったはずだ。僕を嫌いになったわけではない、距離を置いたのは友達の目を恥ずかしく感じたから、これからはまた仲よくしよう、イーティーシー……

あれらの言葉が嘘だったのなら、なんという残酷な女なんだ。一度は僕をその気にさせておいて、そこから一気に地獄へ突き落とす。悪魔だ。悪魔に魂を売った女のみが成せる業だ。

キーコが後ろを向き、穂積さんと一言二言交わして無邪気に笑った。なぜだ。なぜそんなふうに笑える。昨夜のお前の蛮行のせいで、僕は夜も眠れなかったのだ。責任など微塵も感じていないのか。

もはやショックや悲しみといった感情は消え失せていた。僕の中に渦巻くのはただ、如きの知れない憎悪のみ。あいつを懲らしめてやりたい。僕と同じように地獄の底まで案内してやりたい。何かないか、何か――。

岩口の話が終わるとほぼ同時に、僕はそれに思い当たった。今年の正月のことだった。

正月といっても、三が日を過ぎた五日や、六日頃だったと思う。何年ぶりかに、おふくろの兄、つまり伯父一家が我が家を訪ねてきた。家族構成はうちとまったく同じで、父母に息子一人の三人。ただ、伯父さんはおふくろよりも十以上年が離れていて、従兄弟の和男（かずお）くんもすでに成人していた。僕が物心ついたときにはすでに学生服を着込んだ中学生だったはずで、今ではもう二十代半ばになるのかもしれない。

和男くんは家に足を踏み入れるなり、僕の部屋へきた。手にさげた紙袋を見て、僕は期待で胸を昂らせたものだ。彼も僕と同じく病的なゲーマーであり、新旧さまざまなハードやソフトを所持していた。僕の家にくるときはいつも、それらを山のように紙袋に詰めてきてくれるのだ。ただ遊ぶだけでなく、太っ腹にも片っ端から譲ってくれることだってあった。

「陸、こいつを見てみろよ」

和男くんが袋からとりだしたのは、携帯電話ほどの小さな機器と、更に小さな人差し指ほどの物体、それにコードのようなものだった。手にとってそれらを眺めてみるも、それらがなんなのか判別はつかなかった。

「カメラだよ」と和男くんが口にしたとき、黒ぶち眼鏡の奥の二重瞼の瞳がいたずらっぽく光った。僕は訝しげに「カメラ？」と訊ね返した。ゲームじゃなかったことに若干の落胆を覚えていた。

「俺の友達が開発した超小型シーシーディーカメラなんだ。こいつは本当にすげえよ」

携帯電話のほうの端子にコードを差し込んだ。そしてそれをテレビに繋ぐ。それからしばらく理解不能な操作を携帯電話に施し、最後にテレビの電源を入れた。

テレビには意味不明な映像が映しだされていた。そう思ったのも束の間、画面はすっとスライドし、今度は人の横顔をとらえた。僕だった。

「え？」と和男くんに顔を向けると、彼はにやにやしながら、人差し指大の機器のほうを指でつまみ、それを僕に突きつけていた。

「すごい」和男くんとテレビの画面を見比べて僕はいった。
「無線式なんだ」
和男くんの持つ機器、あれがカメラ本体なわけだ。そこからはコードが伸びていない。
「無線式でこの画質、惚れ惚れしちまうだろう」
そういいながら和男くんはカメラを自分に向けた。画面にはふざけてあごをしゃくらせる、ひげ面の男が映っていた。被写体は汚いが、画像は本当に綺麗だ。ハイビジョンとまではいかないが、携帯の動画などに比べればだいぶ勝っている。
「このカメラの最も優れた部分を教えてやろうか。なんと、バッテリー交換の必要がないんだ」
「バッテリー……」その方面の知識はあまりないが、とてもすごいことなのだろうと思う。
「どうして必要ないの？」
「レンズから、蛍光灯の明かりをバッテリーとしてとり込むことができる」レンズの部分を指でちょんちょんと示す。テレビ画面が暗転を繰り返す。
「すなわち明かりの点く屋内にとりつけてさえいれば、まったくいじらなくても半永久的に作動し続ける。まあ、消費のほうが若干早いから停止しちまうこともあるけど、丸一日もすればもと通りらしい」
僕は和男くんからカメラを受けとり、それをしげしげと眺めてみた。
「和男くんの友達、すごいね」

「ああ」和男くんは深々と頷いた。
「イナバっていうんだけどよ。あいつと友達じゃなかったら、そんなハイテクなもん一生お目にかかれなかったよ。買えば五十万を下らないだろうしな」

「ご、五十万！？」僕はさっとカメラを床に置いた。
「そ、そのイナバって人、これを和男くんにくれたの？」

「そうだ。そして今度は俺が陸にやる」

「ええ！？」
僕が大きな声を上げてしまったので、和男くんは閉ざされたドアの向こう、居間の両親たちを気にした。なぜ両親たちに聞かれたらまずいのかは分からなかったが、囁き声に変えて僕はいう。
「もらえるわけないじゃん。こんなすごいもの僕が持ってても、なんの役にも立たないよ」

「もらっとけって。俺が持ってたらマジで理性を失いそうになるんだ」
理性を失いそうになる、というその言葉の意味も僕には理解できなかった。

「でも、こんなにすごいもの……」
「まあ、ただ短所だって一応はあるぜ」僕の言葉をさえぎって和男くんはいった。
「チューナーとの距離が半径十メートルを超えちまうと、途端にノイズが増えちまう。二十メートルを超えるともう何も映らねえんだ」
携帯電話ふうの機器のほうがチューナーなわけだ。

「十メートル？」
「だから、あんまり実用的じゃねえんだよ」悔しそうな表情を見せる和男くん。
「でもさ、俺の家の隣にはめちゃくちゃ美人な女子短大生が住んでやがるんだ。もう、本当に悶々としちまってさ。ついそのカメラを使いたくなっちまうわけよ」

ようやく僕は合点がいった。そしてひどくうろたえた。

「これってもしかして、盗撮用なの？」
「その限りというわけじゃない」厳しい顔つきで和男くんはかぶりを振った。
「事実イナバも、表向きは家庭用の防犯監視カメラとして開発した」
「家庭用監視カメラなのに、部屋の中でしか使えないの？」
「ああ」
当たり前のように和男くんが肯頷したそのとき、僕の頭の中に自分でも身震いするような恐ろしい考えがよぎった。

そうだ。僕の隣にはキーコが住んでいる。キーコの部屋はこの部屋と壁一枚を隔てて密接している。間違いなく十メートルの範囲内だ。

「やっぱりいいよ」と僕は激しく首を横に振った。
「やっぱり五十万なんて荷が重いし、使い道もないから和男くんが持っててよ」

和男くんは赤の他人の女子短大生。僕は積年片想いしている同級生。理性を失ってしまうのは間違いなく僕のほうだ。

「そうか、残念だな」
力なく和男くんがそう口にしたところで夕食に呼ばれた。

夕食のデリバリピザをわいわいと楽しんで食べたときには、すでにカメラのことなんて頭から抜けていた。やがて日が変わる直前に、伯父一家は我が家をあとにしていった。そして僕が部屋に戻り、寝る前にやりかけのロールプレイングゲームを進めておこうとテレビをつけたときだった。

テレビの画面はまだ僕の部屋を写していた。和男くんがカメラを忘れていったのだ。

後日電話でそのことを告げると和男くんは、「すっかり忘れちまってたな」と楽しそうにいった。
「次いくときにはちゃんと持って帰るから、しばらくあずかっといてくれよ。それまではまあ、自由に使ってくれていいから。ただ、もし捕まっても俺やイナバの名前はだしちゃだめだぜ」

僕はがくっとうなだれ、受話器を置いた。

再び和男くんが訪ねてきはせず、それからはや三ヶ月以上が経過した。

幸いにも僕が理性を失うことはなかった。何せ、ばれたときが怖い。もしばれたら、と想像するだけで首を吊りたくなる。他人の家にこっそりと忍び込むのもそうだし、小型とはいっても隠す場所を誤ると簡単に見つかってしまう。ばれる可能性は計り知れない。

もちろん、キーコを大事に思っての選択でもある。いくら自分自身にといえども、好きな女の子のプライベートを他人の目に晒すだなんて許せなかった。そして、罪を犯してまで彼女のプライベートなど知りたくはない、という一端のプライドまであった。

キーコに使わないとなると、意外とカメラはつまらないものだった。始めの頃は確かに珍しくて、遊び道具として色々と試してみた。台所に設置して料理を作るおふくろをこっそりと眺めたり、窓の外に向けて景色を眺めたり。いずれも初日で飽きた。いつしかカメラに対する興味は薄れ、机の引きだしの中に封印したまま、今の今まで僕はその存在を忘れていたのだった。

6　日課

「キーコ」

三時限目の終わりだった。教室の後方のドアから聞き覚えのある女子の声。僕は声の主を確認したり、キーコの反応を盗み見たりはせず、塚田とのゲームトークに集中しようとした。しかし、その肝心の塚田が思いっきり視線を右往左往させている。キーコが声の主のもとへ駆けていくのも、しっかりと目で追っている。おい、と僕は彼に話の続きを促した。

「ああ、悪い」気まずそうに塚田は笑った。

「そんでさ、バトルパレスの最上階まで登りつめたら景品がもらえるわけだけど、もうそこまできたら装備もほとんど整っちゃってるじゃん。これ以上強い武器なんて必要ねえよ、っていう」

「ああ、確かにね」

しかしながら、後方のキーコたちの会話に耳を傾けざるを得なかった。やたらとでかい声で話しているのだ。相手はおそらく一組の田辺（たなべ）さんだろう。キーコと同じ陸上部で、昔からかなり仲がいい。彼女の日焼けした肌や男子のような短髪、まつげの長いパッチリした目を想像しながら、聞き耳を立てる。

「制服はどうした？」

「捨てたに決まってんじゃん」

その時点で、予想通り昨日の事件の話題なのだと見当をつける。

「スカートもスカーフも全部。いくら洗っても、もうあんなもん着れないし」

スカートも、って、スカートはたいして汚れてないだろう、と僕

は心の中でぼやく。いや、それよりも、悪いのは確かに僕だが、よくそんな話を僕に聞こえるようにできるなと思う。ただし、悲しみや怒りは湧かない。ガラスのように空虚な呆れのみだ。

「あ、まだちょっと匂うね」
「やめてよ、洒落になんないから」ころころとキーコは笑った。
「学校でもツツミ先生に借りてシャンプーさせてもらったけど、家でも十回ぐらいシャンプーしたんだから」
「冗談だって。部活のときもそんなに匂ってなかったから大丈夫。あ……」

以後、二人の会話はひそひそ話になってしまった。ようやく僕の存在に気づいたのか、それともここからが本当に聞かせられない話なのか。もちろん、そのボリュームダウンに僕は何も関係していない可能性だってある。

「お前にいっとかなきゃいけないことがあるんだ」
塚田が囁き声でいった。顔を近づけてきたので僕もそれにならうが、肩に溜まったふけが目に入り、すっと身を引く。
「朝、お前がくる前だけどさ。深海さん、大柳(おおやぎ)に頼んでお前をボコってもらうとかって話してたんだ」

「え？」
大柳といえば、我が校屈指の問題児ではないか。他校の生徒と揉めごとを起こすのは日常茶飯事。二年のときはカツアゲで補導もされていた。最近は学校にくるのも稀で、噂によると地元の暴力団の事務所に入り浸っているとかなんとか。僕も小学校時代に何度か一緒に遊んだことがあり、その当時はただ明るいやつで、これほどの不良になるとは思ってもみなかった。それにしても、キーコがなぜ大柳なんかと。

「一発ヤらせれば、なんでもいうこと聞いてくれるから、ってさ」
僕は絶句した。
なんたるビッチ。そこまでお前は落ちぶれたのか。僕が馬鹿だった。純白の初雪のようだったお前の心は、泥まみれの靴にまんべんなく汚されていたのだな。
「別にわざとやったわけじゃないのに、ちょっとひどいよなあ」
塚田は納得のいかなそうな表情で、力なく首を横に振った。
「別にいいんだ」
僕がそういってふんと鼻を鳴らすと、塚田はえっ、と目を丸めた。
そうだ。キーコがどうしようもない女だというのは、朝の時点ではっきりしている。もう何を聞いても同じ。溜まりに溜まった生ゴミの中に、もう一つ残飯が投げ込まれるようなもの。もちろん、大柳の名前に怯んだりもしない。僕の心はすっかり固まっている。
僕は無言で立ち上がり、窓辺に歩いた。キーコと田辺さんをちらっと一瞥すると、二人は慌てて目を背けた。人を小馬鹿にした笑みを浮かべている。笑えばいい。笑えばいいさ。今はそうして笑っていられるかもしれないが、お前はそのうち地獄を見るのだ。
ほんの少しだけ窓を開けた。昨晩から降り始めた雨は、今も尚続いていた。風はほとんどなく、水滴が顔にかかることはなかった。僕は両手の人差し指と親指で長方形を作り、その中を覗き込む。どんよりとした灰色の空の下、サッカーボールが一つ転がっていた。
今朝カメラのことを思い立ってから、僕はずっと考えていた。ど

うやってキーコの部屋に侵入し、どこにカメラを仕かけようかと。もはや良心などなかった。これはキーコへの復讐だからだ。彼女が僕に行った仕打ちと同等のダメージを与える武器はそれ以外になかった。ばれてしまうのでは、という不安も感じない。というよりばれてしまってもかまわない。僕は何よりも大切なものを失った。その何よりも大切な、キーコ自身の手によってだ。もう何も怖くない。何も失うものはなかった。

その後の授業中も、教師の言葉や黒板の文字を頭に入れる振りをしながら、僕は計画を練り続けていた。

実はというと、侵入経路についてはもとから考えがあった。まだカメラに飽きていなかった頃、もし本当にキーコの部屋に仕かけるなら、と仮定して想像を巡らしてみたことがあった。その結果、一つの名案にたどりついたのだ。

ベランダだ。

団地の各部屋には、二つ並んだ和室に沿ってベランダが設けられていた。ベランダは独立しておらず、三階なら三階で端から端まで一続きとなっていた。隣の部屋とは板のようなもので隔てられてはいたが、多少アクロバティックな動きをすれば簡単に隣のベランダへ移ることができた。

ただ、問題が二つ。まずは、そのアクロバティックなさまを誰かに見られないかだ。ベランダ側には、駐車場を挟んで団地の隣の棟がある。こちらの建物と作りも向きも同じで、洋室の窓や階段が見える。大きな木がある程度は視界をさえぎってくれているが、もうこればっかりは神に祈るしかないだろう。運がよければ目撃されない。悪ければされる。僕にできるのは迅速な行動を心がけるぐらい

だ。

もう一つは、ベランダから部屋の中に入れるか。ベランダへ通じるガラス窓には、中からクレセント錠をかけられた。これがかかっていたならもう引き返すしかないだろう。まさか、ガラスを割って侵入するわけにはいかない。侵入した形跡を残してはいけないのだ。これも結局神頼みになるだろうか。

しかし、他に侵入経路は見当たらない。ベランダを使うしかない。危険と隣り合わせなのは、分かりきったことだ。ここで思考停止するわけにはいかない。

さて、侵入経路以上に問題なのは、キーコの部屋のどこにあの人差し指カメラを仕かけるかだ。隣同士ではあるが、どのような家具が置かれ、キーコがどのように生活しているかなどは想像もつかない。わざわざ危険を犯して侵入するのに、まともに覗けないような場所に隠すのでは意味がない。

その場での判断力が要求されるだろう。まずはこの目でキーコの部屋の内装を把握し、それから絶対に見つからない場所を探し当てる。ハヤブサのように俊敏でなくてはならない。さっと見て、さっと考え、さっと隠し、逃げる。僕なんかにできるだろうか。いや、やるしかない。できる、と断言するしかない。

迷いの吹っきれた晴れ晴れとした気持ちが時間を忘れさせたのか、あっという間に放課となった。授業中に練りに練った作戦を、更に煮詰めながら僕は帰宅していた。ふと空を仰ぎ見て、何かに急き立てられるような圧迫感と、使命感を覚えた。

昼頃から雨はやみ、現在では陽が差すようにまでなっていた。これは天のあと押しなのかもしれない。雨が降っていてはさすがに痕跡が残ってしまいそうなので、来週まで引き延ばすつもりだった。そして、明日からは休日だ。キーコが外出していたとしても、平日は留守にしているだろう彼女のおばさんや兄さんが在宅かもしれない。

やるしかない、と僕は思った。来週まで待っていては、また僕の気が変わってしまう可能性がある。そもそも、晴れているのに来週まで待つ、という行為自体、気が変わった証拠といえるのではないか。それに、天が味方についた今日なら、何をやってもうまくいきそうな気がする。

決めた。今日だ。今日こそが吉日なのだ。

やがて団地に帰りつく。階段を上るあいだも思考は続いた。帰ったらまず動きやすい服に着替え、頭の中でキーコの家に侵入するシミュレーションを重ねる。準備が整ったらキーコの家に電話をかける。家人の不在を確認するためだ。誰かが出てしまったときは無言できるのが賢明だろう。そんなことを考えつつ、僕は三〇五号室の玄関扉の鍵穴に、鍵を差し込んだ。

「ん？」

鍵が回らない。いや、すでに開錠されているのだ。まさか。

「よお」

居間に入ってきた僕を、父さんが片手を上げて迎えた。畳みに寝転がり、肘をついてテレビを観ている。上半身にパジャマ、下半身にトランクスというだらしのない姿だ。僕は溜息をつきながらかば

んを下ろし、制服を脱ぎ始めた。

「休みだったの？」

「明日から出張でな」テレビに目を向けたまま答える。

「特別に休みをもらったんだ。悪いがのんびりさせてもらうぞ」

そういえば、今朝家を出るときにそんなことを母と話していたような気がする。僕はパジャマに着替え、自室へ入った。明かりも点けずベッドに腰かけ、またはあと溜息をついた。

何が天のあと押しだ。もしキーコの家が留守だったとしても、僕の家に家族がいるのならどうにもならないじゃないか。やむを得ないので、作戦実行は来週に延期する。

それにしても、なんだか根こそぎ気分をそがれてしまった。ひどく疲れを感じる。こんなときはやはりあれ、日課を済ませるに他なかろう。

僕はベッドの下から雑誌をとりだした。女の人のあられもない写真が多数掲載されている雑誌、つまりエロ本だった。僕の日課というのはその、世間一般にいうオナニーってやつだ。それを知り、始めたのは、丁度中学に上がった頃だったか。だいたい学校から帰ったこの時間帯、一日の疲れを癒すかのように僕は毎日それに励む。当然、このことを僕以外に知る者はいない。エロ本が家族に見つかっていなければの話だが。

「あっ」

ふと思いつき、エロ本をしまった。今まで僕は頑なに、キーコを性の対象にしようとはしなかった。彼女がけがれてしまう、という思い込みからだった。しかし、実際にはもう彼女はとっくにけがれ

てしまっている。それならば遠慮はいらない、と思う。復讐の第一歩として、本日はそれを覆してしまうというのも、なかなかいい案ではないか。

しかしながら、キーコの裸の写真など持っていないので、普通の写真から想像を膨らませることにする。僕は勉強机の上に立てかけてあった小学校の卒業アルバムを手にとった。中を開き、キーコの写真を探す。

深海紀伊子（きいこ）と書かれたその上部の写真を見た途端、僕は一気に萎えた。

キーコはあのにこにことした笑顔を燦然と振りまいていた。ああ、なんて魅力的なのだろう。一点の翳りもない純粋な笑顔。僕の心の中にはいつもこの子がいたのだ。確かにキーコはけがれてしまった。でも、写真の中の彼女の姿もまた真実。愛しい。とてつもなく愛しい。僕はこんなに愛しい女の子のプライベートを奪おうとしているのか。

ふっ、と僕は柔らかく息をはいた。なんて愚かな企みをしたものだろう。やめだ。今のキーコを裏ぎるのは、かつてのキーコを裏ぎるのと同じ。そしてそれは最終的に自分への裏ぎりにも繋がるのだ。

冷静になったところで部屋の明かりを点け、僕はゲームを始めようとテレビの電源に手を伸ばしかけた。

「あれ？」

そのときになって初めて気がついた。ハウスコードの本体がない。テレビ台の下からこつ然と消えてしまっている。

「あれ？　あれ？」

部屋の中をくまなく探すより前に、僕はドアノブを握った。

居間の父さんに声をかける。

「僕の部屋にあったハウスコード知らない？」

「売った」

僕に背中を向けたまま父は答えた。

「は？」

「まずは勉強に精をだせ」依然、父はこちらに顔を向けない。

「来年ちゃんと公立高校に受かったら、同じものをまた買ってやる。それまでは我慢しなさい」

僕は必死に平然を装い、「そう」とだけ返事をしてから自室に戻った。バタンと扉を閉めた瞬間に、心の奥底からコールタールのようにどろどろと黒い感情がこみ上げてきた。

そんなに息子を犯罪者にしたいのなら、僕は何もいわない。お望みどおり、やってやるさ。

再び卒業アルバムを手にとる。乱暴にページをめくりながらベッドの上で仰向けになる。キーコの笑顔が現れた瞬間、僕はパンツをずり下げる。

「やってやる。やってやるからな」

僕の右手が火を吹いた。

7　モニタリング（前書き）

夏のラジオって曜日の感覚一日遅れてるんじゃね。
そうお思いの方、ごめんなさい。
最近、なんか火曜が忙しいのです。暇だから火曜なのに。

7　モニタリング

決行のときが訪れた。

月曜日の放課後。キーコが田辺さんと部室方面へ歩いていくのを見届けてから、僕はそそくさと帰宅した。

もちろん家には誰もいなかった。おふくろは夕方まで仕事。父さんは夜更け以降に出張から帰る予定だ。ただ、この世に絶対はない。僕は玄関の扉を閉めると、中からサムターン錠を回しておいた。時刻は午後四時前。天気はばっちり晴れ。

土日の二連休を含めたこの三日間、僕は意外にもすっきりとした気持ちでいられた。ひょっとしたら先週の、初めてキーコをおかずにしたオナニーが効いたのかもしれない。あれは僕の中での決意の表れだったのだ。もう引き返さない。これまで築き上げてきた僕とキーコの関係は粉々に崩れ去ってしまった。あのときの快感を思いだすたびに僕はそう再認識させられた。今日学校でいくらキーコを視界にとらえても、葛藤や後悔などまるで起こらず、「ああ、可哀想に。いよいよ君は僕にプライベートを奪われてしまうのだな」と他人ごとのように哀れむばかりだった。

哀れんではいても作戦は実行する。当然だ。

僕は居間と隣り合う、両親の寝室として使われている和室のタンスから、真っ黒なジャージを引っ張りだした。一年ほど前、ジョギング用にと父が自分のために購入したものだったが、二、三度使っただけで、そのまま忘れ去られている。これを勝負服にしようと決めていた。決め手はなんといっても黒という色。実際に目立ちにくいというのもあるが、これから他人の家に忍び込むのに派手な服を

着ていては失礼だ、という礼節的な意味合いもあった。

ジャージに着替えた僕は続いて軍手をはめた。休日を利用してこっそり買っておいたものだ。うちにもどこかにあったはずだが、場所が分からず、母に訊ねようにも怪しまれそうなのでできなかった。軍手を使用する理由は、指紋を残さないためである。どう転べば「指紋を採取される」という状況になるのかは定かではないが、できるだけ証拠は残したくないと思った。指紋が重要な証拠になってしまうということぐらい、いくら僕だってさすがに心得ている。キーコの部屋に仕かけるカメラの指紋もきちんと拭きとっておいた。

この時点で時計は四時十分を差していた。隠し場所を決めきれず、キーコの部屋に長居する可能性だってある。ためらいはないはず。さっさと始めよう。

僕は心臓をばくばくいわせながらキーコの家に電話をかけた。発信音が一度、二度、三度と続く。十回待ってから、受話器を下ろす。よし、留守だ。カメラと、粘着の強い小さなフィルムテープをポケットに入れ、外の様子に気を配りながらベランダへ通じるガラス窓を開けた。

隣の棟の窓には要注意だ。何気なく景色を眺めている住人がいるかもしれない。ただ、あちらに見えるのならこちらにだって見えるはず。窓辺に人の姿があれば、しばし行動を自重すべきだ。

ベランダに身を潜める場所がないのはやや痛い。おふくろは朝のうちによく布団を欄干に干して出かけるが、今日に限ってはない。腰を屈めながら、しばらくじっと目をこらして前方を眺めていた。

「いける」と僕は思った。駐車場にも窓にも、一応は人影らしきも

のがない。素早い動作で、隣のベランダとを隔てる板の前まで歩く。もう一度辺りを見回しながら、板にしがみつき欄干に乗り上げる。足の指紋を残さないため、そして足音を軽減するために靴下をはいており、滑りやすい。運動神経の乏しい僕なら、充分に注意しなくてはならない。ここは三階なのだ。

しかしながら至極あっさりと、キーコの家のベランダへ降り立った。頭はコンクリートのようにクレバーだった。そんなことを考えた矢先、どこかから、ぱん、と布団の叩く音が聞こえ、飛び上がりそうになった。必死に心を落ちつかせる。どうやら下の階かららしかった。大丈夫。僕の姿は見えない。

二ヶ所のガラス戸のうち、そばにあったほうに近づき、引いてみる。なんと、あっさりと開いた。まさかこんなにことがスムーズに進むとは。いや、感激している場合ではない。ここで目撃されたのではすべてが水の泡だ。

不在は確認しておいたものの、念のため中の様子を窺う。明かりは点いていない。やはり人の気配はない。僕はガラス戸の隙間にさっと身体を滑り込ませた。

思わず感慨深くなってしまう。そこは僕の家では居間として使われている部屋だった。そして、昔キーコの家に遊びにいったとき、ゲームをした場所でもあった。僕は中心に立ち、部屋を見回してみた。テレビの位置は変わっていない。タンスも確かこの場所だった。この置物も見覚えがある。変わっていることといえば、ゲーム機の姿が見えないのと、隣の部屋とを隔てる襖が閉ざされているのぐらいか。

さて、と。こうしてはいられない。僕が用のあるのはキーコの部

屋のみだ。僕はなるべく足音を立てないように、そっと薄暗いダイニングを抜けて奥の洋室へ向かった。僕の家と左右が逆なので少し混乱してしまう。

ガラス戸は開け放っていた。もしキーコや家族が帰ってきたら、すぐに逃げだせるようにだ。その場合は、もはや隠密にこだわる余裕はない。何か顔を隠すもの、せめて帽子ぐらいはかぶっておくべきだったかと初めて気がつく。しかし、もう遅い。

洋室への扉のドアノブを回した。かちゃ、という音と共に、こちら側へ扉が開く。窓がレースのカーテンで塞がれており、室内はやたらと暗かった。電気を点けるのははばかられ、僕は薄闇の中おそるおそる歩を進めた。

部屋に入った瞬間からキーコの匂いを感じていた。いや、キーコのそばでくんくんと鼻をひくつかせたことなど一度もなかったが、なんとなくそんな感じがした。脂っこさの微塵もない清爽感溢れる香りだった。

フローリングの床には水色のカーペットが敷かれていた。部屋の中心、蛍光灯の真下に甲板が透明なガラスでできた小さなテーブルがあり、上には鉛筆立てのみ置かれていた。勉強机はない。教材などは普通の本棚に並んでいた。部屋の隅には意外にも、台に置かれた小型のテレビがあった。人の声でさえかすかにしか届かないのだから、テレビの音が僕の部屋へ漏れてこないのは当然といえる。ディーブイディーデッキの存在も確認できたが、ゲームのハードらしきものの姿は見えなかった。

ベッドもあった。僕のパイプ式の荒涼としたものとは違い、木製で暖かみがあった。布団や枕も淡い桃色で女の子らしかった。僕の

部屋を女の子が使ったらこうも変わるのだな、と妙に納得してしまった。

はっ、と僕は気がつく。入り口から見て左側にベッドは置かれている。そちらは僕の部屋の側ではないか。そして、僕もキーコの部屋の側にベッドを置いている。つまり僕らは、壁一枚を隔てて毎晩添い寝しているわけか。

何を思ったかベッドに腰を下ろし、枕に顔を埋めてみた。ああ、キーコの匂いがする。部屋に入ったときの印象とは違い、フルーティーでエレガントな、要するにシャンプーの香りであったが、とにかくキーコの匂いだ。

いや、いや、いや。僕はいったい何をしているのだ、とすかさず立ち上がる。今にもキーコや、彼女の家族の階段を上ってくる音が聞こえ始めそうだ。急がなきゃいけない。

とはいえ緊張感はほとんどなかった。頭はバウムクーヘンのようにクレバーだ。思えば、この家に電話をかける瞬間が緊張のピークだったような気がする。すでに後戻りのできない場所まで足を踏み入れてしまっている、という自覚の賜物かもしれない。

僕はまず天井の四隅を見た。駄目だ。カメラを仕かけられるポイントはない。それならば逆に床はどうだ。駄目だ。せっかくなら見下ろし加減に設置したい。そのほうがキーコのプライベートをよりはっきりと把握できるように思う。

たんたんたん、とかすかに足音が聞こえた。僕はぴたっと静止する。誰かが外の階段を上ってくる。そのときばかりはさすがに心臓を高鳴らせたが、足音が上方へ向かい、どこかの玄関扉が開閉され

る音を聞いた瞬間に、すっと落ちつきをとり戻した。

さあ、さっさとカメラを仕かけてここを抜けだそう。僕は引き続き部屋を見回した。壁かけのジグゾーパズル、窓のカーテンレール、候補は次々と挙がったが、いずれも危うい。見つかってしまう想像しか浮かんでこない。天井付近のダクトホールはなかなかいい隠し場所だと思ったが、本棚のすぐ上にあり、大きく視界がさえぎられる。うーむ、どうするべきか、と途方に暮れかけたとき、そいつが目に入った。

本棚とその隣の原色多用のポップな柄の洋服ダンスとの隙間だった。カメラが丁度収まりそうな幅だ。僕はそこに近づき、値踏みするように眺めた。やがて、今度は窓の外をちらっと確認し、思いきって明かりをつけてみた。そしてすぐに消した。大丈夫だ。明かりを点けてもここは陰になる。次に隙間に背を向けてみる。ベッドを正面にとらえられる。

自分でも驚くほど行動は素早かった。本棚はそれなりに重たかったが、なんとか動かすことができた。ただ、女の子の力では無理だろうと思い、また一つ確信を得た。更に、ほこりにまみれた空間があらわになって、この場所は長いあいだいじられていないというのを知った。

洋服ダンスの側面、丁度僕の目線ぐらいの高さにテープでカメラを貼りつける。前面から二センチほど奥の位置だ。あまりに前方過ぎると危険だし、後方過ぎると視界は悪くなり、それにバッテリーがとり込めない。入念に向きを確かめてから、本棚をもとに戻しカメラを挟む。

僕はベッドに腰かけて隙間を眺め見てみた。まったく分からない。

ただの細長い闇だ。しかけた自分でさえ、カメラがどこにあるのか分からない。少しずつ近づいていき、鼻先の距離でようやく影が見える。レンズは真っ直ぐにこちらをとらえている。

よし、パーフェクトだ。見つかりっこない。あとは脱出するのみ。僕は痕跡を何も残していないか注意を払いながら、部屋を出た。テープはきちんとポケットの中。問題はない。何も問題はない。

侵入した際とは打って変わって早足だった。つま先歩きで家の中を縦断し、開かれたままのベランダに飛び込む。静かにガラス戸を閉める。一応、人目を気にするのは忘れていない。帝国スパイのように、視線を辺りに散らしながら、僕は入ったときと同じルートで我が家へ帰りついた。

「ついに」居間のソファに倒れるように座りながら僕は呟いた。
「ついにやった。やってやった」

時刻は五時前だった。湧き上がる達成感と心地よい充実感に、このまま眠ってしまいたい衝動に駆られたが、こんな怪しい姿を家族に見られるわけにはいかない。僕はまず着替えを済ませてから、ジャージをもとの位置に直し、軍手やテープを自室に持ち入れ机の引きだしにしまった。玄関の鍵を開けておくのも忘れない。

気分は高揚していた。いざ実行に移してみると、なんのことはない。あっさりと済んでしまったではないか。カメラが見つかる？　誰かに目撃されている？　ノンノン。カメラが見つかったってそれが僕の仕業だという証拠はない。誰かに目撃されていたって、別に何も盗んじゃいない。カメラが見つかって、誰かに目撃される。両方が起こって初めて僕の犯行がとり沙汰されるのだ。いったいその可能性は何パーセントだ。限りなくゼロに等しいのじゃないか。い

やあ、実に愉快だ。じい、酒を持ってこい、ってな。

カメラの映像はまだ観ない。楽しみは夜までとっておくことにした。僕はまた卒業アルバムで作業のように日課を済ませたあと、ネクストコードの電源を入れた。ハウスコードの一世代前のハードだ。ハウスコードを売却されたからってくじけたりはしないのさ。真のゲーマーは新旧にこだわらない。

ツーディーの忍者ゲームで敵を丸焼きにすることはや何時間。窓の外には薄闇が広がり、扉の向こうでは母が夕食を準備する音が聞こえていた。時刻は六時半になっていた。隣のキーコの部屋から物音はしないが、なんとなく人のいる気配はする。

「りっくーん。そろそろご飯食べる？」

ノックと、母の呼ぶ声。キーコを丸裸にするのは、食後でも遅くはないか、と僕は思う。満腹を撫で、つまようじで歯をしーしーしながら、あまりにも甘く、あまりにもほろ苦いデザートを堪能するのだ。至ってひねりはないが、それをモニタリングと称しよう。

僕はキーコをモニタリングする。

8　僕も知らない

父さんはまだ帰っておらず、母と二人の夕食だった。出張から帰る父のために用意された白身魚のあんかけ、茄子のおひたしといったおかずは、僕にとってはあまり好物でなく、僕は腹八分目以下で夕食を終えた。僕がダイニングテーブルの席を立ち、また自室にこもろうとしたとき、おふくろが「デザートに芋羊羹があるわよ」といった。それも父の好物だ。少し迷ったが僕はかぶりを振った。デザートなら足りている。

部屋の明かりを点け、ふうと大きな息をはきながらベッドに座った。何も映っていないテレビのモニターをしばらく見つめていた。そこにキーコがいる。誰も知らないプライベートなキーコ。気を置く必要など皆無な、自分だけの空間。

さあモニタリングさせてもらおうじゃないか。僕はチューナーを繋ぎ、テレビの電源を入れた。画面が真っ暗なままなかなかきり変わらなかったので、一瞬「おや」と目を丸めてしまったが、なんのことはなかった。チューナーの電源を入れ忘れている。

以前遊び道具としていじっていたとき、この高性能カメラについていくつか分かったことがあった。チューナーに文字入りの小さなシールが貼ってあるのだが、それによると「使わないときはチューナーの電源をきってください」らしい。その理由なのだが、おそらくチューナーの電源さえきっていればカメラ本体のバッテリーも消費しなくなるのだ。電源を入れっ放しだと、丸一日経てば映像は届かなくなっていた。電源をきっておけば、バッテリーがきれる気配はまるでなかった。これを律儀に守れば、少なくともキーコのいるあいだぐらいはずっとモニタリングし続けられるはずだ。

他にも、チューナーについてはコンセントプラグと一体化されていて、これをプラグ受けに差し込んでバッテリーを充電することや、映像を録画したいときはテレビではなくビデオデッキにチューナーを繋げばいい、ということなどを覚えた。改めてよくできた機器だと思う。和男くんの友達は本当に、なんという発明をしてくれたのだろう。そして和男くんは、よくこれを僕なんかに譲ろうとしたものだ。

でも、まさか僕が本当に犯罪を企てるとは夢にも思わなかったろうな。よっぽど臆病者に見えたのだろう。もう遅い。遅過ぎるぜ。カメラはもうキーコの部屋に設置済みだ。

僕はチューナーの電源を入れた。プツッと音を立て何かに繋がる気配。やがて真っ暗だった画面が徐々に光を帯び始め、見覚えのある景色を映しだした。

淡いピンクの布団と枕が乗ったベッド、右端に見きれたガラス製のテーブルと鉛筆立て。間違いない。キーコの部屋だ。棚の隙間にしかけているので左右が若干途ぎれているが、ほとんど問題ない。この部屋のプライベートは完全に消え失せている。

食い入るように画面を見つめる。一つだけ気になることがあった。キーコの姿が見えないのだ。明かりを点けっぱなしにしたまま、風呂にでも入っているのだろうか。風呂か。その選択肢もあったなと思う。キーコのプライベートだけでなく、セーラー服に包まれた少女の裸体を盗み見る。実に魅惑的だ。

ただ、それでも部屋の中には勝らない。入浴はあくまで生活の一部。ここではそれ以上に深い、キーコの決して人に語ろうとしない

秘密まで暴けるような気がした。

五分ほど経過したとき、画面の隅で動きがあった。あれは、手だ。テーブルの上ににょきっと手首が現れた。もちろん、怪談はやや季節外れである。キーコだ。キーコは死角にちゃんといた。先ほどキーコの部屋に入ったときの記憶を、映像に結びつけていく。キーコが今座っているのは、テレビの前だ。

思わず壁に目をやった。

どうやらキーコはテレビを観ているらしい。なんとも拍子抜けした気分だ。なんの番組を見ているのかな、と時計を確認し、月曜日のテレビ番組表を頭の中に思い描いてみたが、空しくなってやめた。そのままベッドに寝そべり、ぼうっとキーコの動向を眺め続けていたが、まるで動きはなく、やがてチューナーの電源をきった。

扉がノックされる。僕はさっとチューナーとネクストコードのハードをテレビの台の下に隠した。

「ちゃんと勉強してるか」背広姿の父さんが僕の応答を待たずに、部屋に足を踏み入れてきた。綺麗に片づいた勉強机を見て、眉をひそめる。

「いったいお前は何を考えてるんだ。そろそろ中間考査も始まるだろう。学校の試験の成績も内申書にしっかりと響いてくるんだぞ」

「まだ一ヶ月も先だよ」

僕は父の顔を見ずに答えた。内心ではネクストコードが見つかってしまわないかひやひやしている。この瞬間に限っていえば、ベッドの下のエロ本以上に見つかってほしくないものだった。

「一ヶ月も先っつったってなあ」
ふうと溜息をつきながら、父はフローリングの床に座り込んだ。居座る気だ。僕は心底うんざりとした。
「いいか、陸。三年は今までとは違うぞ。試験前とかそんなのはどうでもいいんだ。少なくとも一日一時間はノートを開いて、それを毎日積み重ねていかねばならん。お母さんに聞いた話だがな、隣の深海さんだって毎晩遅くまで勉強してるそうだ。お前も彼女を見習え」

二年前にキーコとの関係がこじれて以降も、彼らはよく彼女を引き合いにだす。親同士の交流は続いているのだ。さすがに僕とキーコのつき合いがなくなっているのは知っているはずで、なんとなく嫌味だなと感じる。

「ちゃんと勉強するから」
そういって父を追いだし、僕は渋々と机に向かった。父のいうこともっともだ、とは思う。中学三年というこの年が、よもや一生を決めうるほど大事な時期だということを理解しているつもりだったが、心のどこかになんとかなるだろう、と楽観視している部分があるのも確かに自覚している。

せめて一時間だけでも勉強をしておこう。しかしながら、意志とは裏腹に身体が動いてくれない。教材の入ったかばんは足もとに立てかけてあるのに、腰を屈めてそれをとりだすのが耐え難く億劫なのだ。要するに、意志にやる気が伴ってこない。

父の言葉を思い起こす。キーコは毎晩遅くまで勉強しているのだという。そうだ、と僕は閃いた。時刻は八時過ぎ。そろそろ彼女も勉強を始めているかもしれない。おそらくあのガラス製のテーブルを使うのだろう。

僕はぴょんと椅子から飛び降り、再びテレビの前に陣どった。テレビとチューナーの電源を入れる。父にいわれた通り、キーコを見習ってみることにする。勉強に精をだす彼女をこの目で見れば、僕にもやる気が生じてくれるかもしれない。なんて有意義な、覗きの目的だろう。

カメラの前にキーコはいた。ただし、予想していたようにテーブルに向かっているわけではなかった。テーブルは死角に追いやられ、彼女はカーペットの上に仰向けていた。両手を後頭部に沿え、一度、二度、せっせと上半身を起こしている。腹筋だった。さすがは陸上部だ。

壁を一瞥する。壁のあちら側ではキーコが一所懸命腹筋に励んでいるのだな、と思う。だからどうした。

ただ、目論見とは違いしも、僕は映像に見入ってしまった。特に過激な格好をしているわけではない。なんの変哲もない黒いティーシャツとハーフパンツだ。しかし、画面の中のキーコは紛れもなくプライベートのキーコなのだ。これはすこぶる重要である。僕に覗かれているとも知らずに、素のままの自分をさらけだすキーコ。その事実を胸に刻みつけて見ていると、エロ本とは全然違う、今までに体感したことのない興奮を覚えた。

腹筋は続く。身体を曲げるたびに顔が歪み始める。頬も紅潮していた。このカメラにおける最大の弱点は、音声を拾えないことだ。ああ、なんてもどかしい。もし音声までカバーしてくれたら、彼女の「はあはあ」という息づかいも堪能できるのに。

無意識のうちに手がズボンにかかった。いつの間にか、あそこも

熱を帯びていた。瞬きさえもせずに画面を見つめたまま、僕は右手でがっしりと〈息子〉を握った。と、その矢先、キーコはくるりとこちらに正面を向け、ベッドにもたれかかってしまった。どうやらノルマを終えたらしい。うなだれながらしばらく肩で息をする。

汗に湿った部屋着をその場で脱ぎ捨てやしないかと期待し、僕はしばしスタンバイしていたが、無駄だった。キーコは立ち上がり、部屋の明かりを消してしまった。暗くて何も見えないが、おそらくは部屋を出ただろう。

パンツを上げて、僕はふうと息をはいた。チューナーの電源を落とす。

まあいいさ。時間は無限にある。今夜はまだ序の口。これからキーコは、僕に多種多様な姿を見せてくれることだろう。もし他人に知れたら穴に閉じこもってしまわざるを得ないほどの、あられもない、プライベートだからこその嘘偽りない姿を。

歴史の教科書の、比較的興味のある幕末部分だけを黙読し、その日の勉強を終えた。以後忍者ゲームで暇を潰し、キーコの部屋をモニタリングすることもなく、十一時過ぎに就寝した。

それから三日が経過した。学校でのキーコはもちろんなんの変化もなく、いつもバラエティ豊かな級友に囲まれ、馬鹿話を繰り広げていた。僕と視線が交わったことも何度かあったが、先日のゲロ事件の影響と見るしかないだろう。

一方、家庭でのキーコも、僕の期待に沿うような生活をしてはくれなかった。

恥ずかしげもなく宣言しよう。差し当たっての目標は、キーコの着替えを覗くことだ。しかし、彼女は着替えてくれない。カメラの前で着替えてくれない。いや、そうじゃないかもしれない。着替えているのかもしれない。ただ、僕は部屋の明かりが消えていたら、バッテリーの消費を嫌ってすぐにチューナーの電源をきるため、画面にキーコが現れるのはいつも、すでに着替えを済ませ、部屋でくつろいでしまっているときなのだ。悪循環とはこのことをいう。電源をきればバッテリーの消費を抑えられるという本当は便利なはずの機能が、足を引っ張っている。キーコが部屋に入ってきて電気を点ける瞬間さえ、まだ一度も目撃していない。

まあ、誰にも知り得ないキーコのプライベートを僕だけが把握できているのだし、とりあえずはよしとするか。

キーコは部活終わりの六時過ぎに帰宅し、部屋着に着替えた上で七時頃まで時間を潰す。ベッドの枕もとの台に置いたシーディーラジカセで、音楽鑑賞をしているらしい。ボリュームは小さめで、どんなものを聴いているのか壁伝いには届かない。七時に、おそらく夕食のために部屋を出てから、八時から九時のあいだにまた戻ってくる。それからしばらくテレビを観て、腹筋を始める。腹筋は毎晩必ず行う。回数は三十回と定めているようだが、昨夜は二十七回に妥協した。すぐにまた部屋を出、次に姿を見せる際はレモン色のパジャマを着ている。おそらく腹筋のあと、すぐに風呂に入っているのだろう。

就寝の瞬間は一度だけとらえた。それまでベッドに横たわり、携帯電話で誰かと話をしていたのだが、十二時になった瞬間ぱっと通話をやめ、何かに急かされるように慌てた様子で消灯してしまった。夜更かし厳禁のようだ。

どうだ。僕ほどキーコに詳しい級友は存在するか。もしかしたら、キーコを主人公にしたノンフィクション小説でも書けてしまうのじゃないか。キーコクイズを出題されたら、難なく十問中十問正解できるだろう。

「深海って、家帰ったら何して過ごしてんの？」

耳の穴が十倍ほどまでに広がった。チョモランマ生田だ。図々しくもキーコの机に両肘を置いていた。床に膝をついている。キーコは普通に椅子に座り、腿の上に小柄な女子生徒、青柳（あおやぎ）さんを乗せていた。

「別に何もしてないよ」けろっとした顔でキーコは答えた。本日はヘアピンで前髪を両側に分けており、若干雰囲気が違って見える。

「シーディー聴いたりテレビ観たり、ぼうっとしたり」

あわわ、と僕はうろたえた。僕しか知らないことを、生田なんぞに教えるな。

「どうした？」

平島（ひらしま）が僕の顔を覗き込んだ。ひょろっと細長い生徒で、間の抜けた顔つきが特徴だ。

「いや、別に」

僕らは黒板の前にいた。たった今昼食を食べ終えたところである。平島、そして塚田と三人で、今年の夏の新作ゲームソフトについて語り合っていたところだ。なぜ黒板の前なのかと問われれば、特に理由はなかった。

「そんでさ」塚田が続ける。

「スターズが初めてギャルゲーを作ったらしいのよ」

「マジで？」平島は大げさに驚いてみせた。
「あの硬派なスターズが？　やるねえ」
話題は最新ハードのハウスコードのソフトになるのは必然だ。僕は来春までハウスコードとおさらばなので、二人がただ恨めしい。それならばキーコたちの話に耳を傾けるべきだ、と判断する。
「そういえばキーコってさあ」青柳さんが後ろを振り向いた。頭の左右のおさげの一つが、キーコの目に直撃する。
「毎朝ジョギングしてるんでしょ。すごいなあ」
「マジで？」話題はまるで違うが、平島とまったく同じような驚き方をする生田。
「すげえ、尊敬しちゃうわあ、俺」
「三十分ぐらいだけどね」指先で目もとを押さえながらキーコは頷く。
「朝の空気ってめちゃくちゃ気持ちいいよ。そのあとのご飯も超美味しいし、二人もやれば？」
「私、キーコと一緒に走ろうかな」
「あんたは足手まといになるからだめ」
キーコが青柳さんの頭をはたく。「痛あい」と青柳さんが頭を押さえ、笑いが起こった。
「おい、どうした？」
今度は塚田に訊ねられる。「なんでもない」と答えながら僕は明らかに不機嫌だった。

なんだこれは。納得がいかない。毎朝ジョギング？　僕も知らないことをぺらぺらと他人に喋りやがって。僕はキーコの部屋を覗いているんだぞ。モニタリングしているんだぞ。それなのになぜ、生田すらだし抜けない。おかしい。まったくもって納得がいかない。

9　こっそりキスをするような

着替えを覗かなくては。着替えを覗かなくては。着替えを覗かなくては……

五時限目の数学、六時限目の国語の授業中、僕は心の中で陽気な九官鳥のようにそう繰り返していた。

着替えを覗かなくては。

本日は六時になった瞬間からテレビの前に張りつき、キーコの帰宅を待つのだ。彼女にはお兄さんがいるはずだから、僕のように居間や寝室で着替えはしないだろう。それに彼女の部屋には、ちゃんと洋服ダンスらしきものがあったじゃないか。きっと部屋で着替えているはずだ。

六時限目終了後。キーコがこちらへ歩いてきたため、僕はどきっとした。あまりに強く念じ過ぎて、僕の心の声が聞かれたかと思った。でも違った。僕の左前、塚田の隣の席の、内藤（ないとう）さんに用があったようだ。

「ユウちゃん」気安い調子で声をかけるキーコ。前方から机に両手をつき、肘を伸ばしていた。

「今日さ、部活終わりにカラオケいくんだけど、一緒にこない？」

「誰がくんの？」

茶髪ショートカットの内藤さん。その太い声と太い身体は、多くの男子に不評である。

「えーっと、ヒメちゃんと、チイちゃんと、ナスノくんと」そこで

いたずらっぽい笑みを浮かべる。
「生田くん、かな」
「えー？」顔は見えないが、はにかんだ様子の内藤さん。ただ、声は太い。
「どうしよっかなあ。最近あんま歌ってないから自信ないなあ」
僕は国語の教科書を広げ、授業の復習でもしているかのような顔でちらちらとキーコを盗み見ていた。まるで目が合わないということは、やはり彼女は僕に無関心なのか。
一つ気になっていた。部活終わりにカラオケにいくのなら、キーコの帰宅はいつもより遅れるというわけか。それじゃあ何時を目安にテレビに張りついておけばいいのだろう。下手すれば夕食の時間とかぶってしまうじゃないか。今日こそは着替えを覗きたかったのに。ああ、キーコはいつ頃帰るのだろう。
「そのカラオケって何時頃まで？」
昔のままの僕とキーコの関係なら迷わず訊ねていただろう。知りたい。知りさえすれば、食事の時間だって上手く調節してやるのに。
またキーコを一瞥した瞬間、ついに彼女と目が合った。僕は慌てて目をそらそうとしたが、どうも様子がおかしかった。なぜか内藤さんや塚田までもが身をよじり、僕に顔を向けているのだ。
「は？」内藤さんが前を向き直す。
「あの人もくるの？」
「いや」
キーコはかぶりを振る。それから訝しげな目つきで僕を見つめた。

僕はだんだんと、自分がしでかした業を自覚し始めていた。

「おい」塚田に顔を寄せる。

「俺、今なんかいったっけ」

塚田は「ああ」と頷いた。彼も戸惑ったような表情だ。

「カラオケいつまでやるのか、って訊いたじゃん」

全身にどっ、と冷や汗が湧いた。

誤解だ、といっても信じてもらえないだろう。なぜなら誤解じゃないからだ。そうだ、確かに口にした。気になっていたことをごく自然に、友達のように訊いてしまった。きっと動転していたのだ。キーコがカラオケの話を持ちだしたその瞬間から。突然の不測の事態で、彼女の着替えを覗くという展望が危うくなり、自分が自分でなくなってしまった。

頼むから、なかったことにしてほしいと思う。しかし、その願いはあまりにも都合がよ過ぎた。

「なんであんたに教えなきゃいけないわけ？」

キーコが口を開いた。彼女の家を訪ねたあの日、二度と話しかけないでといわれたあの日以来の会話だ。

「い、いやさ」僕は懸命に平静を装った。とはいえ、いいわけはこんなものぐらいしか思いつかなかった。

「最近、カラオケ店に教師のチェックが入ってるらしいじゃん。あんまり遅くならないほうがいいよ、って忠告しとこうかと思ってね」

いつの間にやら、渚さんと青柳さんが集まってきていた。おそら

く、ヒメちゃんとチイちゃんだ。不穏な空気をかぎつけたのかもしれない。ただ、二人とも楽しそうに見える。いわゆる野次馬に近い。

「意味分かんないし」キーコが呆れたように息をつき、僕から顔を背けた。

「それじゃあ、ユウちゃん。部活終わったら校門前ね」

「オッケー」

内藤さんの返事を聞き、キーコが去っていく。それにならって渚さんが彼女のあとを追う。間違いなく只今の出来事について訊ねるのだろう。そしてまた、陰で嵐のように僕を罵倒するのだ。

「どうしたの？」

「わっ！」大型の番犬のような驚声を上げてしまった。突然目の前にカエルの顔のどアップが現れたのだ。

「ちょ……びっくりした」

「へへへ」と屈託のない笑みを浮かべる青柳さん。目が大きくて、とても愛嬌のある顔立ちだが、見方によってはやはりカエルに似ている。

「一緒にカラオケいきたいなら、ちゃんとキーコにいわなきゃ」

ぱん、と僕の背中を叩く。実は彼女と口を聞くのは初めてなのだ。なんというフレンドリーな子だろう。

「ねえ！　えーと……塚田くん？」

「あ、ああ」

塚田も女子生徒を苦手にしている。曖昧に返事をして、すぐに前を向く。

「いや、別にいきたいわけじゃないし」
僕はぶっきらぼうに答えた。内心はわりと悪くない気分だ。なんだかんだいって、女子に話しかけられると嬉しい。

「塚田君ってばちょっと、冷たーい」
僕の話など聞いちゃいない。青柳さんは後ろから塚田に抱きついた。顔を真っ赤にした塚田が安易に想像できる。二人の体格差から、まるで大岩にしがみつくアメンボだ。ちょっとだけ羨ましかった。

「よーし、そろそろホームルーム始めるぞ」
教室の前のほうで数人の女子といちゃついていた岩口が、大きな声を上げた。帰りのホームルーム前の時間は、普段は岩口がくるのを待つ時間だが、六時限目が国語のときは、岩口がホームルームをする気になるのを待つ時間である。全員が席につき、ホームルームが始まった。

ホームルームの時間を利用し、僕は思考を巡らせていた。今日中に着替えを覗くのが難しくなったことによる落胆が功を奏したか、極めて冷静な分析ができた。その結果悲しい答えにたどりつく。

無駄だ。キーコは部屋で着替えない。

単純な論理だ。キーコは毎朝ジョギングをする。ということはそのあとにシャワーでも浴びないと気持ちが悪い。
ではシャワーを浴びたあと部屋着に着替えるか。違うだろう。すぐに学校へいくのだから、どうせなら制服に着替えるだろう。
ならば制服は自室に置いているのか。まさか。キーコにはお兄さんがいる。浴室とキーコの部屋は目と鼻の先だが、男のいる家を思春期の女の子が下着で歩き回ったりするものか。つまり、制服は脱衣所に置いている。

なぜ脱衣所に置いてあるか。前日帰宅したときに、そこで着替えたからだ。
穴はたくさんあるような気もするが、とりあえずは証明終了。

当然、僕の心はますます沈んでいく。キーコの部屋の洋服ダンスには、おそらく休日用の、ちょっと気合いの入った服だけが収められているのだろう。少なくとも休日までは、キーコの着替えを覗けない。ああ、一刻も早く……一刻も早く覗きたいのに。

ホームルームを終え、学級は放課した。部活へ向かう塚田を送りだした僕は、修行僧のようにまぶたを閉じ、深呼吸をしながら、なんとか開き直ろうとしていた。

休日を待とうじゃないか。平日の学校帰りにわざわざカラオケにいくような子が、休日にどこにも出かけないとは思い難い。明後日、土曜日はなるべく早起きして、朝からばっちりモニタリングしてやろう。

自らを納得させるように一度あごを引いて、そのまま立ち上がろうとしたときだった。

廊下が騒がしい。よそのクラスの男子生徒が数人、下品な笑い声を発してじゃれ合っているようだ。一組の方向から聞こえていたざわめきが近づいてくるにつれ、うちのクラスの僕以外の生徒も、そちらに意識を傾けだした。

「四組の皆さん、こんばんは！」
そう叫んで前方のドアから入ってきたのは問題児の大柳だった。ピンと背筋を立て、右手を真っ直ぐに上げている。選手宣誓の真似か。以前見たときは緩くパーマをあてた長い髪の毛を茶に染めてい

たが、現在は丸坊主になっていた。額の生え際を明らかに剃り込んでいる。

僕は助けを求めるように周囲を見回した。岩口は知らぬ間に教室をあとにしていた。これから四組の教室は無法地帯と化すのか。

しかし、慌てて教室を出ようとはしなかった。下手に動いて目をつけられたくないからだ。まずは、あくまで背景の一部として大柳の視界をくぐり抜け、彼がそっぽを向いた隙に空気のようにふっと脱出する。

「お前サボり過ぎなんだよ」

生田がからかうように大柳の胸を小突いた。彼はまたしてもキーコの席に出張ってきていた。キーコは席につき、周りには渚さん、内藤さんもいた。カラオケの打ち合わせだろうか。

「うるせえ」と笑い、生田にローキックを入れる大柳。気がつけば、彼のあとに続き、学年の名だたる問題児たちが続々と四組の教室に侵入してきていた。これはまずいと僕は席を立ち、自然なふうを装いつつも、かなりの早足で教室後方の出口を目指した。

「あ、逃げてる」

本当に逃げればよかったのだ。しかし、その言葉に反応し、後ろを振り向いたのがいけなかった。渚さんが僕を真っ直ぐに指差して、にやにやとほくそ笑んでいた。

「おいおいりっくん、逃げなくてもいいじゃん」大柳も笑顔だった。ただ遠目で見ても目が笑っていない。

「お前もこっちこいよ」

怖かった。足ががたがたと震えてしまいそうだった。先日塚田が聞いたという、僕のいないところでされたキーコたちの会話。
大柳に頼んで僕をボコってもらう。
その決行のときがついにきたのだと思い込んでいた。それだけのために、大柳は登校してきたのだ。

しかし、腑に落ちないものもある。渚さんと大柳以外はみんな神妙な顔つきをしているではないか。キーコも含めてだ。まるでこれから起こる惨劇を憂うような、そんな表情だった。

「逃げてるわけじゃないよ」僕は作り笑いを浮かべていった。
「今日はちょっと用事があって、早く帰らなきゃいけない、ってだけなんだ」

「早くこいって」
僕を手招いたのは、よそのクラスの不良の一人。プロレスラーのようにがたいのいい、藤吉（ふじよし）というやつだ。眉間にしわを寄せ、憤然とした様子である。彼はかねてから坊主頭がトレードマークである。彼とも面識はあった。幼い頃はゲームソフトを貸してやったりもしたのだが、関係はとっくに冷めている。

藤吉の迫力に負け、僕はがっくりとうな垂れて彼らのもとへ歩いた。

「おう、俺のキーコじゃねえか。元気だったかー」
感動の再会とばかりにキーコに抱きつこうとする大柳。

「ちょっと、キモいからやめて」
大柳の身体を両手で押さえつけるキーコ。言動とは裏腹に、まんざらでもない面持ちだ。

「大柳」渚さんがいった。相変わらず意地悪げな笑顔だ。彼女はまた僕を指差した。
「聞いた？　こないだのこと」

「ああ」途端に大柳は表情を硬くさせたが、それはポーズだったらしい。今度はキーコの肩に腕を回し、くんくんと髪の毛の匂いをかぐ。
「ちゃんと洗ったか。まだちょっとくせえような気がすんだけど」

「マジでやめて」
唇を尖らせ、キーコは彼の腕を払った。彼らの夫婦漫才のようなやりとりを目の当たりにして、僕は自分の中に嫉妬心が芽生えているのに気づき愕然となった。キーコに対する感情は憎しみだけだったはずだ。それなのになぜ、嫉妬なんかしなきゃいけないのだ。

一方で心のどこかに安堵の気持ちもあった。大柳は僕に対して敵意を抱いているふうではないからだ。ひょっとしたらこのまま僕がふらっといなくなっても、彼は何もいわないのじゃないか。

「おらあ、手塚！」大柳が豹変した。感情のスイッチをきり替えたかのような唐突さだった。
「お前、俺のキーコに何してくれてんだ、くおらあ！」
「い、いや……」

ズボンのポケットに両手を突っ込み、僕を睨みつけながらずいずいとこちらへ近づいてくる大柳。まるでカップルが放課後の体育館裏でこっそりキスをするような距離にまでなった。たった今の安堵はどこへやら、僕はいよいよ膝を震わせ始めていた。身長はほぼ一緒だが、そのせいで十センチほど大柳のほうが高く見える。

「いや、じゃねえんだよ。お前、なめとんか、わりゃ！」
くいくいとあごを小刻みに揺らし、大柳はすごんでみせる。僕は真っ青になったまま、ただ首を横に振る。生田が「やめとけ」と大柳の肩をつかむが、大柳に睨まれてすぐに手を引っ込めた。

大柳が右手をポケットからだし、そのまま振り上げた。女子生徒の「きゃ」という短い叫び声を聞く。
しかし僕は防御をも、目をつぶりさえもしなかった。
別のものに完全に意識を持っていかれたからだった。

10　やるときはやる

「なーんちゃって」
拳が僕の鼻先でとまる。

「ひゃはは」と下品に笑いながら、大柳はポケットに手を入れ直した。そして生田に顔を向ける。
「冗談に決まってんじゃねえか。こんなとこで暴れたら、また長々と松木（まつき）の野郎に説教されちまう」
彼とはつき合いの深い、生活指導の教師だ。

「ったく」
生田は仏頂面で腕を組み、近くの机に腰を寄りかからせた。隣に立つ渚さんは、心なしかつまらなそうな表情を浮かべている。

「お前もよお、びびってんじゃねえよ」
どうしようもなく楽しそうな様子の大柳。僕の腕をパンパンと叩く。「いや」と答えると、「あ？　なめんなよ」とまた絡みついてくる。強者が弱者をからかうときに、よくやるパターンだ。恐怖を与えたあと、それを解き放ったかと思わせておいて、また繰り返す。ほっとした表情を一転して強張らせるのを見るのが好きなのだろう。とにかく僕は、大柳が望んだ通りの反応をしようと心がけてはいた。彼が癇癪を起こしてしまわないようにだ。ただ、なかなか上手くいかなかった。すでに彼など眼中にないのだ。

先ほど大柳が、右手を振り上げた瞬間だった。一人の女子生徒が視界に飛び入ってきたのだ。

彼女は今までずっと席についていたのに、そのときだけ立ち上が

り、信じられない動作を見せた。大柳の右腕に、さっと手を伸ばしかけたのだ。本当に一瞬のことだから、あるいは僕の勘違いという可能性もある。実際、僕以外に彼女の行動に気がついた者はいないように思える。ただ、もし勘違いじゃないのなら、あれはどう見ても大柳の暴力を制御しようとした動きだった。

別に不思議な話ではないのかもしれない。正義感の強い女子だったら、それぐらいするかもしれない。ここにはいないが、例えば学級委員の横井さん辺りはそうだろう。しかし、その女子生徒がキーコである場合、話は変わってくると思う。

僕は大柳のご機嫌をとりながらも、目の端で密かにキーコを追い続けていた。彼女はまた椅子に座り直し、はき替えるのか靴下を脱ぐのに集中していた。我存じぬといった様子だ。脱いだ靴下を内藤さんの顔に近づけて、けっけっけ、といたずらっぽく笑う。

「おい、もう帰っていいぞ」

そう僕にいってきたのは大柳ではなく藤吉だった。僕は何も答えずに、すごすごとその場から離れた。背後でまた大柳が「シカトしてんじゃねえぞ、こら！」とバイクをふかしたような声を上げた。

「いい加減にしろって」

生田の優しい言葉を聞くのと同時に、僕は教室を出た。

大柳のことはこれっぽっちも頭になかった。僕の中を占めるのは、キーコのあの不可解な行動ばかりだった。

もうまったく意味が分からない。キーコは僕をどうしたいのだ。

彼女が大柳に僕をボコってもらうよう頼んだわけではない、大柳が四組にきたのはただの偶然だ、というのはさすがに分かっていた。

しかし、いくらなんでもあれはないだろう。横井さんを例にあげたが、彼女のような聖人でなくとも、多少は僕と親しい女子、佐野さんや今日初めて口を聞いた青柳さん、なんなら渚さんでもまだ納得できる。でも、キーコは違うだろう、明らかに。ついさっきだって僕に冷たい態度をとっていたじゃないか。

そのうち、キーコは僕が着替えを覗こうとしているのを見透かしたのじゃないか、という馬鹿馬鹿しい考えに達した。本当に僕はためらい始めていたからだ。着替えどころか、彼女のプライベートをモニタリングするのはもうやめよう、という気にまでなってしまう。僕を助けようとしてくれた彼女に、恩を仇で返すのを情けなく感じる。

しかし、それでは彼女の思う壺。そうだ。大柳のためだったのだ。きっと彼女は、大柳が暴力沙汰で非難されるのを案じたのだ。何を今更、と思ってしまうが、僕は自分にそういい聞かせた。

それなのに、その日は午後九時になっても、一度もチューナーの電源を入れようという気になれなかった。もっとも、まだカラオケから帰っていない可能性もあるが、放課後の騒動がなければ、「そろそろ帰ったかな」と何度も様子を見ていたのは想像に難くなかった。日課の際にも、あえて卒業アルバムをおかずに選んだが、キーコの笑顔を見た途端に息子は空気が抜けたようになってしまった。僕の中で再びキーコが輝き始めたらしい。

十時になっていた。さすがにもう帰っているだろうと思う。僕はゲームをしていた。八時に入浴を終えてからずっとだ。白い肌着のようなティーシャツとトランクス姿であぐらをかき、顔は限りなく無表情だ。ネクストコードの、古きよきロールプレイングでひたすらにエンカウントさせ、経験値を溜めていた。このゲームは、面白いが、キャラクターが成長しにくいのが難点だ。プレイ中の五割は、

作業のような淡々としたレベル上げに費やされる。

もちろん覗きたい。死ぬほど覗きたい。それをしないのは、ここにきて芽生えたまさかの良心である。覗きたい、というのも、憎きキーコのプライベートを奪ってやる、という気持ちではない。純粋に、好きな女の子への興味や憧れからだった。

僕ははっと振り向いた。今、キーコの部屋からかすかにどん、という物音が聞こえた。あんな音がするということは、床にボーリングの球でも落としたか、それとも僕の部屋とを隔てる壁を直接蹴ったかぐらいだろう。

恐ろしい想像をした。ひょっとしてカメラが見つかったのではないか。それを覗き用のカメラだと見抜いたキーコは、今度は誰がどうやって仕かけたのだろうと考える。最も容易い侵入経路はベランダからだと気づく。僕が犯人だと確信したキーコは、怒りに任せて僕の部屋側の壁を蹴った。

こうしてはいられなかった。きちんとセーブをしてからネクストコードの電源をきる。テレビからネクストコードの端子を抜き、代わりにビデオデッキと繋ぐ。チューナーはビデオにデッキと接続していた。

僕は一度大きく深呼吸し、覚悟を決めてチューナーの電源を入れた。画面に映しだされるキーコの鬼のような顔のアップを思い描き、身を固くしながら。

やがてブラウン管の中の、見慣れたいつもの角度、いつもの高さからとらえたキーコの部屋を見て僕は、一旦は胸を撫で下ろした。ただし、それはほんの一瞬にとどまった。部屋の明かりは点き、キ

ーコもちゃんといた。ベッドにうつぶせて漫画なのか参考書なのか、とにかく読書をしているようだった。カメラに気づいている様子など皆無だ。それなのに僕は、チューナーの電源を入れる前と同等か、もしくはそれ以上の緊張を覚えたのであった。

キーコはパンティだけしか身につけていなかった。

うつ伏せているため、胸は見えない。しかし、パンティに包まれた丸みのある尻や、そこからすらりと伸びた足、ランニング型の日焼け跡がついた背中は、からくも見えていた。

僕はすかさず股間を押さえつけた。早くも息子が暴れ始めている。それをよしとできないのは、やはりキーコへの恋心からか。改めて自覚する。僕はキーコのプライベートを覗いているのだ。キーコがなぜ裸なのかとか、そういったものはなんの疑問でもない。そこは彼女の部屋で、彼女だけの城だからだ。そりゃあ、読書をしたくもなる。テレビを観たくもなる。裸になりたくもなる。

きっかけとなった物音は、別にたいした意味はなかったのだろう。キーコは膝を曲げて足先をぶらぶらと左右に振っているし、そのせいで誤って壁を蹴ってしまったのだ。

彼女は本に目を落としながらも、ちらちらとある場所に目を向けていた。そちらにはテレビがある。寝そべって読書しながらテレビを観、おまけに裸とはなんたる身分だ。プライベートを満喫しやがって。毎晩勉強しているって話はなんだったのだ。おばさんにいいつけるぞ。

駄目だ。いくらあらぬ方向に意識を遠ざけようとしても、息子は静まってくれない。おそらく、誰もが優しくなれるヒーリングミュ

ージックでさえ、その難題の前に頭を抱えてしまうだろう。

キーコがごろんと横を向いた。こちらに背を向ける形だ。つまり、実際は僕の部屋のほうを向いている。本の中身が見えた。明らかに漫画だった。視線は彼女の後ろ姿を撫で回す。綺麗な背中だと思う。彼女が腕を動かすたびに、肩甲骨が艶めかしく上下する。パンティは子供っぽい、やや布の幅が大きなものだ。少しだけずり下がり、尻の割れ目が覗いている。

そして寝返りを打つ。その瞬間、僕は股間の血液が全身に飛び散ったかのような感覚を受けた。ついに控え目な胸の膨らみと、そりゃあもう豆粒のような小ささではあったが、ピンク色の乳頭が目に入った。腕に隠れてしまいはしなかった。彼女はまるで僕に身体を見せつけるかの如く、漫画を持つ両手を頭上に高々と上げていた。視線は相変わらず、テレビと漫画をいききしている。足がかゆいのか、もう片方の足の爪で器用にかいている。その腿の動きもとにかく卑猥で、僕はなんだか我慢できなくなってしまった。

立ち上がって上半身のティーシャツを脱ぎ捨てる。ひょろっとした救いようのない貧相な裸体が、電灯の下に晒される。なぜキーコと同じ格好になろうと思ったのかは自分でもよく分からないが、とまらなかった。僕はベッドの上に横になった。キーコの隣で仰向けた。画面の中のキーコがテレビを観てぷっと吹きだした。僕のこの行動を笑われたように錯覚する。でも構わない。

心臓はばくばくと音を立て続けていた。壁を超えた先には裸のキーコがいる。そう考えれば考えるほど、息子の熱は上がっていく。ぼちぼち手当をしてやらなければならない。すでに自制心は崩れ去っていた。僕はパンツを下ろし、右手で息子を包み込んだ。そのときだった。

思わず上半身を起こし、テレビの画面を凝視する。壁一枚向こうでは、キーコもまた体勢を変えていた。体操座りの崩れたような格好で、壁に背をもたれ、漫画を左手一つで開いていた。やはり漫画とテレビを交互に眺めている。問題なのは右手だ。右手が自身の股間、白いパンティに伸びているではないか。

ごくりと生唾を飲み込む。まさか、と僕は思った。まさかこれは……

エロ本やテレビ番組、ちょっと大人なクラスメイトの会話により、その知識は一応あった。僕の日課は、男だけの特権ではない。女の子だって、やるときはやるのだと。

キーコの指先がゆっくりと動いていた。始めはなんら変わりなかった彼女の表情が微妙に変化し始める。もはやテレビにも漫画にも目を向けなくなった。というより、瞼は閉じられていた。パンティの上をなぞっていた指が、パンティの中へと侵入する。漫画を裏返しに置く。左手は小さな胸に当てられた。それほどはっきりと顔は見えないし声も聞こえないのに、彼女の呼吸が乱れていくのを僕は感じとっていた。

気がつけば、僕の右手も動いていた。キーコと背中を合わせて、僕も快感を貪っていた。まるで僕の右手はキーコを、キーコの右手は僕を慰めているようだ。

「キーコ、キーコオ」

そして、画面の中のキーコは僕の名前を呼んでいる。これはセックスだ、と僕は思った。同じ場所、同じ時間に快感を共有する男女。

これをセックスだと認めない馬鹿がこの世にいるか。

「ああ、キーコオ、キーコオン！　ふぉーん！」

僕らは長い時間をかけて互いを愛した。

二人が同時に昇天したとき、時刻は十一時を回っていた。頬を赤らめながら、余韻を楽しむかのようにゆっくりと服を着るキーコに、僕もならった。チューナーの電源をきり、ふうと息をついてベッドに寝転がる。天井をぼんやりと眺めながら、僕もいよいよ童貞喪失かあ、と呟いたりもした。

そんな馬鹿な！

熱が冷めて正気に戻った僕は、自分のやったことに愕然とした。やってしまった。ついにやってしまった。キーコの、最も他人に知られたくない姿を覗き、しかもそれをおかずにしてしまった。ああ、なんという愚か者。どんないいわけもできない。僕は本当にキーコを裏ぎってしまったのだ。

その夜は寝つけに寝つけなかった。罪悪感が地獄の業火のように僕の全身を焼き尽くし、キーコの僕を非難する声を終夜浴び続けた。

11　塚田のラリアット

「二連休のおかげで、なんとかパーソン島を陥落させるのに成功したわ」

翌週の月曜日。

登校した僕は、最近新たに購入したという戦記シミュレーションゲーム〈ジ・ウォーズ〉の話を繰りだそうとする塚田に、憔悴しきったふうの表情を見せつけてやった。かまわず話を続けようとしたので、今度は「はあ」と溜息をつき左肩を右手でぽんぽんと叩いてみせた。彼はようやく「随分疲れてるな」と僕を気にしてくれた。

「まあな」僕は微苦笑を浮かべながら、こくこくと二度首を縦に振った。

「最近ちょっと激しくてさ」

「激しいって何が？」

「彼女だよ」と僕はなんでもないふうにいった。

「こっちの身にもなれって話だよな。毎晩のように求めてきやがって、まあ、そりゃ好きだから仕方ないけどさ」

「お前、彼女なんかいないじゃん」

些細な狼狽の色を含んだ声だった。その発言に絶対的な自信を持っているというわけではないらしい。

「お前にはいってなかったっけかな。二年のときからつき合ってる子がいるんだよ」

「いや、知らない」塚田の目の色が変わった。羨望というより軽蔑のまなざしに近いか。もてているはずのない友人に彼女がいたことで、だし抜かれたように感じたのかもしれない。
「へー、お前にも彼女なんていたんだな」
「誰にもいうなよ」頬づえをつき、僕はハリウッドスターのようにキザな笑みを浮かべた。
「お互い内緒ってことにしてるんだから」
「え、ていうことは」塚田が巨体を近づけてきて囁いた。本日に限り、肩のふけも気にならなかった。
「お前の彼女って俺も知ってるやつ？」
「知ってるっつーか、うちのクラスの女子だよ」
その言葉に、教室中をきょろきょろと見回す塚田。もうほとんどの生徒が登校してきていて、各々思い思いに朝の時間を過ごしていた。キーコは今朝も自分の席にて、級友たちに囲まれていた。
「降参だよ」しばらくして塚田は両手を軽く上げた。
「このままじゃ気になって眠れなくなっちまう。誰なのかちゃんと教えてくれ」
「それは無理な相談だ」僕はふふ、っと馬鹿にしたように笑ってみせた。
「さすがに名前はだせないよ」
「青柳さんだ」塚田は僕を指差した。
「昨日、なんか親しげにしてたじゃん」

僕が首を振ると、今度は「佐野さんだ」とまったく変わりない調子で口にする。僕はもう一度かぶりを振って、「内緒だよ」と彼を突き放すようにそっぽを向いた。

まさか僕の彼女というのが、あのキーコだなんて夢にも思っていないだろう。

先日のゲロ事件は、鉄のように固い絆で結ばれた恋人同士をも一発で破局に追い込んでしまうほどの未曾有の惨事だ。塚田が正解にたどりつくまで待っていると、あっという間に日が暮れてしまいそうだった。ただ、それも仕方ないことではある。僕とキーコは結局、というかなんというかつき合っていないのだから。

先週、ついに己のすべてをさらけだしたあの夜を境に、キーコは次の夜もその次の夜も毎晩毎晩、それはもう目覚めたかのように情事を行った。土曜の夜、日曜の夜も変わりなかった。同じパンティ一枚の格好で、漫画を読みながらテレビを観ながら。僕はというと、その瞬間だけは初夜に覚えた後悔の念もすっかりと飛び、いそいそと服に手をかけてやはりキーコと一緒に裸で朽ち果て、就寝時にまた後悔する、を繰り返した。

キーコに目を向けてみる。ホームルームの時間が迫り、とり巻きたちは消えていた。後ろの穂積さんに無邪気に笑いかけている。少々前髪が乱れているのは昨夜の僕との時間の名残というわけではないだろう。毎晩僕と快楽を共有しているのを知らない彼女。もし知ったらどんな反応をするのか。恐ろしくもあるが、興味もある。

「つき合っている子がいる」などと塚田にでっち上げたのは、キーコとの仲を誰かに知ってもらいたかったからだ。僕らの仲は、僕ら以外の人間どころかキーコさえも知らない。連夜を彼女と共にする

うちに、その事実がだんだんと耐え難くなってきた。まるで、本当に卒業アルバムの彼女の写真を眺めながら、淡々と一人エッチをしているような空しさに襲われる。

まあ、確かに変わりないともいえるのだが。

とにかく、塚田には彼女が誰なのかぼかしておいたが、いずれは——今日中にも明かそうと考えている。口は堅いやつなので、おそらく大丈夫だろう。

「そんでさ。作戦司令部に手榴弾が投げ込まれた、とかってテロップが出てさ。ボーン、と全員やられちゃってんの。なんだ、このクソゲー、ってディスク叩き割ろうかと思った」

「へー」

一時限目の終わりも、二時限目の終わりも、塚田は僕の彼女について追求してこようとはしなかった。つまらなさげに聞き流す僕に、嬉々として自分のハマっているゲームの話をする。そりゃあ僕だってゲーム好きなのだから、平常ならある程度は楽しめる。しかし、彼は僕がハウスコードをプレイできない環境にあるというのを忘れていやしないか。いやそれよりも、もっと僕の彼女について訊いてくれ、と思う。恋人の正体を明かしたいのに、明かせないではないか。

「まあでもさ、今年のソフトの中ではマシなほうかな。あれなんかひどかったぜ。なんつったっけ……」

「へー」

四時限目の体育の授業のために、三組の教室に移動して体操服に着替えている途中だった。僕が自分から彼女の話題に触れないのは、話が聞こえる位置に数人の男子がいるせいだった。

「深海って可愛くね？」
その数人の男子の一人が不意に発言し、僕の意識は塚田のゲーム失敗談から完全にそっちへ移動してしまった。

声の主は三組の男子であるらしかった。他の一人に否定され、むきになって反論する。
「いやさ、確かになんの変哲もない顔立ちだけどさ。ああゆう女って将来化粧を覚えたらめちゃめちゃ綺麗になるんだって。うちの従姉妹がそうだもん。今のうちにキープしとくべきだって」

「でも、あいつ、あんまりそそられないんだよな。エロさを感じない」
話している二人は、どちらも僕と同じような目立たないグループに属する男子だった。身の程知らずが。僕のキーコを評価するのは十年早いぞ。じゃあ、僕もだが。

「いや、エロさなんていらねえじゃん、別に。深海さんは清純派で通してほしいね」
ふっ、キーコが毎晩裸で股間をまさぐっているというのも知らないで。
僕は溢れくる優越感から、タンゴでも踊りたくなった。

「塚田くん」
突然、この場に似つかわしくない高い声が聞こえる。同じく塚という字のつく僕は、塚田という名前に間違って反応してしまうことが多々あったが、今回もそうで、塚田と同時に振り向いてしまった。

「はい」
そう返事をする塚田を見て、すぐに間違いに気づく。

「ごめん。和久田(わくた)くんを呼んでくれない？」
教室教壇側のドアの隙間から顔を覗かせていたのは、トレードマークの眼鏡を外していたため一瞬誰だか分からなかったが、学級委員の横井さんだった。和久田といえばもう一人、男子のほうの学級委員なのだが、横井さんがあまりに働き者なので、基本的にうちのクラスで学級委員といえば彼女を指す。

「分かりました」
なぜか敬語でそう答え、巨体を揺らしながら教室の奥へ小走りで駆けていく塚田。すでに真っ白な体操服に着替え終えている。つまりは入り口の最も近くにいたせいで、彼が呼びだし役に抜擢されてしまったらしい。横井さんは一部のはしたない女子とは違い、男子の着替えの真っ只中をずかずかと歩いていける性質ではないようだ。

しばらくしてそそくさと戻ってきた塚田の顔が、どうも赤ばんで見えた。「大丈夫か」と訊ねるも、「いや」と首を横に振るばかり。そういえばゲームの話もぴたっとしなくなった。いったいどうしたのだろうと訝った矢先、下品ながらがら声が教室中に響き渡った。

「どうでもいいんだよ。お前一人でいけよ」
和久田だった。線が細く長身で、風が吹けば飛ばされてしまいそうな体躯だが、パーマを当てた茶髪が示す通り、一応は不良生徒と見なされている。

「駄目だよ。二人できなさい、って先生にいわれたんだもん」
横井さんも和久田もしっかり体操服姿だった。気がつけばまだ着替えを終えていないのは僕ぐらいのものだ。やや焦ってしまうが、横井さんがすぐ近くにいる手前、学生服のズボンを下ろすのはためらわれた。

「お前さ、そんなこといって男子の着替えを覗きにきただけなんじゃねえの？」
「ち、違うし」
恥ずかしそうに顔をうつむかせる横井さん。眼鏡の印象が強過ぎるせいであまり意識しなかったが、かなりの美少女だと思う。彫が深く、白人のような顔立ちだ。確か下の名前はつばさだったはずだが、ジェシカとかエレナとかのほうがピンとくる。

僕の隣で塚田はぼうっと横井さんを見つめていた。もっと簡単に表すのなら、見惚れていた、とすべきか。そこで僕は合点がいった。そうか、おそらく塚田のやつは。

「横井の大好きなもん見せてやるよ」
そういって塚田の背後に忍び寄ったのは和久井ではなく、サッカー部の青木だった。彼が悪どい笑みを浮かべしゃがみ込んだとき、何をしようとしているのか僕にも分かったが、制する時間もなければ勇気もなかった。そしてそれは起こってしまった。

青木が塚田のハーフパンツに後ろから手をかけ、勢いよくずり下げた。
ハーフパンツどころか、下にはいたトランクスさえも足首まで降下し、塚田の息子がぽろりした。体格に似合わず、なんとも可愛らしい息子だった。

「きゃ！」と両手で顔を覆う横井さん。塚田も何かを口にして、慌ててパンツを上げようと腰を曲げたが、バランスを崩して前のめりに倒れ込んでしまった。何やら吹き出物の多い大きな尻を突きだす形となり、教室では爆笑が起こった。その間、僕はただおろおろと、ことの成りゆきを眺めるぐらいしかできなかった。

その体勢のまま、なんとかパンツを上げる塚田。生徒たちは笑い足りないらしく、爆笑はいまだに続いていた。気がつけば横井さんも顔を赤らめながら頬を緩めている。この場で笑っていないのは僕と塚田のみという状況だった。

「ほら、ほら、みんな見ろよ」笑い過ぎて目に涙を溜めた和久井が、廊下に出て横井さんを指差した。

「こいつめちゃくちゃ喜んでるぞ、大好物が拝めたから」

「うるさい！」

ばしっ、と和久井の肩を叩く横井さん。和久井は痛くもかゆくもなさそうに首をすくめてみせた。

そのときだ。どこからか地響きのような重低音の唸り声が聞こえ始めた。途端に笑い声は途絶え、ざわめきに変わる。唸り声はどうも塚田から発せられているようだった。

むくっと立ち上がった彼を見て、僕は恐れ戦いた。まるで般若の面のような、恨みに満ちた表情をしていたからだ。

「おい、どうした？」異変を察知した和久井が、引きつった笑みを浮かべた。

「か、勘違いすんなよ。今のは俺じゃね……」

弁明を待たず、和久井の身体は宙を舞った。空中でくるんとバック転し、床に落ちたときにはうつ伏せになっていた。塚田のラリアットが炸裂したのだ。太い腕を和久井の首めがけて思いきり振り抜き、その勢いで自らもまた転んでいた。

僕を含め横井さんも青木も、その場にいた全員がかちんこちんに

固まっていた。うつ伏せる和久井から、「いてえ……」と泣き言が漏れる。意識があるようで一安心だった。

やがて一人の生徒が動き始める。廊下で偶然今の場面を目撃したらしい体操服姿の三組の女子生徒だった。大慌てで階段方面に駆けてゆく。おそらく教師を呼びにいったのだろう。うむ、賢明な判断だ、と感心する。いや、感心している場合ではない。しかし、どうしようもない。

それにしても、と僕は思った。まさか塚田が、僕の起こした例の事件と匹敵するような騒ぎの当事者になってしまうとは。この先彼の身に振りかかる逆風を想像すると、どうにも目をつむりたくなる。まずは恥ずかしいあだ名をつけられてしまうか。それともクラス全員から腫れ物扱いされるか。そもそも彼は立ち直れるのか。このまま不登校になりはしないか。

延々とそんなことを考えていたとき、塚田はすっと立ち上がり、「すまん」と呟いて和久井に手を貸していた。その姿が妙にかっこよく見えたのは、どうやら僕だけではないらしかった。

12　キュン

塚田も和久田も、青木や横井さんまでも、教師による事情聴取のために体育の授業を欠席した。

それにより最も被害をこうむったのはこの僕で、塚田不在のせいで僕の運動神経のなさが際立ち、とにかく心苦しい一時間を過ごした。

そして、理不尽な怒りを塚田に覚えながら一番に三組の教室に帰ってくると、四人で和やかに笑い合っていたので僕は更に腹を立てた。いずれも制服姿に戻っており、横井さんは眼鏡っ娘だった。

「おいおい、仲直りしてんじゃねえよ」

そうふざけた調子でいったのはもちろん僕なんかではなく、続いて教室に入ってきたムードメーカー小金井だった。青木が「うるせえよ」と悪態をついた。

「私、四組に戻ってるから」

誰かしらの席についていた横井さんが立ち上がった。和久田がへっと笑いながら、「着替え、見物してきゃいいじゃん」とからかい、彼女は「もう！」と頬を膨らませながら教室をあとにした。彼女と入れ替わりに、続々と男子が入ってくる。

僕はこそこそと着替えつつ、聞き耳を立てた。ことの顛末が主に青木の口から語られている。

教師の扇動により塚田が和久田に謝罪し、青木が塚田に謝罪。一見落着となったところで「塚田のラリアットは強烈だった」という話に。それがどこをどう巡り歩いたのか、「今度四人でカラオケにでもいこうぜ」という話。

とどのつまり、雨降って地固まる、昨日の敵は今日の友。意気投

合してしまったらしい。

塚田が僕と口を聞いたのは、三組での着替えを終えて四組に戻り、自分の席に落ちついてからのことだった。

「驚かせちまって悪かったな」

苦笑しながら塚田はいった。なんとなく安心する。和久田や青木といったクラスの中でも陽の部分を担う生徒と親しくなり、陰の僕とは距離を置いてしまうのでは、と心配していた。

「ああ、お前があんなに怒ったところ、初めて見たぞ」

「確かに、普段はそんなに腹立つこともないしな」

「そうか。ところで……」

「塚田くん」

二人同時に声のしたほうを振り向いた。想定した位置よりも随分と低く、にこにことした青柳さんのカエル顔があった。生首のように、塚田の机にあごを置いている。

「塚田くんって強いんだねー。さっき、和久田くんをぶっ飛ばしちゃったんでしょ？」

僕はちらりと窓側後方の席の、和久田の様子を窺った。キーコと渚さん、それに内藤さんが彼の机を囲い込み、ハーレム状態で何かを話していた。嫌な気分になる。

「別に強くなんかないって」微笑んでかぶりを振る塚田。先日、目の前の青柳さんに抱きつかれて、たじたじになっていた男の面影はない。やたら堂々として見える。

「しかも完全にこっちの勘違いだったわけだしさ。和久田には悪いことしたな。まあ、ちゃんと謝ったけどね」

「へー。ところでさ、一緒にお昼食べない？　キーコ、じゃなくて深海さんね。あと、渚さんと内藤さん、生田くんも一緒」
昼食は基本、塚田は僕と二人でとっている。塚田が僕に目で合図を送ってきた。その合図と共に、僕らの事情にも気がついたらしく、青柳さんは当然の提案をしてきた。
「じゃあ、手塚くんも一緒に食べる？」

「いや、いい」キーコと一緒のランチタイムほど気まずい時間は、探してもそうは見つからない。
「僕は別にいいから。塚田、せっかく誘われたんだし、いってこいよ」

「そうか。じゃあ……」
そうゆうわけには、という返答を期待したのだが、あっさりと弁当を片手に青柳さんと肩を並べていってしまう塚田。目的地はやはりキーコの席で、キーコたちが呼んだらしく和久田もすぐそばにきていた。嫉妬で狂いそうになってしまうので、僕はなるべくそちらを見ないようにした。

弁当を広げる。一人で昼食をとるのはあまりにも惨めだ。教室中を見回しても、一人きりでいるのは僕だけだった。廊下側で数人のグループを形成している平島に仲間に入れてもらおうかとも考えたが、彼はゲーム好きといっても野球部に所属するスポーツマンだ。彼らのグループとは明らかに話が合いそうにない。

はあと溜息をつき、僕はあきらめた。今日だけ。今日だけの辛抱だ。
そう自分にいい聞かせ、おふくろお得意の冷凍食品コロッケを箸でつまんだ矢先、ふと前方に人の気配を覚えた。

「一緒に食べよう」
そういって僕の机に弁当を広げたのは、意外にも横井さんだった。塚田の席に座り、身体を後ろに向けている。それからもう一人、彼女と仲のいい深田（ふかだ）さんという女子生徒が、僕の席に自分の椅子を近づける。

同じく眼鏡をかけた優等生タイプの子で、喜怒哀楽が少なく物静かな印象だ。小学校時代から何度か同じクラスになっているが、会話したこともなければ、声を聞いたこともない。彼女は机の左端に弁当を置いた。

「別にいいけど……」
平静を装っていったが、内心は緊張のピークにあった。中学に上がってから女子と昼食をとった記憶など一度もない。

ただその反面、横井さんを訝ってもいた。始めは意外だと思ったが、そうでもないのかもしれない。できる学級委員の彼女は、孤立したクラスメイトを放っておけなかったのじゃないだろうか。
だとしたら、そんな優しさは願い下げだ。男のプライドってものを考えてほしいものである。

不自然なワンオンツーのランチタイムが始まる。
黙々と忙しそうに弁当の中身を減らしながら、一言二言二人の女子のあいだにのみ言葉が交わされる。

二人に先駆けて弁当を食べ終え、このままどこかへ消えてしまおうかと悩みかけたとき、ようやく横井さんが僕にかまってくれた。
「手塚くんって、塚田くんと仲いいよね」
「うん。まあ」横井さんのかすかにはにかんだ表情から、僕はなん

となく事情を察した。
「それがどうしたの？」
「塚田くんって、けっこうカッコいいよね」
思わず塚田を見やる。こちらに背中を向け、キーコたちと盛り上がっている様子である。僕にゲームの話をするときのトーンとはまるで違って見える。
「いいやつだけど」
正直、カッコよくはない。ルックスでは僕が勝っているだろう、と日頃から思っていた。何せ塚田はいわゆるおデブちゃんであって、おデブちゃんがスリム体型な僕よりもててはならないのだ。
「本当、カッコいい」
うっとりと塚田の丸い背中を見つめる横井さん。そんな彼女の横顔を深田さんが、じっと眺めていた。
こっそりと横井さんに人差し指をつきつけ、深田さんに首を傾げてみせると、彼女はこくりと頷いてくれた。その無言のやりとりの意味は、おそらく当人たちにもよく分かっていない。
「さっき、和久田とケンカしたのを見たから？」
少し失礼な質問かもしれないと僕は思った。不良に憧れる女子なんて、一度拉致られて輪姦されるべき、という勝手な偏見からだった。
しかし横井さんは「そうかも」と首を縦に振った。
「ギャップってあるじゃん。普段はおとなしそうな子がいざ怒るとめちゃくちゃ強いって、なんか素敵。だって、あの和久田くんに勝っちゃったんだよ」

完全なる不意打ちだったし、そもそも和久田って弱そうじゃないかと口から出かけたが、性格が悪過ぎるのでやめた。
そうだそうだ。塚田は友達ではないか。たとえ僕のキーコと食事を共にしているからって、それは変わりない。

しかも僕は横井さんと一緒に弁当を食べている。これはおあいこだといっていい。
体育前の塚田を思いだす。彼が横井さんを前にしたときの挙動不審具合は相当なものだった。あれはやはり、彼が横井さんに気があるというのを示しているとしか思えない。あんなに怒ったのも、想いを寄せる彼女に自分の情けないものを晒されてしまったからに違いない。

それにしてもギャップで恋に落ちるなんて、本当にそんなことあり得るのだろうか。
その答えを求めたわけではないが、また深田さんに首を傾げてみる。何を勘違いしたのか、にこっと微笑む彼女。
うん、キュンとした。あり得る、あり得る。

オーケー、塚田。僕に任せとけ。お前のために、ナイスアシストをしてやる。

「横井さん」と呼びかけると、彼女はやっとこっちに戻ってきてくれた。
「塚田にアタックするなら今だよ。だってあいつ、多分横井さんに惚れてるから」

「嘘だよー」
「本当本当」身をよじって照れまくる横井さんの調子に合わせ、僕

もいたずらに笑う。
「さっき横井さんが塚田に声かけたとき、あいつやたら緊張してたし。あんな塚田見たの、初めてだよ」
「私もそう思う」深田さん。さっきの笑顔は幻だったのか、無表情で視線を落とし、ぱくぱくとおかずを口に入れている。
「前からよく視線を感じることがあってね。んで、そっち見てみるといつも塚田くんがいるんだよ。つばさといるとき限定だったしね」
「えー、そうかなー」

そんなこんなで、ランチタイムは意外にも大盛り上がりで終了した。
食事を終えると二人は早々に退散してしまったため、残りの昼休みの時間で只今の話を塚田に聞かせてやろうと思ったが、彼はずっとキーコたちのグループにいた。

五時限目が始まり六時限目が終わり、あっという間に帰りのホームルームの時間になる。
それまでに、十分休憩など幾度か塚田と話すチャンスはあったが、青柳さんや生田などキーコグループの人間に先を越されてしまった。まさか、塚田もそのグループの一員になってしまったのではないか、と危惧する。彼がそっちへいってしまったら僕は本当に一人ぼっちだ。

「起立、礼、さようなら！」

放課と同時に僕は慌て気味で塚田に声をかけた。「あん？」と彼は振り返ってくれたが、なんともうっとうしげな表情をしており、思わずたじろいでしまう。その隙をつかれる。

「塚田くん」
横井さんが塚田の席の前に、びしっと姿勢を正して立っていた。ただし、顔は恥ずかしそうにうつむかせている。一方の塚田も彼女の姿を認めた途端、目に見えて身を強張らせた。

「ああ、ど、どうしたの？」
「今日、一緒に帰らない？」

「一緒に？」しばらく無言で横井さんを見つめたあと、塚田は「ごめん」とかぶりを振った。
「今日、深海さんたちと一緒にカラオケいく約束しちゃって」

「そ、そうか」横井さんは指先でぽりぽりと頬をかいた。
「深海さんと誰？」
「えーと、生田と青柳さんと、まだ増えるかもしれない。あ、そうだ。横井さんはどう？」

やや迷える表情を見せてから横井さんは「いや」と微笑んだ。
「私はいいや。じゃあ、また今度一緒に帰ろうね」

「ああ、また今度」
去り際に横井さんは、僕に向かって残念そうにぺろっと舌をだした。一足遅かったぜ、という意味か。僕も同じようにして応える。普段そんな表情をし慣れていないので、血のついたナイフを舐める連続殺人犯にしか見えなかっただろう。
いや、そんなことよりも……

「カラオケにいく約束なんかしたのか？」
「え？　ああ」
当たり前のように頷く塚田。

「だって、お前カラオケなんていったことないだろう？」
「何いってんだよ」塚田は露骨に顔をしかめてみせた。
「吹奏楽部の仲間と部活終わりによくいってるよ。でも俺は洋楽ばかり歌うから、ちょっと引かれちまうかもしれないな」

「そうか……」
かくいう僕はカラオケなんていったことないし、洋楽どころか日本の曲でさえも疎い。かろうじて分かるのはゲームの挿入歌ぐらいだ。

「じゃあ塚田くん、部活のあとでね」
そういいながら、僕らの席の脇を誰かが通り抜けていった。振り向いて、後ろ手を上げる見慣れた少女の顔を確認する。
どう見てもキーコだ。

「ああ」と手を振り返し、それから塚田は僕の顔をまじまじと見つめた。
「お前もいきたいんなら頼んでみてもいいけど、お前部活やってないし、それにさ、深海さんも一緒だぞ」

「いや、そうゆうわけじゃないけど」
僕は心から思った。囲碁部でも手芸部でも、なんでもいいから部活に入っておくべきだった。

「じゃあ、また明日」
かばんを手に、一本の後ろ髪すら引かれていないふうに教室を出ていってしまう塚田。
僕は彼を見送ったきり、なかなか立ち上がれなかった。まるで南極に一人でとり残され、ペンギンたちからも無視されているような

気持ちだった。

13　三十五番の席にて

一週間強が経過して、五月になった。
キーコは相変わらず、勉強もせずに腹筋もせずにお盛んだった。むしろ、始めの頃よりも大胆になっていた。

まずは位置の問題だが、以前はカメラからやや離れたベッドの上で控え目に足を広げていたが、最近ではベッドに寄りかかりカーペットの床に座った状態で臨むパターンも増えてきた。つまりカメラとの距離が狭まった。まあ、先方はそんなこと知る由もないだろうが。

それから一昨夜、ついにパンティを脱いだ。
このときはもう本当にカメラの目の前で、こちらに背中を向けてはいたが、僕に見せつけるようにくねくねと腰を振りながらパンティを下ろしていった。引き締まってもいて、それでいて可愛くもあるお尻だった。その日は全裸で始めたものだから、もうキーコの大事な部分はほとんどこの目に焼きつけてしまった。感想は述べ辛い。僕にはまだ早過ぎるのだろう。

ただ、僕は意外にも冷静でいられた。というよりも、日を追うごとに空しさが増していき、なんだかキーコの裸にもあんまり欲情できなくなってしまった。最中、おばさんに部屋の戸を叩かれたらしく、脱ぎ捨てたパンティを慌ててはき直すキーコを見て、くすりと笑ったりしていた。パンティ一枚の姿でおばさんを迎えていたので、そこまでは容認されているのか、と感心したりもした。

塚田が離れていったのも、少なからず因縁があるだろう。一週間前のあの日以来、塚田は休憩時間のたびに生田や和久田、はたまた

末恐ろしいことにキーコや青柳さんのもとへ自ら出向いていき、僕と話す機会もめっきり減ってしまった。
昨日久しぶりに「お前がやってたあの戦記ゲーム、どこまで進んだ？」と声をかけてみた。返ってきた言葉はこうだった。
「お前もそろそろゲームは卒業したほうがいいぞ」
そんな理不尽なことってあるか。ついでに肩を見ると、ふけはちっとも溜まっていなかった。

とにかく塚田は陽グループに電撃移籍してしまい、僕は本当に一人ぼっちになった。僕とキーコの甘い関係を誰にも知らせられないというのが、何よりも痛かった。彼女との夜がいよいよ、まったくの独りよがりなものに感じられてきたわけだ。

そんなこんなで、道路を横断するスーパーのビニール袋のように、無気力な毎日が続いている。打開しようにも特に公明は見いだせないし、月末には中間考査が控えている。さすがに僕もキーコも、快感に身をよじらせてばかりとはいかない。

二時限目の授業終わり。青柳さんのもとへ巨体を揺らして歩いていく塚田を、溜息をついて見過ごし、ここ数日すっかり慣例となってしまった読書でも開始しようと机を探っていたとき、佐野さんが「やあ」と声をかけてきた。また三宅さんと連れ添っている。

「塚田くんにポイされて、寂しそうだね」
僕は泣きそうになった。そんなにはっきりといわなくてもいいじゃないか。

ただ、塚田との関係がこじれて以来、佐野さんは一日に一度程度、必ず声をかけてくれる。案外寂しそうな僕を見かねているのかもしれない。

「別に。もともと僕は一人のほうが好きだし」
精一杯強がってみせる。「キモ」と呟いて三宅さんが吹きだす。マジで、暗い夜道は背後に気をつけろ。

「だよねー。寂しいよねー」僕の返事を聞き流す佐野さん。
「なんか最近塚田くん、君の大好きな深海さんとも仲よくしてるみたいだけど、その辺についてはいかがお考えですか？」
マイクを向けられる。

僕は塚田を流し見た。教壇の付近でキーコと青柳さん相手にはしゃいでいる。
僕がキーコに気があるというのは、小学校時代の僕らの関係を知る一部の生徒のあいだで常識となっているらしかった。それを指摘されると僕は決まって否定するが、とても本気にしてはもらえない。よって今回は何も答えなかった。

「はあ？　マジで？　ちょっと、ありえないんだけど」三宅さんが僕の席の前に立ち、好奇心溢れる目で僕を見下ろした。
「深海さんってけっこう人気あるんだよ。一組のトダくんとか三組のワタベくんとかも片想いしてるって話だし。マジでいってんの？
わー、超ウケる。なんていうか高嶺の花って感じ。私、応援してあげよっか、キャハ」

意外にも、今初めて僕のキーコへの想いを耳にしたらしい。三宅さんを見上げながら、割と整った顔立ちであることに遺憾を覚えつつ、ある有名人の格言を思いだしていた。男のプライドが傷つけられたときは、女に手を上げてもそれは正義だ――ひょっとして今がそのときか。

「マジでコクってみりゃいいじゃん」
佐野さんがあいだに入り、すんでのところで収まった。机の下ではもう拳を握っていた。
「なんかの間違いでつき合ってもらえるかもよ」
「無理、無理。月三万もらってもないわ」

二人の高笑いを聞きながら、僕ははらわたを煮えくり返らせていた。握り締めた手の平に汗が滲むが、落ちついたのか、はたまた余計に錯乱したのか、その手を解いた。そして次の瞬間には口にしていた。
「ここだけの話だけど」
二人に密談を要求し、声を潜める。彼女たちも、怪訝そうにしながら顔を寄せる。
「実をいうと、僕とキーコ、すでにつき合ってるんだ」

「は？　ありえない、ありえない」
「病院いったほうがいいんじゃない」
動揺も見せずにまくしたてる二人。まったく信じていない様子だ。

「キーコにはホクロがある」
僕はいった。

「ホクロ？」眉をひそめる三宅さん。
「どこに？」

「お尻に。割れ目を挟んで両方の腿近くに一つずつ」
奥の手だった。キーコがパンティを脱いだとき、そのホクロがとても印象的だったのを覚えている。腿の近くとはいえパンティをはいていれば見えない場所であり、間違いなく恋人でしか知りえない事実だといえた。

ついに二人の顔色が変わった。それから、お互いに顔を見合わせる。
「そんなもん、調べようがないし」三宅さんは笑みを浮かべた。そのぎこちなさは、僕の言葉があながち嘘ではないと思い始めているのを物語っている。
「本人に聞いたほうが早いじゃん」

「それは勘弁してほしい」僕は神妙にかぶりを振った。
「ほら、あのゲロ騒ぎがあったろ。自分にゲロを浴びせた相手とつき合ってるってクラスメイトに知られるのが、たまらなく嫌みたいなんだ、あいつ。だからお互い絶対内緒にする、って約束してて、もし僕が口を滑らせたってばれたら、フられちゃうかもしれない」

「じゃあ、あの騒ぎよりもあとにつき合いだしたわけ？」
佐野さん。彼女はもはや僕の言葉を疑っていないように見える。

「そう。ゲームソフトを持ってキーコの家に謝りにいった、あの日だよ」
二人はまた顔を見合わせた。共に眉間にしわを寄せているので、まるで妻と愛人の睨み合いのようだ。

「分かった」唇を尖らせて思案していた三宅さんが、しばらくしてから頷いた。
「なんとかしてホクロを確かめてやるから。でも、もし嘘だったら千円払ってもらうよ」

本気だと僕は思った。中学生が払える現実的な額。それでいて、もらうとかなり嬉しくて、失うとかなり悲しい額、千円。

「いいとも」僕も自信満々に頷き返す。
「ただし、嘘じゃなかったら逆に僕が千円をもらう」
「約束する」

「えー、ちょっと、ちょっと」去っていこうとする三宅さんの腕を、佐野さんがつかんだ。
「確かめるったって、どうすんのよ。お尻見せて、とでもいうわけ？」
「分からない！　でも、絶対に確かめる！」

そして次の三時限目の授業中、僕は早くも、キーコとつき合っているなど大ぼらを吹いたのを後悔し始めていた。

念は押したものの、あの二人がキーコに、または他の生徒に僕の発言を暴露しないという確約はないではないか。いや、百歩譲って嘘だとばれるのはよしとする。今以上に僕とキーコの距離が広がり、クラスのみんなから白い目を向けられるだろうが、それは致し方ない。

問題はホクロのくだりである。僕とキーコがつき合っているというのは嘘だが、キーコの尻に僕のいうようなホクロがあるというのは真実なのだ。ホクロの存在を他人が知る可能性は薄いだろうが、キーコ自身は知っているのではないか。
僕の嘘を含め、ホクロ発言についても三宅さんが話してしまう可能性はあるぞ。そうなったら今度は、なぜ僕がホクロのことなんて知っているのか、という話になる。まずい。まずいではないか。

ただ、さすがにキーコもそれで隠しカメラと結びつけるような突飛な発想力は持っていないかもしれない。そうだ。「小学校の頃のプールの時間に、水着が食い込んで偶然見えてしまったのをいまだ

に覚えていた」とでも説明すればいいだろう。ある意味、余計に変態じみて聞こえるが、少なくとも犯罪ではない。

四時限目は岩口による国語だったが、開始の礼が済んだ途端、彼は教壇に両手をつき、にやりと不気味な笑みを浮かべながら生徒たちを見渡し、こんなことをいいだした。

「お前らがあまりにしつこいから、この時間を使ってやってやるか」

薄い頭と白い歯が妖しく光る。生徒数人がざわつき始める。

岩口は続ける。

「えー、それじゃあ学級委員、前に出て。あとはお前らに任せるから、勝手にやっといてくれ」

教壇のパイプ椅子を黒板の脇に持ち寄り、ずっしりと彼は腰を下ろした。

「それじゃあ、みんなのたってからの希望だった席替えを始めます」

横井さんを差し置いて和久田がいった。こうゆうときだけは張りきるタイプなのだ。教室中が歓喜に湧いた。

新学期当初から席替えを希望する声が多数上がっていたのは知っていた。現在は男女別に出席番号順、つまり五十音順で座っているが、その味気ない席順に退屈していたのだろう。

今となっては僕にとっても席替えは喜ばしかった。なんといっても、通じ合わなくなった塚田と席が前後しているのが気まずい。だからといって誰のそばだと安心できるのか、と問われればその答えも定かではないが。とりあえず塚田、それからキーコと離れてさえいれば満足だ。

贅沢はいわないさ。できれば窓際が……できれば大人しい女の子

と……できれば横井さん……深田さん……できれば……

「というわけで多数決の結果、男女混合のくじ引きで席を決めたいと思いまーす」

和久田が声を張り上げ、横井さんが黒板に教室内の見とり図と席にあてがう番号を書いていく。なかなか足並みの揃ったコンビだ。

女子生徒数人で作ったというくじと箱が用意される。席替えを事前に知らされていた生徒もいたわけだ。

現在の席順に、教壇に置かれた箱からくじを引いていく。塚田が引き終え、次に僕の番。席に戻ってからそっと紙を開くと、三十四番と書かれていた。黒板に書かれた図を参照しなくても分かる。四十人の席が五つずつ八列並んでいるわけで、僕の新しい席は後ろから二番目、窓側から二番目に決まった。

「お前、何番だった」

三日ぶりに塚田が話しかけてきた。天然パーマだった頭を丸刈りに変えている。もうどこからどう見ても吹奏楽部員ではなく、柔道部員だ。しかも主将クラスの。

「三十四だってさ」

見た目の迫力が増した塚田にやや怯えつつ、僕はとり澄まして答えた。

「ふーん」

そのまま自分の番号をいわずに席を立ってしまいそうな雰囲気だったため、僕は慌てて訊き返した。

「お前は？」

「あん？　三番だよ」

ものすごくうんざりした調子で答える塚田。ふん、別にかまわない。お前とは席も遠く離れるのだし、これで縁はばっさりきれた。

続いて、クラス全員が一斉に席を移動し始める。机は入学時から一貫して同じものを使用するシステムで、中身だけ入れ替えて移動するわけにもいかない。ずずず、と机を引く音が響き渡り、「ちゃんと抱えて運べ！」と岩口が怒鳴り声を上げた。

三十四番の席にたどりつく。多くの生徒がそうしているように僕はひとまず席につき、辺りを見渡してみた。

うーむ、話が合いそうなやつは近くに見当たらないが、悪くはないのではないか。

なんといっても我がクラスを代表する不良共が揃いも揃って廊下側に追いやられているのが素敵だ。おまけに左隣、窓際には希望通り深田さんが座っている。右斜め前に陣どる渚さんが唯一のガンといえるかもしれない。まあ彼女も美少女といえば美少女だし、夏はブラ透けも期待できる。目の保養ぐらいにはなるか。

今度は教室中をくまなく眺める。もちろん最大のガン、キーコを探すためだ。廊下側にはいない。中央にもいない。となると、窓側か？

「うわ……！」渚さんが突然振り向き、僕のほうを見て苦笑した。

「キーコ、災難だねえ」

「うん。マ、ジ、で、最悪」

背後から聞き覚えのある声がした。

僕は恐る恐る後ろに顔を向け、次の瞬間にはすかさず前に向き直した。ぷるぷると身を震わせながら、これはいったい何が起こる前兆なのだ、と頭を抱える。

キーコは僕の後ろ、三十五番の席にて、ぶすっとした表情で頬づえをついていた。

１４　復讐（前書き）

久々に遅れてしまいました＞＜すみません
ワールドカップって罪な奴です。

14　復讐

「ちょっと、邪魔なんだけど」
「え？」
顔を上げると、そこに渚さんが立っていた。酢豚の中のパイナップルを見るような目つきで、僕を見下ろしている。

「邪魔って何が？」
「そこ、いい？」
僕の座る椅子を指差す。僕はふと後ろのキーコに目をやった。彼女は目前で繰り広げられるこの光景が見えていないのか、それとも無視しているだけなのか、弁当の包みを開けるのに夢中だった。

一応、理解はする。四時限目を終え、昼休みを迎えていた。今から各自で昼食をとるわけだが、席替えをしたとはいえ、渚さんはいつものようにキーコと一緒に食べるつもりなのだ。そうなると、キーコの前の、僕の席に座るのが手っとり早いので、僕に「どけ」といっている。

が、もちろん納得はしていない。

「悪いけど」僕は平然とした調子で、弁当のふたを開けながら答えた。
「僕は自分の席で食べるつもりだから」

渚さんは仏頂面でしばし黙り、顔を背けて「マジウザい……」と呟いた。
ウザくてけっこう。この場所を追いだされてしまっても、僕にはいくところがない。

「キーコ、いくよ」
「うん」

後ろでガタッと椅子が引かれる音。二人は廊下側の青柳さんの席へ向かったようだ。渚さんが一度振り返り、「覚えときなさいよ」といったふうの視線を僕にぶつけてきた。「ふん」と鼻で笑ってやった。

キーコの席が僕の後ろに存在する限り、いずれはこんな状況も訪れるだろうと踏まえていたが、早速だった。なんとまあ、先が思いやられる。席替えのせいで、僕の学校生活は荒れに荒れるだろう。今までは潜水艦の中で色とりどりの魚たちをぼうっと観賞してこられたが、これからは荒ぶる肉食魚たちと対決しながら、海中を自力で泳いでいかねばならない。

何度も何度も溜息をつきながら、僕は寂しく食事を続けた。何気なく隣を見ると、深田さんのもとに横井さんがやってきていた。そういえばあれから一週間、塚田との仲は進展したのだろうか。少しだけ気になったが、彼女とはまだそれほど親しいとはいえない。自分からそんな話をきりだす勇気が僕にはない。

「あれ、手塚くん。ノゾミの隣だったんだ」
本当に今気づいたのなら、僕の影の薄さに自分でもびっくりだ。ノゾミとは深田さんの名前なのだろう。

「うん。そういえば横井さん、塚田とはどうなった？」
実に自然に質問できた。と満足気になったが、よく考えてみればちっとも自然ではない。ただ、口にしてしまったものはしまえない。

「ああ、塚田くんね」表情に影を落とす横井さん。垂れかかる髪の毛を、耳の後ろにかき上げる。
「ちょっとあきらめモードかな。あまりに脈がなさ過ぎて」

「そ、そう」
脈がない？　そんな馬鹿な。確かに憶測ではあったが、塚田が横井さんに惚れているというのは、僕の中で事実化していた。深田さんはどう思っているのだろう。彼女も僕と同じ意見だったはずだ。

「心移りしちゃったっぽいよ」
まるで僕の心を読んだように、深田さんが表情を変えずにいった。

「心移り？」
「あれ」
深田さんに箸で差された場所を、目で追ってみる。廊下側の数人のグループ。キーコたちだ。渚さんに青柳さんに内藤さん。男性陣は生田に塚田だった。塚田は主に、自身のひざの上の青柳さんと何かを話しているようだ。くそ。女の子のお尻をひざに乗せるだなんて、どこのマフィアのボスだ。

「つまり」深田さんに視線を戻す。
「青柳さんに乗り換えちゃったってわけ？」

「手塚くん、君もまだまだ青いね」冗談めかして横井さんがいった。
「塚田くんの性格から考えると、本命相手にあんな気安い態度はとれないと思うんだ。渚さんや内藤さんにも、ときどきからかうようなことをいったりしてる」

僕はもう一度塚田を一瞥した。それから、必死に心を抑えつけながら口にする。

「深海さん？」

「ピンポーン」

何が楽しいのか、人差し指を立ててウインクする横井さん。さすが、欧米ふうの顔立ちはウインクがさまになっている。深田さんは前を向いたまま、小さく拍手をしていた。

「そりゃあ、私だって悔しいけどね。やっぱ、ああゆう明るいタイプの子って魅力的だよ。私なんて真面目だけがとり柄で、男子からは疎ましがられるばかりだし」

「そんなことはない」と胸のうちでは思っていても口にだせないこのもどかしさ。

横井さんの気持ちはよく分かる。自分とまったく違う人種の人間は、同じ日本人の中にも確かに存在するものだ。彼らは僕らの葛藤を屁とも思わないどころか、何を躊躇しているのかもまるで分からない。平気で口説き文句のような慰めの言葉もはけるし、片想いの相手と恋敵のあいだに割り込んでいける。そんな一見飛び越えられそうな壁だからこそ、胸に宿る劣等感をちくちくと刺激する。

それはそうと、塚田がキーコに乗り換えた？　本当か。じっくりと塚田の様子を観察してみる。いわれてみると、キーコと話すときだけぎくしゃくしているような気もする。でも、錯覚のような気もする。もし本当に塚田がキーコに恋をしていたとして、僕に何か不都合な点が出てくるだろうか。特にはない。ただ、ちょっと塚田に腹が立つだけだ。「どさくさに紛れて僕のキーコに」というのもあるが、なんといっても横井さんが可哀想だ。

その思いが、僕に同じ過ちを繰り返させていた。

「でも、塚田と深海さんがくっつくのはあり得ないよ。なぜなら、

深海さんは僕とつき合ってるんだから」

横井さんの反応は、三宅さんほど印象は悪くないが、彼女とほぼ同じだった。

必然的に尻のホクロについても言及し、最終的には信じてくれたようだ。深田さんは興味がなさそうに、ひたすらちまちまと箸を口に運んでいた。

「そんな不思議な話ってあるんだね」

口もとに手を当て、横井さんは本当に不思議そうに話をしていた。つまり、ゲロを浴びせた者と浴びせられた者がつき合うというのに対してだ。

「でも、少しだけ希望が持てたよ。ありがとう。塚田くんにとってはいい知らせじゃないんだろうけどね」

晴れやかな笑顔に照れて、救いを求めるように深田さんを見た。また何を勘違いしたのか、彼女もニコッと笑った。キュンとした。

五時限目の体育のあと、三組で着替えを済ませて四組に戻ってくると、予期していた通り、僕の席が占領されていた。渚さんではなく青柳さんだったので、ほんの少し強気になれた。

「ごめん、ちょっとどいて」

「えー」頬を膨らませる青柳さん。ますますカエルだった。

「今キーコと大事な話をしてるとこー。ね、キーコ」

「うん」

窓の外に目を向けながら頷くキーコ。汗を洗い流すため頭から水をかぶったのか、髪の毛がやや湿って見える。カメラの中の風呂上

がりのキーコからは、そんな些細な変化は認められない。これぞブラウン管越しと、生との違いか。

「だってそこ、僕の席だし、もう六時限目始まっちゃうじゃん」

「六時限目だけ席を交換しない？」甘えたような口調で青柳さんはいう。

「席替えしたばかりだからバレないよ」

一瞬冗談かと思って愛想笑いを浮かべたが、いわれてみればその通り、バレるわけがない。とにかく僕は授業中に席を交換するような生徒じゃないので、青柳さんの腕をつかみ、無理やり椅子から引っぺがした。

「あーん、ケチ」

温もりの残る椅子にどんと座り、次の授業の準備を始めた。社会か。体育直後の社会ほど眠たいものはない。僕はうんざりした気分になりながら、授業開始のチャイムを待った。

ところが予想に反してちっとも眠くならない代わりに、授業の内容もほとんど頭に入ってこなかった。後ろのキーコがどうしようもなく気になるのだ。まるで僕の一挙手一投足を監視されているような気分だ。現実に彼女のプライベートを監視しているのは僕のはずで、なぜこちらがそんな仕打ちを受けねばならないのか。やりきれなかった。

教師が一番前の生徒に列の人数分のプリントを渡し、それを後ろに回していくという恒例行事が始まった。僕の番になる。なるべく後ろを見ないように、プリントを持つ右手首を自分の肩口から垂らした。

しかし、いくら待ってもプリントが抜きとられない。仕方なく振

り返る。

キーコは僕の持つプリントを、神妙な目つきで眺めていた。それとも、ぼうっと考え込む視線の先にたまたまプリントがあるだけなのか。少々ためらうも、僕は「キーコ？」と囁きかけてみた。彼女ははっとした表情を浮かべ、素早くプリントを奪い去った。僕が顔を向けているのさえ、気づいていなかったようだ。

前に向き直り、僕は悔しさに任せて黒板を睨んだ。

くそ、気にしているのは僕だけなのか。キーコにとっては、あのりっくんの背中が目と鼻の先にあるというのなんて、とるに足らない事実というわけか。ああ、イライラする。僕はお前の着ている制服の下がどうなっているのか、すべて知っているんだぞ。分かっているんだろうな……分かっていないのだった。

キーコを非難しながら、結局は僕もうとうとしてしまった社会の授業が終わりを告げた。

岩口待ちの時間。キーコは青柳さんのもとへ出張り、僕は束の間の安らぎの時間を読書にあてていた。しかし、突然活字に影が落ちる。

三宅さんだった。たこ焼きにたこを入れ忘れてしまったときのような複雑な表情を浮かべ、立ち尽くしている。その視線は僕に向いていないが、立ち位置からいって明らかに、僕に用だ。席替えをしてからというものの、僕を訪ねてくる女子が急増したな、と思う。その辺りについては悪くない傾向だといえたが、相手がこの女だという場合はどうなのだろう。

「どうしたの？」

なかなかきりだそうとしないので、仕方なく訊ねてやる。

「あんたと深海さんがつき合っている、っていうのは認める」
「は？」
「でも……」しきりに首ほどまでの髪の毛をいじる三宅さん。いいよどんだ際の癖なのかもしれない。
「千円を払うつもりはさらさらないから。だって、勿体ないもん」

そして逃げるようにしていってしまった。
僕は彼女の逃亡に難癖をつけるのも忘れ、ひたすら困惑していた。

僕とキーコがつき合っているのは認める？　ということは、キーコの尻のホクロを確認したのか。いったいどうやってこの短時間に。体育の着替えのとき、後ろからぺろんとパンティをめくったのか。ふん、まさか。ならば直接本人に聞いたのか。お尻のホクロアンケートにご協力ください。あなたのお尻にホクロはいくつありますか？　どんな位置にありますか？　ご協力ありがとうございましたー。んな、アホな。

不吉な想像をし、青ざめる。危ぶんでいたように、僕の出任せをキーコに話したのではないだろうな。でも、もしそうだとしたら、僕の言葉を真実だと認めているのは辻褄が合わない。ひょっとしてキーコもグルになって僕をからかっている？　いや、はめようとしている？

いくら考えても埒が明かなかった。いっそのことキーコ本人に聞いてみたいぐらいだ。もちろん聞けない。
ああ、やはりあんな嘘などつかなければよかった。結局千円もごまかされたし、損をするのは僕だけだった。不安からくるストレスで、円形脱毛症にでもなったらどうしてくれる。たとえ三宅さんに

ついてはこれで一件落着だったとしても、まだ横井さんたちが残っているのだ。あの明快な欧米少女でも、血迷って陰湿なリークに走らないという保障はない。

岩口が教室に入ってき、一拍遅れでキーコが戻ってきた。友人たちとの楽しい時間の名残か、そのときの朗らかな笑みがひどく鼻についた。

唐突に思いだす。

僕はなんのために彼女の部屋にカメラを仕かけたのか。復讐のためじゃなかったか。

１５　彼女を指差して（前書き）

火曜か水曜更新です……；

15　彼女を指差して

終礼の直後、僕は一番に席を立って教室を出た。キーコの脇を通る際に彼女を睨みつけたら、意外にも目が合ってしまい、慌てて自分からそらした。

くそったれが。なんで僕が怯まなきゃいけないのだ。復讐だ。復讐だ。

初めて覚えた言葉をいじらしく連発する赤子のように、僕は頭でそう繰り返しながら家路を歩いた。

帰りのホームルームのわずかな時間に、今の状況をどう打開するか、ある程度の考えはまとめられた。面白くないのはなんといっても、キーコが平然としていることである。自分のオナニーする姿を他人に見られるなんて僕だったら蒸発ものなのに、彼女はなんら変わらずふてぶてしい態度をとり続けている。それはなぜか。もちろん、覗かれているというのを彼女が知らないからだ。

帰宅して部屋着に着替えると、僕は早速自室に引きこもった。一度意味もなくチューナーの電源を入れ、無人のキーコの部屋を眺め、それからビデオデッキにテープを差し込んだ。

そう、キーコのあられもない姿を録画してやるのだ。彼女が服を脱ぎ、昇天して服を着るまで一秒たりとも逃さずにばっちりと。そしてこの録画テープを、インターネットに流出させてやる……いや、嘘だ。そこまではしない。というか、パソコンなど扱えない。

本当は、キーコの部屋にまた忍び込み、ぽんとベッドの上にでもこのテープを置いておくのだ。あれ、これは何かなとテープの中身

を確認すれば、さすがのキーコも背筋を凍らせてしまうに違いない。

惜しむらくは、そのさまをモニタリングできないということだ。キーコがテープを観れば、カメラの位置もばれてしまうだろうし、僕に疑いがかかる可能性だってある。最悪通報され、僕の部屋が家宅捜索の対象になるというのもあり得る。

だから、テープを置きに部屋へ忍び込んだ際、同時にカメラも回収しなくてはならない。そしてチューナー共々、どこか家の外に隠しておくのだ。

つまり、実行に移すときは、モニタリングを終えるときでもある。重ね重ね惜しいが、このまま続けていても何も得るものはなさそうだし、そうしなくてもいつかはカメラが見つかってしまうだろう。きっと、僕に残された唯一の道なのだ。

録画テープの映像を観たときのキーコを想像すると、思わず笑いが込み上げてくる。くっくっく。彼女はどうするだろうか。母や兄にそれを告げるか。自分のオナニーする姿が映ったビデオをだぞ。くっくっく。すっぽんぽんで股間をまさぐっているんだぞ。通報したら多分、警察にも見られてしまうぞ。くっくっく。

録画の準備は整った。あとは主演待ちだ。彼女が帰る午後六時まで、僕はいつものようにゲームをしながら時間をつぶした。今月は中間考査もある。いい加減勉強をしたほうがいいかとも思われるが、キーコの件が済まない限りはどうせ頭も働かない。さあ、キーコ。僕の将来の問題でもあるのだ。手短に頼むよ。

キーコが情事に励む時間はまちまちだ。夕食を終えた八時から九時頃の日もあれば、その後の入浴を終えた十時から十一時頃の日もある。始める前は必ず、パンティ一枚でしばしくつろいでいるので

見過ごしはしないだろうが、できればやはり服を脱ぐ瞬間から記録したい。そうしたほうが、あなたのプライベートは完全に把握しています、というのが表れると思う。バッテリーを気にしてこまめに電源は落とすが、今夜は本当にテレビの前に張りついていなければならない。

六時半少し前にキーコは帰宅した。制服姿だった。彼女が帰宅した瞬間を目撃したのは初めてとなる。帰ってすぐに始めるとは想像がつきにくかったが、せっかくなのでモニタリングを続ける。一応、ビデオの録画ボタンに指を添えていた。

まずは画面の右端に消え、テレビをつけたようだ。それからやけに食い入るように画面を見つめていた。何か気になるニュースでもやっていたのだろうか。そう思いきや、テレビを消すためかまた右端に消え、明かりをつけたまま部屋を出ていった。

戻ってきたときは部屋着に変わっていた。アメコミのようなポップなイラストがプリントされた白いティーシャツと、黒いスパッツ。そしてまた右端に消える。

これまで数週間キーコを観察してきて、彼女は相当なテレビっ子だというのが分かっていた。リモコンがないようで、一時間のうちに何度も何度も立ち上がってテレビを操作する。テレビ自体はカメラの位置から隠れているので、正確には定かでないが、彼女の様子からチャンネルをきり替えているのだと推測できる。同時間帯に観たい番組がひしめきあっているのだろう。ビデオに録ればいいじゃないかと思う。

「りっくん、ご飯食べなさーい」

いつの間にか帰っていたおふくろに呼ばれる。キーコもそろそろ

夕食だろうし、僕は「はーい」と長い返事で応えた。

父さんは帰っておらず二人での夕食を終えてから、僕は早速モニタリングを再開した。午後七時半になろうとしていた。

ところがキーコの部屋は真っ暗で、それから幾度となくチューナーの電源を入れては消し、入れては消しを繰り返しながら見守っていたが、次に明かりがついたのは午後十時を過ぎた頃だった。

すでにパジャマに着替えていた。まさか、部屋の外で済ませてきた、などという話はまかり通らない。「いよいよこれからだ」と録画ボタンを押さんとする左手が熱を帯びる。

しかしキーコはガラスのテーブルに何やら本を数冊広げ、書き物を始めてしまった。あれは間違いない。教科書にノートだ。ここにきて今更、毎晩遅くまで勉強している、を体現しようとでもいうのか。冗談じゃない。

苛立ちからベッドに上り、思いっきり壁を叩いた。画面の中のキーコはノートに落としていた視線を上げて一瞬ピタッと静止し、そうっと後ろを振り向いていた。そんな彼女の反応を観るのは面白かったが、僕は自分の行動に後悔を覚えた。そんなものを発端としてキーコが服を脱ぎだすはずはないし、万が一発端となっても、それを録画したビデオなど使えない。「僕が犯人です」といっているようなものだからだ。

結局その晩、キーコは純潔なまま就寝した。今夜はそんな気になれなかったのだろう、と僕も観念した。

天変地異が起こった。

なんとその夜から、キーコはまるで出家してしまったかのように、

あるいは性に向ける気力を使いきってしまったかのように、ぱったりとオナニーをやめた。おそらくは中間考査が近づいたので控えているというのが真相であろうが、とにかく納得がいかない。こちらが名案を思いついた途端にこれだ。僕の考えを見透かしているとでもいうのか。

試験まであと一週間と迫っていた。自分の部屋でとは裏腹に、キーコはなんら変わりのない学校生活を送っていた。一方の僕も、いい加減にあきらめていた。いかんせん僕だって勉強をしなくてはならない。キーコに気をとられて赤点でもとってしまったなら、今度は父さんにどんな仕打ちを受けるか分かったものではない。

今は我慢しよう。中間考査が終われば、キーコも日課を再開するはずだ。

日課……？　そういえばキーコがオナニーを始めたのは突然のことだった。それまでそんな気配はまったくといっていいほどなかったのに。

僕が見ていないときに？

あり得ない。キーコは長いときは一時間弱ほど裸でいるのだ。気づかないはずがない。となると、あの夜に初めて覚えたのだろうか。思えば僕のように手馴れていなかったような。

うん、決まりだ。何がきっかけなのかはつかめないが、キーコの僕と同じ日課はあの夜から始まった。

なんだか興奮してきた。僕はキーコの、性の歴史が産声を上げた瞬間を目撃したわけか。要するに最初の男だ。ははは。この先彼女がどんな性体験を積み重ねようが、その起源には常に僕がいる。ははは。

「今日ね、ヒメコんちで一緒に勉強するんだけど、キーコもこない？」
「あ、うん、いくいく。それじゃあさ、一緒に晩御飯食べようよ。うち、お母さんが飲み会で遅くなるんだ」
「あ、私はちょっと家族で外食する予定なんだよね。ヒメコは？」
「うん、聞いてみる」

四時限目の終了を告げるチャイムが鳴って数秒後、そんな会話が背中越しに聞こえてきた。キーコの相手は声色からいって内藤さんらしい。
次第にがやがやと後ろが騒がしくなっていった。椅子を引きずる音などを聞き、「今日はキーコの席に集まって昼食をとるのだな」と合点がいった。僕に遠慮してくれていたのか、席替え後では初めてだった。

ちらっと背後を見る。メンバーは渚さんに内藤さんに塚田。青柳さんは本日風邪で欠席。生田は最近、別のグループと行動を共にしていた。穂積さんは、席替えしてからは完全に親交を絶っている。席が近いだけの仲だったらしい。

四人はそれぞれ椅子を持ち寄っていた。僕の席を明け渡す必要はないらしいが、かといって大変に息苦しい。横井さんと深田さんは横井さんの席で昼食をとるようになってしまい、ここ数日はずっと一人で寂しく弁当を食していた。それだけならまだ気楽でいいと割りきれるが、すぐそばにグループ、しかもキーコたちが陣どっていながら一人というのは、どうにも落ちつかなかった。

「ねえ、昨日の〈尋ね人ウォーリー〉観た？」
「観た、観た。あれ、すごく感動したよねー」

午後八時台の人探しバラエティ。僕も時々観ているが、昨夜はキーコのモニタリングに忙しかった。キーコはというと、やはりしきりにチャンネルを替えながらもテレビに釘づけとなっていた。

「そうかな。俺ってああいうの、あんまり泣けないんだよな」

「うわ、最悪。嫌だね、人の心を持たない男って」

「お前にいわれたくねえし」

塚田と渚さんが笑い合っている。進級当初は予想だにしなかった情景だ。

「何それ。面白いの？」

「はあ？　あんた知らないわけ？　生き別れの親兄弟をスタッフが総力を上げて探すのよ。最後には絶対感動の再会シーンが用意されててさ。ああ、思いだしてまた泣けてきた」

「ふーん。私、あまりテレビ観ないから分かんないんだよね」

無意識のうちに後ろを向いていた。それに唯一気がついた渚さんに、悪魔よりひどい顔で「なんか用ですか？」と訊ねられ、僕はしゅんとなって前を向き返した。

そしてご飯を一口口に入れ、眉間にしわを寄せた。

今の、キーコの声だったよな。「あまりテレビ観ない」って、なんでそんな嘘をつくんだ？

「ねえ、この人って、普段家で何して過ごしてるんだろう」

渚さん。声を潜めていたが内容は丸分かりだった。というか、ある意味声を潜めていたおかげで、僕が話題にされているというのに、疑いの余地はなかった。

「勉強に明け暮れてるんじゃない？」

「勉強なんかしてないって、寝ても覚めてもゲームばっかやってるよ」
塚田のクソハゲデブが。かつてはお前もそうだったろうが。
「もしくはさ……ふふ」
いやらしい含み笑いと、不自然の間。
「ちょっと、マジでやめてよ！　最悪！　キモ過ぎるんですけど」
「それは塚田くんでしょ！」
何やら湧いている。いったいどうしたのだろう。塚田のいった「もしくはさ……」の次はなんなのだ。更に音量を縮めたというよりは、ジェスチャーで表現したというような雰囲気だった。
「一度こいつの家にいってみろって。イカくさくてたまんなくなるぞ」
「マジでキモいから！」
……なるほど。それは僕の日課の話か。
ならばおめでとう、大正解だ。さすが塚田は僕についてよく分かっているな。いいさ、いいさ。僕をこけにして笑いをとりたいのなら、いくらでもとるがいい。
ただ、一つ気になっていた。
再び振り向く。会話は瞬時にとまったが、みんな薄笑いを浮かべて僕を蔑むように見ていた。キーコは……少しだけ期待したが、彼女も同じだった。
目頭が熱くなり、脇を汗が伝った。そして次の瞬間、僕は真っ直ぐに彼女を指差していた。

「自分だって、人のことといえないだろう」

16　ベッドの下から

しーん、と静まり返る。四人の顔に笑みは消え、代わりに表れたものといったら、特に何もなかった。僕の言動があまりに想定外だったせいで、思考回路がショートしてしまったのだろう。

そんな中でもいち早く不快感をあらわにし、力いっぱい傲慢な口調で僕に物申した渚さんは、やはりタフな少女だ。

「は？　何いってんの？」

「日本語が苦手なのか？」だが、僕も負けてはいない。

「僕が家で何か下品なことをやってる、って盛り上がってるみたいだけど、そういう自分だってやってんじゃないかっていう意味だよ」

次に口を開いたのは、意外にもキーコだった。

「私、何もいってないけど……」

席替えをしてから初めての会話がこんなものになるとは、さすがに想像がつかなかった。彼女のいい分はもっともである。確かに、盛り上がっていたのは主に塚田と渚さん。それなのに、僕が指を差しているのは塚田でもなければ渚さんでもなく、どの角度から見たってキーコだ。

「深海さんは何もいってないぞ。ただ笑ってただけだろ」

塚田が声を荒げる。こいつ、キーコに乗り換えたって話だったな。愛する人を守る俺カッコいい、ってわけか。ふん、救いようのない。

「同じだろう」僕は鼻で笑いながら、ゆっくりとかぶりを振った。そしてまたキーコを見すえる。

「自分だってオナニーしてるくせに、人を笑うなんて最低だと思わないか」

キーコは言葉を忘れてしまったかのように何も口にしない。じっと僕を睨み返すばかりだ。渚さんと内藤さんは、僕を見ながらひそひそと、今度は僕に聞こえないように何やら囁き合っている。僕の様子がただごとじゃないと理解したのだろう。その途端に、面と向かってものを吐けなくなる。クズだ。なんて情けない。

「お前、いい加減にしろよ」塚田が立ち上がる。戦闘モードだ。

「女子に対していっていいことと悪いことがあるだろうが」

座ったままの僕に、上空から顔を近づけすごむ。しかし、僕は彼になど目もくれず、相変わらずキーコだけをとらえていた。空気が張り詰めたのを察したか、いつの間にか、教室のところどころに散らばった生徒たちが私語をやめていた。黙って僕らに注目している。

さて、とり澄ましてはいるが、実は僕も相当に焦っていた。

売り言葉に買い言葉とはよくいうが、買ってくれた相手の満足する品物などまったく用意していなかった。それなのに事態を収拾に持っていこうとしないのは、単に引っ込みがつかなくなっただけである。誰か、頼むから騒ぎをとめてくれ、と思う。

キーコの目が次第に赤くなっていく。ああ、もし泣かれたらどうしよう。よし、そのときになったら謝るのだ。悪い、泣かす気はなかったんだ、ってクールに決めよう。

「やってるんだろ」泣け。さっさと泣け。

「おとなしく白状しろよ」

「てめえ！」
その塚田の怒鳴り声を耳のそばで聞くとほぼ同時、ゴフという鈍い衝撃音と共に、目の前が真っ白になった。重力がなくなり、ふわっ、と空へ舞い上がっていく感覚。が、何かに頭を打ちつけた拍子に、一気に重力が戻る。
我に返ったとき、僕は教室の床にうつぶせていた。痛い。右の頬がじんじんと痛む。

「やめろって！」
僕は同じ体勢のまま、反射的に顔を上げた。生気の抜けたような表情で僕を見下ろす塚田を、生田が制止していた。制止していたといっても、塚田はぼうっと突っ立っているだけである。
「こんなやつ殴ったって、なんの意味もねえだろ！」
僕はようやく合致した。塚田に殴られたのだ。

「ああ、悪い」
塚田のその呟きを聞き、生田が彼から離れる。そして僕を一瞥してから、キーコの背中をポンと叩いた。キーコはうつむいたまま、何も応えなかった。彼女も椅子から立ち上がっている。なんのために？　と僕は一瞬考えたが、彼女の顔を見てそれをやめた。

キーコは泣いていなかった。なんだかとても安心した。

岩口は教室におらず、他の教師を含め誰も呼びにいったりはしなかったので、騒ぎはすぐに収まった。塚田が僕に口だけの謝罪をし、僕も彼にならった。キーコにも謝っておいたが、彼女の反応はやはり何もなかった。

放課までのあまりにも長過ぎる時間を、僕は抜け殻のように無気力に潰した。キーコも似たようなもので、授業が終わるたびに渚さ

んやら生田やらが、明るい話題を持ちかけにきていたが、一向に素っ気ない調子だった。

「さようなら」

終礼をどこか脳裏の隅で聞き、五秒ぐらいぼうっとしてから、僕はそっと呟いた。

「回収しよう」

キーコの部屋からカメラを回収しよう。できれば今日中に。復讐なんてどうでもいい。というよりも、復讐は済んだ。先ほどの僕の言葉で、キーコはかなりのダメージを受けている様子じゃないか。それに、僕自身も。

この刺すような胸の痛みは、逆立ちをしてもキーコには抗えないのだ、というのをまざまざと示している。

結局僕は彼女が好きなのだ。何をしたとしても、すべては僕自身に返ってくる。耐えがたい自責の念として。

僕が立ち上がったとき、教室にクラスメイトは半数以下になっていた。キーコもいなくなっている。夢中で部活に打ち込んで、ショックを払拭してくれれば、と思う。その間に、もう一度だけ部屋に忍び込ませてもらうよ。自分の愚行を終わらせたいだけだから。

昇降口を出て校門まで歩く。なんだか今日は帰宅する生徒の数が多いような気がする。うちの学校の生徒はほとんどが部に所属していて、僕の下校時にはいつも疎らなのに。

校門を抜けた付近で、横井さんと深田さんを見つけた。彼女らも僕に気がついたようだった。深田さんは無言ながらぺこりと会釈をしてくれたが、横井さんはすっと目をそらしてしまった。昼休みの

騒ぎが尾を引いているのだろうか。「あいつと関わるとろくなことはないぞ」と。
ただ、僕は彼女たちを呼びとめた。一つ、謝っておかねばならなかった。

「この時間に帰るのって珍しいんじゃない？」
当たり障りのない話から始めた。

「もうすぐ中間考査だから」
歩きながら、深田さんが答える。校門を出るとすぐ二手に分かれるが、彼女たちは僕と同じ方向らしかった。
「テストの一週間前は、部活禁止になるんだよ」

「ああ」
そういえばそうだった、と納得しかけた矢先に、はっとした。ならばキーコも真っ直ぐに帰宅するわけか。どうしよう、カメラが回収できない……いや、確か誰かの家で勉強するとかなんとかいっていたはず。大丈夫だ。忍び込むチャンスはある。

横井さんはしきりに周囲を気にしていた。そして指先で深田さんのセーラー服の袖をつかみ、「いこう」と急かしている。そんなにも嫌われてしまったのか。それも仕方のないことかもしれない。

僕は彼女たちに、先日の話が嘘だと正直に話そうと考えていた。「キーコとつき合っている」というあれだ。まあ先ほどの騒ぎの原因を聞いているのであれば嘘だというのはもうばれているだろうし、その嘘こそが、横井さんが僕を避ける理由である可能性も高い。しかし、自分の口からきちんと説明すべきだと思った。お尻のホクロについて言及されたなら、さすがに何かいい訳を探さざるを得ないが。

「こないだの話だけど」早速きりだした。
「僕と深海さんがつき合ってるって話」
「その話はもういいよ」
返事をしたのが予想外に横井さんだったので、僕は少々面食らった。
「もういいって……？」
「私、深海さん、ちょっと苦手かも」
「え？」
僕は目を丸めて横井さんの横顔を見つめた。深田さんはいつもの無表情で、というよりも、何もかもを見透かした達観的な表情で、僕らのやりとりを眺めている。
交通量の多い大通りに差しかかっていた。左へいくとわずかばかりで僕の団地へつく。ところが二人の足は右へ向いていた。それでも僕が立ちどまると、親切に彼女たちも足をとめてくれた。
「席替えした日とその前にも一度、手塚くんと一緒にご飯食べたでしょ」
僕は頷いた。話の先がまるで読めなかった。
「それを気にしてたらしくて、深海さんにいわれたんだ。手塚くんとあんまり仲よくするなって」
「え？」
僕と仲よくするな？
「な、なんで？」

「自分の彼氏だからに決まってんじゃん」そういって横井さんは僕を睨んだ。それからふうと溜息をつき、唇を尖らせながら続けた。
「手塚くんには悪いけど、なんかむかつくんだよね。自分は塚田くんと仲よくしてるくせにさ。まあ、こっちは別につき合ってるわけじゃないから、何もいえないけど」

つき合っている？
僕の混乱はピークに達していた。なんだそれは。なんだそれは。僕が誰かと仲よくするのが不快なのか。だからってわざわざ横井さんに釘を刺したりするか？　いや、それとも、あんな変態とは関わらないほうがいい、という横井さんに向けた忠告なのか。

「キーコ、僕とつき合ってる、っていってた？」
まさか、と思いつつも訊ねてみた。すると横井さんはあっさりと首を縦に振った。

「『りっくんは私とつき合ってるんだから』だって。何が『りっくん』だよ。ねえ」横井さんに同調を求められ、深田さんは少々戸惑い気味に頷いた。
「『そんなの、知ってますから』っていってやったわよ。手塚くん……じゃなくて、り・っ・く・ん。あんな女、さっさと別れたほうがいいよ。さっきだって塚田くんとなんか揉めてたじゃん。あれもどうせあいつのせいなんでしょ？　これは君のためを思っての忠告なんだからね」
僕が忠告されてしまった。

そして彼女たちは去っていく。横井さんが僕を避けていた理由は分かったが、あまりに突飛過ぎて当然理解不能だった。深田さんが不安げに僕を振り向いた。彼女にぎこちない笑みを送ってみる。彼女はやっぱり、にこっと笑い返してくれた。もう、まったく意味が

分からない。

思えばキーコは不可解な言動が多過ぎる。ゲームソフトを持って謝りにいった僕を快く迎えてくれたかと思えばすぐに突き放し、それでいて大柳に殴られそうになったときは彼をとめにかかる。僕が暗くてキモいやつだと笑えば、今度は「りっくんは私とつき合っている」だって？　たいがいにしてほしい。いったい僕をどうしたいのだ。

もう分かった。とにかく、あいつはちょっと頭がおかしいのだ。「仲よくするな」っていうのはきっと始めの推測通り、僕を一人にしたいだけなのであろう。「つき合っている」とまで嘘をついて。

そうか。ひょっとしたら三宅さんにも同じようにいったのではないか？　これですべての辻褄が合う。つまり、キーコは狂っている。一件落着だ。

家についた。もちろん誰も帰っておらず、僕はすぐさま前回と同じ黒いジャージに身を包んだ。

キーコという女の本性を知り、彼女への恋心が萎え始めてしまっているのは確かだ。だからこそ、カメラの回収は行わなくてはならない。もはや自分の愚行がどうのこうのというよりも、それによってキーコが二度と僕に関わらないでほしい、という気持ちが強かった。

興奮を抑えつつ、僕は自室へ入った。今回はカメラを回収するだけといっても、やはり慎重にやらねばならない。まずは最後に一度、キーコの部屋をモニタリングしてみようと思う。ひょっとして、一度帰ってから勉強会に出向くのかもしれない。

テレビとチューナーの電源を入れ、薄暗い無人の部屋が映しださ

れたとき、僕は気がついた。そうだ。キーコがいなくても、他の家族がいるかもしれないのだ。どちらにしても、保険のために電話をかけておかなくては。

そしてチューナーの電源をきろうとした、次の瞬間だった。

「……ん？」

カメラの前に人影が現れた。

キーコ？　違う……男だ。ニット帽を目深にかぶり、僕と同じように全身黒ずくめの格好をしている。手袋もはめている。間違いなく大人だが、年齢はよく分からない。二十歳ほどにも見えれば中年以上にも見える。小太りな体型だ。

兄？　しかしながら、キーコに兄がいるというのは昔彼女の口から聞かされただけで、実際にどんな人物なのかは知らなかった。小学生当時「大学生なの」といっていたから、年齢的には合うのか。

ただ、最近ではなんとなく、兄は別居しているのでは、という憶測を立てていた。カメラの向こうに、あまりにも存在感がなさ過ぎるためである。

兄でなければ、有力なのは空き巣か。服装的には、兄と考えるよりよっぽど自然だ。ただ、もしそうだったとして、僕にできることなど何一つない。キーコには悪いが、静観する他ない。大事なものを部屋に置いていないのを、願うばかりだ。

きょろきょろと部屋を物色し、やがて男はベッドの下に潜り込んだ。そこに金目のものを匂ったのだろうか。

僕はごくりとつばを飲み込み、モニターを食い入るように見つめ

た。
それから一分、二分と時間が経過してゆく。次第に僕の胸はどくどくと高鳴り始めた。
男がベッドの下から出てくる気配が、まるでなかったからだ。

１７　食事はやっぱり賑やかなほうが（前書き）

まーたーおーくーれーたー。
すーまーぬー。

17　食事はやっぱり賑やかなほうが

ひょっとして、とんでもない状況を迎えてしまったのではないか。そう理解しようとする頭に、僕は必死に抵抗していた。

きっとキーコのおばさんが帰宅し、男はそれを嗅ぎつけて咄嗟にベッドの下に隠れただけなのだ。もしくは、男はやっぱり兄で、久々に家族のもとへ帰ってきた。ものの土産として妹を驚かせようと考えている。本当にそうだったら、どんなに救われるだろう。

でも、そうじゃなかったらどうするのだ。男は至極当たり前の賊であり、ベッドの下でキーコの帰りを待ち伏せている。その目的を考えるだけで、僕は身震いしてしまう。このままキーコが帰ってきてしまったら、カメラの向こうでどんな惨劇が繰り広げられるのか、想像に難くない。

いてもたってもいられなくなった。一一〇番通報しよう、と電話のあるダイニングに移った。男が兄だったときのことなんて考えてはいられない。事態は一刻を争うのだ。

しかし、受話器を上げて一のボタンを一度プッシュしたところで、僕は「はっ」と気がついた。コールさせずに受話器を置いて、天井を仰ぎ見る。

警察になんといえばいい？

「隠しカメラでキーコの部屋を覗いていました」なんていえるわけがない。それじゃあ、男が侵入するのを偶然目撃しました、っていうのは？　いや、駄目だ。実際には目撃していないのだから、詳細

を聞かれるとまずい。ならば、どこか公衆電話から匿名でタレ込むか。公衆電話なんてどこにあったろうか。探している場合じゃないぞ。

自室に戻る。男に動きはなかった。まるで眠っているかのように、ベッドの下で伏せたままだ。その映像を眺めながら、僕はいよいよ認め始めていた。警察の力は借りられない。僕一人の力でなんとかするしかない。でも、どうすればいいのかさっぱり分からない。すなわち、やはり何もできない。

ベッドにもたれかかり、再び絶望から虚空を仰いだ。そして数秒後、頭の中に思いもよらない考えが浮かんできた。

静観する。それが一番いいのかもしれない。男が兄だという可能性も捨てきれはしないし、下手に動けば僕が損をするだけ。そもそもキーコという女に根っから呆れ果てたばかりではないか。もし彼女の身に何かあったとして僕は。僕は……

「もしりっくんの家に強盗が入ってきたら、壁をがんがんって蹴ってよ。私、すぐに助けにいくから」

いつかの小学校からの帰り道だった。チャームポイントであるにこにこ笑顔を、辺り一面に振りまきながら、彼女はどんと胸を叩いてみせた。

「それなら僕だって」負けじと僕も返した。

「女の子を守るのは、男の子の役目だからね。キーコに何かあったら、僕がすぐに駆けつけるから」

「じゃあ、お互い約束ね」

「うん」

絡み合う小指の感触をいまだに覚えていた。というよりも、今思

いだした。あのときの僕にまったく嘘はなかった。本心から、キーコに危険が迫ったときは、身をていしてでも彼女を守る気でいた。それは彼女のためであり、自分のためでもあった。キーコがこの世界からいなくなってしまったら……そう想像するだけで、答えは簡単に導きだされた。

部屋を出て、階段を駆け下りていた。

くそが、くそが、くそが！　キーコは変わってしまったけれど、彼女への気持ちはそう簡単に変えられない。悔しいが、僕はやっぱり彼女が好きだ。好きな女が賊の手に落ちるのを、指をくわえて黙って見ていられるか！

時刻を確認してこなかったが、もう五時前ほどになるのか。とはいっても、空の色は昼間のそれである。

団地の、キーコの家へ上がる中央の階段の前。僕はここでキーコを待つ気でいた。他に思いつかなかったのだ。彼女が帰宅するのを阻止さえすれば、とりあえず彼女の身の安全は保障される。

視線を空からキーコの部屋の窓へとスライドさせる。同時に不吉な想像がよぎった。僕が下りてくるあいだに入れ違いでキーコが帰宅していたら、すでにあの部屋の中で予期していた不幸な事態が起きている。

少々迷った末に、僕は中央の階段を上がった。そして、二階と三階とを繋ぐ踊り場で耳を澄ました。ここからキーコの部屋の窓は近い。幸いにも窓は薄く開いている。それから五分ほどそうしていたが、物音は何一つ聞こえてこなかった。大丈夫。キーコはまだ帰っていない。

出で立ちは黒いジャージ姿のままだった。こんな格好で狭い踊り場にそわそわと立っているところを誰かに目撃されたら、僕のほうが通報されてしまいかねないので、また階段を下りた。

階段の入り口と向かい合う場所に、細い道路を挟んで小さな公園がある。小学校時代の帰り道、ここに寄り道をしてキーコとよく暗くなるまで話していた。僕は公園を囲い込む背の低い石垣に座り、階段を監視しようと決めた。

キーコだけではなく、彼女のおばさんも同じだった。兄の顔は知らないが、おばさんの顔は知っている。キーコより先に彼女が帰ってきたとしても、なんらかの口実で階段を上がるのをとめるつもりでいた。

「いや」と僕は記憶をたどった。そういえば学校で、「お母さんが遅くなる」とかなんとか話していなかったか。そう、確かにそうだ。飲み会で遅くなる。キーコの口からそんな言葉を聞いた。要するに、懸念するのはキーコだけでいいというわけか。

そして、もう一つ安心材料を見つける。

あの男は、おばさんが遅くなることを知っていたのではないか。つまり、彼はキーコの家庭の事情に精通している人物である可能性が高い。となると、やはり彼は兄なのだと考えるのが筋といえよう。

もちろん、その限りではない。偶然知ったのかもしれないし、或いは兄でありながら妹を襲おうとしている、なんていう突飛な考えだって否定はしきれない。当然、「おばさんがいないのなら、ますますキーコが危ない」という見方をすべきなのだ。

とにかく、おばさんの帰りが遅いのを知っていたというのは間違

いないような気がする。だって、そうじゃないとさすがに犯行がずさん過ぎやしないか。ドアを隔ててておばさんがいながら、キーコを襲うなんて無理がある。本日はおばさんより先にキーコが帰る、という確証があったのだ。

それから、部屋だ。部屋についてはどうだ。

あの洋室がキーコの部屋だと知っているからには、よっぽど親しい間柄だといえるのではないか。となると、どう考えても兄。

いや、いや、いや、これまた穴が多い。同じく偶然知ったのかもしれないし、部屋の内装から推測だって充分に立てられる。もっといえば、たまたま忍び込んだ家に女の子が使っているっぽい部屋を見つけ、後先も考えずに待ち伏せているのかもしれない。だとしたら、すべてが振りだしだ。

僕は犯人像を割りだそうとするのをやめた。どうやっても仮定の域を出ないのなら、考えるだけ無駄というものだ。

三十分ほどが経過し、空に明らかな暗雲が立ち込め始めた。ここにきた当初よりも辺りはだいぶ暗くなっており、気温も下がっていた。ただ、ジャージの下の僕の身体は絶えず汗ばんでいる。

中央の階段を下りてきた人物は一人。二〇三号室に住んでいるらしい老婆。逆に上がっていった人物は二人。四階の住人であるサラリーマンふうの若い男性と、先ほど下りてきた老婆の帰宅。キーコの家の玄関もぎりぎりであるが見えた。今のところ玄関の開閉はない。男はまだ中にいる。

いや、ベランダだってあるぞ。僕もそうして侵入したじゃないか。もしベランダから逃げたとすると、そのまま僕の家に侵入したりも

できるわけだ。うちのガラス窓の鍵は閉まっていただろうか。残念ながら覚えていない。

頭のてっぺんに冷たいものを感じた。数秒後、鼻先に第二陣がやってきて、すぐに断続的となる。

雨だ。

僕は近くに立つ大きな木の下に素早く移動した。完全に防いでくれるわけではないが、小降りのうちは充分だろう。監視を継続する。

左方の駐車場から小走りで駆けてくる、若い女性の姿が見えた。

目の前にきたときに気づく。おふくろだ。

もうそんな時間になっていたか。「うむ、やはり若々しいな」と満足気になりながら彼女を見送る。「遅くなるから夕食はいらない」と話しておこうとも考えたが、このジャージ姿を説明するのが億劫である。

「あ……」

駄目だ、と僕はすかさず母を追った。男がベランダから逃げて、母と鉢合わせてしまっては困る。あれだけ美人なのだから、ターゲットを母に定め直してしまうかもしれないぞ。

「りっくん？」

郵便受けが並んだ階段の入り口付近。そこからはすでに雨を避けられた。おふくろは目を丸くしながら、茶髪のショートボブを指でかき上げた。白い長袖のティーシャツが、ところどころ雨に湿っている。「どうしたの？　なんなの、その格好」

「いや、その」

なんといえばいいのだろう。ジャージについてもそうだし、おふくろが家に帰るのをとめる文句も浮かばない。僕はごまかすように

質問を質問で返した。
「あのさ、ベランダの窓って、ちゃんと鍵閉めてる？」
「ベランダの窓？」そう呟き、おふくろは人差し指を口もとに当てて考え込んだ。
「うーん、覚えてないな。開けっ放しかもしれない。それがどうかした？」

「いや、その」
無限ループになりそうだ。
僕が次なる言葉を探すあいだ、おふくろは怪訝そうに息子を見つめていたが、しばらくして、ぱっと顔を明るめた。
「あ、こんばんはあ」

視線は僕の背後を向いていた。
なんとなく予感はあった。僕は無意識のうちに後ろを振り向き、予想通り目の前を早足で横ぎっていく少女の姿を認めると、大急ぎで走りだしていた。

「ちょっと、ちょっと待ってくれ。キーコ」
背中にそう投げかけると、キーコは急停止し、こちらに顔を向けた、僕を見て意外そうな表情を浮かべる。肩にスポーツバッグをかけ、両手で持った学生かばんを頭の上にかざしていた。

「何？　なんなの？」
髪の毛がかなり濡れていた。気がつくと、雨の勢いが増しており、僕の頭にも重い雨粒がぼたぼたと落ちていた。僕は彼女の手を引き、再び郵便受けの前に戻った。まだおふくろはおり、キーコと同じく、不思議そうにしている。

「まだ帰らないほうがいい」あらかじめ考えていた台詞を、囁き声でキーコに告げた。
「キーコの部屋から不審な物音がする。誰かが侵入している可能性が高い」

「え？」
さすがに驚いたようで、キーコは目を大きく見開いた。しきりに額あたりをセーラー服の袖で拭っている。

「だから……」
「どうしたの？　なんの話？」
おふくろが突然話に割り込んでき、僕は口をつぐんだ。直感的に、彼女にはまだ話せないと思った。なんだか話がややこしくなりそうだからだ。
「そういえばキーコちゃん。今日お母さん、遅くなるんでしょ？　うちで晩ご飯食べていけばいいじゃない」

「あ、でも……」
キーコはちらっと僕を窺った。

「そうしよう」僕は頷いた。
「なあ、キーコ。一人じゃ寂しいだろ。うちだって父さんの帰りが遅くなることが多いからさ。食事はやっぱり賑やかなほうが楽しいって」

声を明るめてそういいながら、「おふくろはなぜ、キーコのおばさんが遅くなるというのを知っているのだろう」と考えていた。彼女たちは顔を合わせれば長々と世間話をする仲なので、本人から直接聞いたのかもしれない。
とすると、あの男もそうなのか。この団地の住人という線もあり

得るのか。もし侵入経路がベランダだとすれば更に有力である。下の階からよじ登ることだって……やめよう。可能性は無限だ。やはり仮定から抜けださない。

キーコは僕やおふくろにきょろきょろと顔を向けながらしばらく思案したあと、「それじゃあ」と頷いてくれた。

おふくろを先頭にして階段を上がるとき、おふくろに改めてジャージについて問われた。

「身体がなまってたから、父さんのジャージを借りてジョギングしてたんだよ。そしたら急に雨が降りだしてさ」

自然なようで、若干危うい理由だった。そんなの僕の性分じゃないし、それに中間考査までたった一週間しかないのだから。まあ、先ほどはその程度の理由さえ思いつけなかったのだから、上出来だ。今になってすらすらと口が動いたのは、キーコを無事確保した安心感が作用したに違いなかろう。

「ふーん、珍しいね。でも、ちゃんと勉強もしなさいよ」

おふくろはそういったきり、追求してはこなかった。

玄関のドアは、おふくろを振りきって僕が開けた。

部屋の中を隈なく見回しながらそうっと歩を進める。それからベランダへ繋がる窓のクレセント錠がしっかりとかかっているのを確認する。しかし、まだ胸を撫で下ろせない。男がかけた可能性もあるにはあるからだ。やはり、カメラを確認しなくてはならない。

居間で何やら話をしているおふくろとキーコを尻目に、僕は一人自室へ飛び込んだ。

すると不意に、どくん、と心臓が打ちつけられた。

チューナーの電源を入れっ放しにしているではないか。先に母を

帰宅させなくて本当によかった。

僕はチューナーの電源をきる間際に、キーコの部屋を確認した。先ほどよりもかなり暗くなってはいたが、ベッドの下でわずかに影が動いた。ようやく「ふう」と安堵の息をつきかけたとき、今度はとんとんとドアがノックされ、僕は飛び上がった。

ドアを開けると、そこにキーコが一人で立っていた。タオルで髪を拭いたようで、ぴんぴんと跳ねていた。彼女は気まずそうにうつむき、口だけを動かした。

「お母さんがお風呂沸かしてくれるみたいで、それまで一緒に遊んでなさいだって」

「ああ」

躊躇はあったが、僕はキーコを部屋に入れた。大丈夫だ。チューナーさえいじらなければ、モニタリングがバレることなんて絶対にあり得ない。

ただ、「キーコと二人きりになってどんな話をすればいいのか」という件については、まるで見当がつかなかった。

18　タナカさん（前書き）

ものすごく忙しかったけども、なんとか水曜までには上がりました；
さあ、クライマックスですよ。

18　タナカさん

行儀よく床に体操座りをするキーコ。僕はベッドに座り、居心地の悪い思いをしながら彼女の様子を絶えず窺っていた。暗雲とは別に陽も落ちて、雨が視認できないほど空は暗くなっていた。ただ、しとしとと雨音は聴覚の隅に常に棲みついていた。古くなった蛍光灯の鈍い明かりが、部屋の中を昔の青春映画じみさせていた。

よく考えてみれば、僕とキーコの仲はほのぼのと世間話をするような状態になかった。もとからそうだったが、本日は特に、昼休みの一件でより顕著だった。その後色々と起こり過ぎて、昼休みの騒動を忘れかけていたのだ。ただ、キーコのほうはしっかりと覚えていたようで、部屋に入った瞬間から「私とあなたは相容れない仲なのよ」といったオーラを全身にかもしだしていた。

それでも僕は話しかけようと思った。何かに支配されているような沈黙がひどく怖かったし、今は話題だってしっかりとあるはずだった。

「キーコってお兄ちゃんいたよね」

キーコは僕に背を向けて座っている。返事もなければ肯頷した気配もなかったが、僕は続けた。

「お兄ちゃんって、いつも何時頃に帰るの？　ひょっとしたら僕が聞いた物音ってお兄ちゃんなのかも、って気がしてきた」

「ずっと前から離れて住んでるよ」言葉だけながら、なんとか反応はしてくれた。

「突然帰ってきたりもするけど、いつも遅くまで仕事してるから、これぐらいの時間にはこないと思う」

「そう」
やはり兄とは別居中。あの男は兄ではないのだ。そう確信した瞬間、僕はキーコを後ろから抱きしめたい衝動に駆られた。彼女はいる。間違いなく無事でここにいる。たまたまチューナーの電源を入れ、男の侵入を知ったからこそ、とりあえず彼女は救えた。幾多の偶然を与えてくれた神様に、心の底から感謝した。

「ねえ」昂る僕を尻目に、キーコは抑揚のない声でぼそっと呟いた。
「もう物音なんて聞こえないね」

「そ、そうだね。だけど……」
ブラウン管の向こうに男はまだいるんだ、とはいえない。たとえプロレスラー五人に私刑されたとしても、それを漏らすわけにはいかない。
「きっと、息を潜めてキーコの帰りを待ってるんじゃないかって思う」

「待って、どうするの？」
「そりゃあ……」僕はいいよどみ、頭をぽりぽりとかいた。
「他人の心なんて僕には読めないけど、やっぱり襲うつもりなんじゃないかな」

キーコはうなだれて、ひざに額をつけた。その姿がとても不憫に見え、僕はたまらずベッドを降りて彼女のもとへ寄った。少しだけ迷うも、彼女の背中に手を置いた。

「でも、もう大丈夫だよ。ここにいれば安心だから」
そうやって励ましながら、僕はこれからどうするかを考えていた。警察を呼ぶのなら、どう説明しよう。先ほども案じたように、「侵

入を目撃した」と嘘をつくのは危険だ。不審な物音が聞こえたから、とするのが無難だろうが、はたしてそんな曖昧な理由で彼らは駆けつけてくれるのか。

そして、駆けつけてくれたとして、彼らはすんなり帰っていくのか。キーコの部屋を捜索したりはしないのか。でも、被害者だぞ。被害者の部屋を調べてどうするのだ。分からない。その方面の知識は僕にはない。とにかく、カメラが見つかったら一貫の終わりだ

いや、そうでもないのだ。カメラに指紋はつけていない。僕の部屋のチューナーさえ見つからなければ、それを仕かけたのが僕だと疑われたりはしないのではないか。ただ、キーコに疑われる可能性は充分にある。学校で彼女に、「自分だってオナニーしてんだろ」という最低な言葉を吐いてしまったのだ。あれは「あなたの部屋を覗いていますよ」と自分から明かしたようなものだ。

考えがまとまらない。まさか、単身でキーコの部屋に飛び入り男を退治する、などといった芸当は僕にはできないので、通報するのは絶対だ。あとは警察が部屋の中を調べないのを祈るだけか。

キーコの背中がかすかに震え始めた。自分の部屋に賊が潜んでいる。中学生の女の子が恐怖を覚えないわけがない。僕はついに彼女を抱きしめてやろうと思ったが、やはりそんな勇気は湧いてこず、どうするでもなく彼女の横顔を眺め続けていた。

「大丈夫？」

無意識のうちに口にしていた。

それには応えず、キーコは不安げな顔を僕に向けた。茶色がかった瞳が涙で濡れていた。

――深海さんにいわれたんだ。手塚くんとあんまり仲よくするな、って。

不意に横井さんの言葉が浮かんだ。それから、以前、キーコの家に謝りにいったときのことや、大柳にからまれたときのことが、順々に頭に蘇る。やがて小学校時代の、あの無垢な笑顔までもが連想された。

キーコ。本当にわけの分からない女の子だ。右へ左へと僕を振り回し、影で嘲笑う。ただ、彼女には嘘が一つもないように感じる。すべては彼女の心によって成り立っている。僕とは大違いだ、と思う。

僕はキーコを抱きしめた。投げだされた夜の海でロープを手繰り寄せるかの如く、強く、強く。

キーコもまた、一切の抵抗をも見せようとはしなかった。それどころか、彼女も僕の背中に腕を回してきた。そして、その行動は嘘なんかじゃない。そんな気がした。

「キーコちゃん。お風呂沸いたよー」

おふくろの呼ぶ声で、僕らはぴょんと飛び退いた。キーコはドアを一瞥してから僕に視線を移し、照れたように微笑を浮かべ立ち上がった。

キーコが退室し、バタンとドアが閉まると同時に、すかさずテレビとチューナーの電源をオンにした。キーコの部屋は真っ暗で何も見えず、僕は舌打ちをした。これでは男が逃げてしまったかどうかも判別がつかない。できれば警察に肩透かしを食らわせたくはなかった。この先同じようなことがあれば、いたずらで片づけられてしまいそうだからだ。男が逃げたのなら、また日を改めて侵入してく

るのは目に見えている。

壁を蹴ってみるか。しかし、男がわずかに反応を見せても、暗過ぎて分からないかもしれない。それに、男がまだ部屋にいるのなら、警察がくるまで刺激を与えずにおとなしくしているのが得策だろう。逃げられたら駄目なのだ。捕まってくれなきゃ、キーコの身の安全は保障されない。

となると、やはりさっさと警察に通報すべきだった。何をもたもたしていたのだ。

僕は精一杯自分を奮い立たせ、ようやくダイニングの電話で一一〇番にかけた。おふくろはキッチンで夕食を作っていた。僕がどこに電話しているのか問いはしない。

すぐに電話口に男性が出た。「隣室に侵入者がいるかもしれない」と告げると、相手は僕の名前や連絡先を訊ね、「すぐに警官を向かわせる」といった。

一仕事を終えた僕は、ふうと大きな息をついた。どっと身体に疲れが押し寄せてきた。

「りっくん」おふくろがいやらしく笑った。

「電話かける振りして、キーコちゃんを覗こうって魂胆なんじゃないの？」

電話は、浴室へ繋がる脱衣所のすぐ脇にあった。僕は無視して居間のソファに腰を下ろした。

最後の最後まで、迷ってはいた。

警察がカメラを見落とすことだってもちろんあるだろう。いや、むしろそのほうが有力だといえる。

ただ、後日になってこっそりとまたカメラを回収するというのは、間違っているのではないか。

僕は知ってしまった。もう何度も何度も繰り返してはいるが、キーコが好きなのだ。

どれだけ冷めても、心の底でくすぶり続けている。この想いをいい加減解放してやりたかった。溢れんばかりの酸素に触れさせ、キャンプファイヤーのように燃え上がらせてやりたかった。キーコのように、自分に嘘をつかず。そのためにはまず、決断せねばならなかった。

キーコはすぐに風呂から上がってきた。おふくろのピンク色のパジャマを借りたようだ。おふくろが夕食を告げたが、「ちょっとその前に」とキーコを再び自室へ連れ込んだ。そして彼女が後ろ手にドアを閉めた瞬間、僕は額を床に打ちつける勢いで土下座をした。

「え？」

「ごめん！　本当にごめん！」とてもじゃないが、キーコの顔は見られなかった。

「謝って済む問題じゃないのは分かっているけど、この通り、許してほしい。テレビを観てもらえば分かると思う。僕はずっとキーコの部屋を覗いていたんだ。毎日毎日。今日も、部屋を覗いていて偶然男が入ってきたのを目撃しただけで、物音なんて聞いちゃいないんだ」

カメラのことを正直に話す。これはあくまで第一歩に過ぎない。そしてその一歩で、すべてが砕け散ってしまうかもしれない。けれど踏みきらない限り、僕の想いは一生キーコに伝えられない。

「テレビって……」
テレビはすでにキーコの部屋を映していた。しかし、問題もある。
「真っ暗にしか見えないんだけど」
僕は顔を上げた。キーコはショックというより困惑しているという顔つきだった。無理はない。確かに画面は真っ暗だ。
「まあ、電気を点けないと見えないんだけど、これは確かに……」
「明度が足りないんじゃないかな」
キーコは腹這いになって、テレビに手を伸ばした。パジャマ上下の隙間にパンティが覗く。
「いや、もともとカメラが暗くて」
そういった矢先、僕はぎょっとした。
予想に反し、キーコはテレビの台の隅に置いたチューナーを手にとったのだ。
「え？　な、何を」
自分でも可哀想になるぐらい狼狽する僕を気にもせず、キーコは携帯電話型のチューナーを慣れた手つきで操作した。やがて、金魚のように口をぱくぱくとさせる僕にチューナーを手渡した。
「これでよし」
「え……」
はっとモニターを見る。
本当だ。明度が増している。もちろん暗いのは変わりないが、カーテンの開いた窓から漏れる、ぼんやりとした外灯の明かりぐらいは確認できるようになった。キーコに山ほど訊ねたかったが、それ

よりも前に検証すべきものがあった。
「あ、あれ？」
薄闇の中、男がいつの間にかベッドに座っていた。キーコの帰りがあまりに遅くて、緊張の糸がきれてしまったのだろうか。
「この人、何やってるの？」
「う、うん」
僕はぐっと目をこらした。確かに何かをやっている。右手を股間の辺りで慌しく動かしている。これはいったい……これは……考えるまでもなかった。この男まで、それを日課にしていたのか。
「いやあ！」
キーコも察したのか、両手で顔を覆った。やや罪悪感を覚えてしまう。僕も彼の仲間なのだ、とは口が裂けてもいえなかった。
「やっぱり、やっぱりタナカさんだあ！」
「タナカさん？」急に飛びだした個人名に驚き、僕はキーコを見つめた。
「タナカさんって、あいつが？」
「心当たりはずっとあったんだ。うちの向かいに住んでる家族の息子さんで、私が小さい頃から、よくちょっかいかけられてたの」
向かい？　つまり三〇三号室。キーコから見てうちとは逆隣の住人か。よし、犯人が分かっているのなら逃げられても大丈夫。
「最初さ。可愛いね、って頭撫でられて、そのときは嬉しかったんだけど、なんか触られた髪がぬるぬるしてさ。おまけにくさいし。そんで、お母さんに相談したら……」

もう聞きたくない、聞きたくない！　身近に、そんなド変態が住んでいたとは。

とにかくキーコの母が激怒してタナカさん宅に怒鳴り込み、そのときは厳重注意という形で話はついたが、以後も嫌がらせは続いたのだという。キーコが中学に上がった頃、いよいよ警察から注意を受け、男はキーコに近づくのを禁止させられた。それからはちょっかいをかけられるどころか、男と顔を合わせもしなかったそうだが。

「やだ、やだ！　りっくん、早く警察呼んでよ」

キーコは珍しくとり乱していた。彼女の反応は普通だろう。過去に男から、一生のトラウマになってもおかしくはない仕打ちを受けたのだ。男が間違いなくタナカという隣人なのであれば、の話だが。

「大丈夫、大丈夫だから」僕は必死にキーコをなだめた。あまり騒ぐと壁の向こうの、男に不審がられてしまう。

「もう呼んであるから、そろそろ……」

タイミングよく呼び鈴が鳴り、「はーい」と応対するおふくろの声が聞こえた。

19　さすがりっくん

いずれも体格のよい四人の警官が駆けつけてくれた。うろたえるおふくろの前で、その一人に事情を説明し、彼らの指示で僕らは居間に待機した。

おふくろが一緒だというのもそうだが、隣で格闘が行われているという想像も、キーコに説明を求める足枷になった。三人はほとんど口を開かず、おとなしく報を待った。

五分もかからなかったかもしれない。再び警官が訪れ、男を無事に捕獲したという通達を受けた。それから、三人同時に詳しく話を訊かれ、「君が異常を感じとったのは何時頃だ」とか「家族が帰宅したのだとは思わなかったか」など、答えにくい質問もあったが、キーコが上手くフォローしてくれて、隠しカメラの存在を匂わせることなく終えられた。僕らは色々と話させられたが、こちらが得られた情報は、犯人は近隣に住む三十代の男ということだけだった。

確認のため、とキーコは警官に連れられていった。やっぱりカメラが見つかってしまったのだろうか、と僕の鼓動は激しく波打った。さすがにその様子をモニタリングする度胸はない。でも、きっとキーコは僕を庇ってくれるはず、という見込みもなくはなかった。ただ、しばらくしてキーコが戻り、ただの盗品チェックだったのを知って拍子抜けした。

キーコのおばさんに連絡がいったところで、警官たちは去っていった。時刻は八時を回っていた。当然ながら、おばさんが飲み会をきり上げて帰ってくるまで、キーコはうちに残ることとなった。「夕食を」とおふくろは提案してきたが、僕らは「食欲がなくなった」と口を揃えて、二人の時間を作った。

「まあ、なんとか落ちついてよかった」
自室へ戻ってすぐ、僕はキーコにそう声をかけた。
キーコは無言で頷き、僕と並んでベッドに腰かけた。
「お母さん、びっくりしてたね」
僕の母のほうである。電話口のキーコの母も、そりゃあ驚いただろうが。
「だって、いきなり警察が四人も家に訪ねてきたんだもん」
玄関のドアを開けたのはおふくろだった。彼女には何も説明していなかったため、ひょっとしたら僕が何かをしでかし、僕を逮捕しにきたのだと勘違いしたかもしれない。だとすれば、なかなか勘が鋭い。
何も答えずにいると、キーコは所在なさげに髪の毛をいじり始めた。
「なあ、キーコ」それを機に、と僕は本題をきりだした。
「どうしてチューナーを扱えたんだ？」
キーコは黙りこくった。「機械に詳しいだけ」とはいわせない。彼女は相当手馴れていた。あれはどう考えても、同じ型のチューナーを日頃扱っている者の手つきだった。
答える代わりにキーコはテレビをつけ、チューナーを手にとった。そして、また操作する。僕は彼女の手もとをじっと見つめた。チューナーには確かに、不明なボタンがいくつかついていたが、「何か異常をきたしてしまうかも」と僕は一切手をつけなかった。
最後にキーコはチューナーの電源を入れた。テレビのモニターに

明るい映像が映しだされる。見慣れた部屋に二人の男女。男の動きが僕にシンクロしている。

「カメラにはそれぞれ、なんていうかな、電波みたいなものがあって…」

キーコの説明を聞きながら、僕は後ろを振り向いた。視線はすぐに上方のダクトホールをとらえた。

「チューナー側でそれを調整してやれば、別のカメラの映像も観られるんだ」

つまり、僕の部屋、あのダクトホールに、僕がキーコの部屋に仕かけたのと同じカメラが潜んでいるというわけだ。

とてつもない事実を目の当たりにした僕だが、さほどの衝撃は受けなかった。なぜなら僕も馬鹿ではない。それぐらいの見当はすでについていたからだ。キーコがチューナーを扱えるのなら、彼女も同じ機器で何かを盗み見ていると考えるのは当然だし、だとしたら、なんとなくそれは僕の部屋なのではないかと思った。

「自分の部屋にカメラが仕かけられている」と知って、彼女があまり驚いた様子でなかったのも大きい。僕の部屋を覗いていたなら、僕が彼女を覗いていたことも知っていただろう。ダクトホールからテレビ画面は見えないが、今自身がやってみせたように、チューナーをいじって確認すればいい。

僕ははっと気がついた。衛星中継の音声ように衝撃が遅れてやってきた。

知っていた？　覗かれていたのを知っていた？

ならばなぜ、彼女はあんな……いや、まずはいつから覗いていたかを問わないと。

「キーコ……ん？」
ふと気づくと、キーコは先ほどの僕と同じように土下座をしていた。慌てて彼女を起こそうとしたが、彼女の身は硬かった。
「私のほうこそごめん。本当にごめん」意外にはきはきとした口調だ。
「もしりっくんが望むなら、私なんでもいうこと聞くから。だから……」
「いや、いいんだって」おろおろとキーコの頭頂部に向かって話す。
「同じ覗くにしても、男と女じゃ全然違うよ。僕は本当に、キーコの大事な……」
「ううん」顔を上げ、キーコはゆっくりとかぶりを振った。
「りっくんは一つも悪くないの。全部私が悪いの」
「え？」
その後のキーコの話は、さすがに僕の想像をはるかに超えていた。
実はね。私がりっくんの部屋を覗き始めたのって三年も前の話なんだ。うん、びっくりするのも無理はないよね。お兄ちゃんがすごいもん発明したって私に見せてくれて。あ、うん。お兄ちゃんが作ったんだ。和男くん？　うん、そう。ちょっと待ってて。それはあとで話すから。
で、お兄ちゃんにねだってカメラを貸してもらったの。最初はいたずらのつもりでさ。本当に。悪いことだっていうのは分かってた

んだけど、りっくんの部屋に仕かけたわけだね、カメラを。

どうやって？　まあ普通にりっくんと同じ方法で忍び込んで。うん、知ってた、っていうかベランダ使うしかないし。ダクトホールは高かったから、その机の椅子を借りちゃった。

そしてりっくんの部屋を覗き始めたら、なんだかすごくドキドキしてやめられなくなっちゃって、お兄ちゃんに急かされても私はずっとカメラの回収を拒んでたんだ。そのうちにお兄ちゃんが家を出て、うやむやになっちゃった。

それである日ね、なんていうかすごくショックを受けて。ショック？　うん、それはまあ置いといて。黙って回収するわけにはいかない。りっくんに正直にいわなきゃいけないって思い始めたの。でもさ、そんなの正直にいっても許してくれるわけないじゃん。正直にいえば許した？　やめてよ。そんなこといわないでよ。

そんで去年の秋ぐらいにさ。お兄ちゃんがまた同じカメラを作ったんだ。そのときはふーん、って感じだったけど、しばらくして友達を連れてきてさ、その友達が、うちの隣に従兄弟が住んでる、とかいうわけよ。そう、和男くんね。その瞬間、もう降りてきちゃったわけです。なんていうか、神のお導きが。

まさか、って……うん、多分りっくんの想像してる通りだと思うよ。

またまたお兄ちゃんにおねだりして、新しいカメラも貸してもらった。お兄ちゃん、私のおねだりにとことん弱いんだ。作ってすぐ妹にカメラを奪われて、お兄ちゃんが気の毒だと思うかもしれないけど、これでも兄想いなんだよ。お兄ちゃんがカメラを悪用するの

を未然に防いでるわけだ。すみません。いい訳です。

次は和男くんに事情を話して、りっくんにカメラを渡してもらった。そんなにすごい顔しないでよ。許してもらうにはそれしかないじゃん。りっくんが私と同じことをしてたら、許さないわけにいかないでしょ？

え？　半径十メートル？　さすがりっくん、頭いいね。正解。それは和男くんのアイデアなんだ。本当は五倍の五十メートルまで映像は届くよ。でも、十メートルってしとけば私しか覗けないでしょ。

あれ？　チャイム鳴ったかな。まあいいや。

でもさ、なかなかりっくんがカメラを仕かけてくれないわけだ。そりゃ普通はそうだよね。自分の異常さを痛感させられたよ。それに、りっくんはもう私に興味ないのかなって寂しくなっちゃった。

……

……うん。

「キーコちゃーん。お母さんきたよー」

おふくろのノックにより、会話は中断した。

おばさんは、玄関先でキーコを思いきり抱きしめていた。僕はその瞬間、キーコを許そうと思った。カメラがなければ、今頃キーコは大変な目に合っていたはずである。一番大事なものが無事だったのだから、僕は何もいえない。

話の再開は約一時間後に訪れた。九時にベランダで落ち合おうと約束していたのだ。父さんも帰っており、僕は質問攻めにあっていたが、「キーコと話があるから」というとあっさり認めてくれた。多分彼の想像しているような話ではないが。

「で、同じクラスになって、また迷ったんだ。りっくんと仲よくなってから、正直に話すか。それともりっくんに辛く当たって、カメラを仕かける罪悪感を失くさせるか」

雨はだいぶ小降りになり、顔にかかってもほとんど気にならなかった。隣のキーコも同じらしく、それよりも話をするのに夢中といったふうである。

ベランダで落ち合うといっても、仕きり板を隔ててであった。こうゆうふうに話をするという手もあったのだなと初めて気がついた。小学校時代にそうしなかったのはおそらく、家に帰ってまで話をする必要がないほど昼間に仲がよかったからだ。

「罪悪感か」僕はもはや笑って聞いていた。キーコのとんでもなさに、もはや笑うしかないというのも確かだったが、彼女の話が楽しかったのも本当だ。

「それで、後者を選んだわけか」

「いや、最初は本当に迷ってたよ。ただ、あれがあったでしょ。りっくんが私にゲロをぶっかけた」

身も蓋もない表現だ。

「ああ……」

「あれでまあ、すごくむかついたってのもあるけど。だって、マジで洗っても洗っても匂いがとれないし、制服捨てるハメになっちゃったし……まあ、私に文句をいう資格はないね」

「じゃあ、あれでカメラを仕かけさせるほうに定まっちゃったわけね」
「ううん、それでも、夜りっくんが謝りにきてくれたときは、そのまま仲直りしちゃおうって思ったよ」

「え？」僕は眉をひそめた。
「じゃあ、なんであのとき急に突き放したの？」

「うーん、やっぱりむかついたから」
「は？」
たった今、私に文句をいう資格がない、といったばかりではないか。

「つまり、ゲームソフトなんかをお詫びの品として持っていったから？」
「ううん」
キーコは口ごもった。

僕は訝って彼女をまじまじと見つめた。暗くてよく分からないが、その表情はなんだか照れているようにも見えた。いったいなんなのだ、と思う。

「そのあと、握手しようとしてきたじゃん。あれが……」
「握手……」

覚えている。確かに、握手を求めた。
右手を差しだしたとき、僕自身「調子に乗り過ぎかな」と案じたし、キーコが豹変したのはその直後だったので、納得はできるが、今しがたのキーコの様子と上手く絡まないので、どうも引っかかる。

「それでさ」ごまかすように、キーコは無理やり話を続けた。
「結局辛く当たる方向でいこうと思って、それからはもう、本当にゴメンね。私が憎かったでしょ」

「すごく憎かった」
「で、りっくんは本当にカメラを仕かけてくれた」

僕は黙った。自分がどうしようもなく恥ずかしい存在に思えてくる。すべてはキーコの手のうち、か。彼女を許すために、まんまと彼女のモニタリングを始めてしまったわけだ。

そのとき、唐突に一つの考えが浮かんだ。ひょっとして、あれも同じく彼女の罪滅ぼしだったのではないか。
覗かれていると知りながら、カメラの前で裸になり、股間をまさぐっていたことだ。

三年も前からなら、キーコは当然僕の日課も覗いてしまったはずだ。その代わりとして、自分の痴態も僕にさらけだした。
決まりだ。これで辻褄は合う。

もう、これ以上聞く必要はないだろう。まだよく分からないこともあるけれど、それもいつかは暴かれるはず。次の一歩を踏みだし、乗り越えられればきっと。

「ねえ、さっきの話だけど」
また口を開こうとするキーコを制し、そうきりだすと、キーコは微笑を浮かべながら、「なんだっけ」ととぼけてみせた。僕も彼女の調子に合わせ、口の端を曲げる。
「分かってるくせに。今度こそちゃんといわせてもらう」

部屋での会話。キーコが、「りっくんはもう私に興味ないのかなって寂しくなっちゃった」と話したとき、僕らのあいだに微妙な空気が流れた。それを察した僕が、「一つだけ、先にいっておいていいか」とキーコに訊ねた矢先、邪魔が入ってしまったのだった。

「どうぞ。聞いてあげる」

偉そうにいい、キーコは目をつむった。僕は一度深呼吸をし、口を開いた。

「僕はずっと……ずっと僕は……」

さすがにすんなりと言葉が出てこない。しかし、いわなければ。誰よりもキーコが背中を押してくれている。

「僕はずっとキーコが好きだった」やや声が裏返ってしまった。

「今だって、これからも、それはずっとずっと変わらない。今更って感じだろうけど、どうしてもいいたかった。好きだからキーコが憎かったし、キーコを覗いたんだ。そして、キーコが無事で本当に僕は、僕は……」

雨が右目を直撃した。まさか「告白しながら泣いている」と思われるのはしゃくなので、拭うのを我慢した。ところが、次の瞬間には、右目にキーコの指が伸びていた。

「私も、りっくんのことが好き」

親指の腹で僕の目を優しく撫でるキーコ。次第に右目の視力が回復していった。

「ねえ、私とりっくんがつき合ってるって話、本当のことにしちゃおうよ」

「あ、ああ」
異存はなかった。
「だって、私たち」少しだけためらいを見せるも、キーコは赤面しながら口にした。
「カメラ越しだけど、すでに肉体関係まであるんだもんね」
思わずキーコを凝視してしまった。その話題がタブーだというのは暗黙の了解だったはずで、僕はとにかく戸惑った。
「だって、それは」結果、気持ち悪い笑みを浮かべ、情けないフォローをするという役に回ってしまった。
「罪滅ぼしってだけだろ。僕のを見ちゃったから、自分のも見せなきゃ駄目だって。少なくとも、僕はそう思ってたんだけど」
「え？」キーコは心外そうに目を丸めたが、すぐに笑ってとりつくろった。
「そ、そうなんだよ。さすがりっくん、やっぱ分かっちゃったかー」
僕は難しい辞書でも引くときのような、深刻な顔になっていたと思う。
嘘だろ。違うのか……？

19　さすがりっくん（後書き）

トンデモオチでごめんなさい。でも、予想ついちゃった人も多かったかも。
複線やヒントはめいっぱい仕込んであったんだよ！
来週の最終回に向けて、もう一度、読み直してみよう（笑

20　モニタリングラブ

「わーん、キーコ」渚さんがキーコに飛びついてきた。
「私やばいよー。補習が三つもついちゃったー。夏休みのグアムが白紙になっちゃったらどうしよう」
「生きていれば、そのうち報われるさ」よしよしと渚さんの頭を撫でるキーコ。
「それにさ、私も二つ補習あるし」
「本当？」渚さんは救われたように顔を明るめた。それから僕を流し見て、一転無愛想にいった。
「で？　あんたも補習？」
「僕はセーフ」
テストが始まる前日に、夜遅くまで教科書の中身を頭に叩き込んだのが効いた。昔から一夜漬けは得意なのだ。
「自分だけこっそり勉強するなんてずるいなあ」唇を尖らせて、キーコは机に伏せた。
「りっくんと一緒に補習受けたかったのに」
補習は放課後に行われる。普段なら僕は帰宅、キーコたちは部活に勤しんでいる時間だ。こんなときだけ僕の下校を妨げようだなんて、そうはいかない。
「りっくん、キーコと仲よくやってる」
突然後ろから抱きつかれた。驚いて振り返ると、青柳さんのカエル顔が間近にあって更に動転した。青柳さんはキーコたちに視線を

移すと、「私も二つだよ」とまるで自慢するかのようにいった。

「ちいちゃん、こいつのこと、りっくんなんて呼んでるの？」

ヘドロに生足を浸したときの顔をしながら、渚さんがいった。陰口でなく僕の目の前できちんといえるのは、ある意味信用できるポイントだなと、最近ではそう思え始めていた。

五月下旬。帰りのホームルームで中間考査の答案を返されたところだ。補習が明日からとされているのは、生徒たちの予定を汲んでくれているからかもしれない。

断じていうが、僕はキーコたちのグループに仲間入りしたわけではない。ただ、僕がキーコの彼氏になったというのを渚さんや青柳さんが、疑りながらも認めてくれたというだけだ。とはいえ、キーコはこの二年間の鬱憤を晴らすかのように、一日中僕にベタベタしてくるので、結果的に授業の合間や昼休みも彼女と過ごすことになり、周りからは僕もキーコグループの一員にしか見えないだろう。

内藤さんは見なくなった。「ケンカでもしたのかな」と想像していたら、先日キーコたちが「彼氏ができたらしい」と話しているのを偶然聞いた。隣のクラスの男子で、空き時間のたびに会いにいっているそうだ。

「彼氏ができたからってつき合いがなくなるなんて薄情だな」

と僕がいったら、キーコは僕を小馬鹿にしたように笑った。

「女の友情は複雑なの。彼氏と別れたらまた戻ってくればいいよ」

「そうゆうものなのか」と僕が感心せざるを得なかったのは、渚さんや青柳さんが、以前に比べてキーコに執着しなくなったためだ。一言二言話してすぐに去っていく。なるほど。キーコにも彼氏がで

きたわけだしな。

それから塚田も消えた。こちらは詳細不明である。キーコに訊いてみると彼女も不思議そうに首を傾げていた。曰く、「環境はぐるぐると移り変わるからね」。

うん、それも真理だ、と僕は思った。

「今日も部活休みなんだ」

終礼からしばらく。かばんを持つ手を肩にかけ、キーコに挨拶して帰宅しようとした矢先、彼女はいった。岩口待ちの時間に下校準備を済ませるのを忘れたらしい。いそいそとかばんに教材を詰めている。

「うちの部長の考えでさ。答案を返されたあとはみんなショックを受けて、実力をだせないからって」

赤点が前提なのか。僕は愛想笑いをし、キーコを待った。彼女の準備が整い次第、僕らは連れ立って教室を出た。

「ちょっと」

廊下にて後ろから声をかけられ、僕とキーコは同時に振り向いた。

丸坊主の巨体。声の主は塚田であった。それにより、僕はやや緊張する。彼はキーコに気があったはずだが、僕とキーコがつき合い始めたのに対しての彼の反応は、いまだになかったからだ。

塚田は決まりが悪そうに、そわそわと目を泳がせていた。「いったいなんなのだ」、と訝り始めたとき、彼の大きな背中の後ろから小さな影が飛びだしてきた。

「ふ、深海さん」

横井さんだった。塚田の腕に抱きつきながら彼女は、「はい？」と返事をするキーコをぐっと睨みつけていた。
「私、塚田くんとつき合うことになったから、だから、つ、塚田くんとあんまり仲よくしないでもらえる？」

キーコを見る。彼女はきょとんとした表情で、「はあ」と頷いた。

「以上。じゃあね、ばいばい」
手を繋いで僕らを追い越していく二人。塚田はこっそりこちらに目を向け、口の動きだけで、「すまん」と謝っていた。辟易したふうだったが、まんざらでもないように見えた。

僕とキーコは顔を見合わせた。
「横井さんって、負けず嫌いだねー」
「うん」
調子を合わせ、僕らも歩きだした。

例の事件から数日が経ち、僕の耳にも色々と情報が入ってきていた。

キーコの部屋に忍び込んでいたのは、やはりタナカさん宅の息子。年齢は三十過ぎ。昨今は無職で、親のすねをかじりつつ家に引きこもっていたのだという。やはり、キーコのおばさんが遅くなるというのを両親の世間話から知り、抑えきれず犯行に及んだらしい。

タナカさんに口を滑らせたおばさんも、息子に盗み聞かれたタナカさんも、さぞかし悔いたそうだ。タナカさんに至っては、「これ以上キーコに迷惑をかけられない」と息子の執行猶予も視野に入れ住居を移す予定である。

ただ、キーコはそんな事件など、もう忘れかけているようだった。

「やっぱ、彼氏ができると毎日が楽しいね」

はつらつとした様子で彼女はいった。歩き慣れた下校道。テスト期間中だったのもあり、ここ数日は毎日のようにキーコと一緒に帰っている。

「キーコが僕を避けていなけりゃ、中学三年間ずっと楽しかったじゃないか」

「だってえ」

恥ずかしそうに目を伏せるキーコ。

僕を避けていた理由を問い質すつもりはなかった。なぜなら、すでに僕には分かっていたからだ。

キーコが僕を避け始めたのは、僕があれを始めた時期と重なるではないか。あれとは何か。日課、すなわちオナニーだ。

かつてタナカさんの息子にいたずらされた経験にもより、彼女の中でそれはひどくけがらわしいものに映ったのだろう。勝手に僕を覗いておいて、勝手に僕を軽蔑していたわけだ。握手をしようと差しだされた右手にさえ、そいつは及んだ。

ところで今はなぜ軽蔑していないのか。その謎もすでに解けている。近日のキーコを見ていれば明らかであり、もはや隠そうともしていないように思える。要するに、彼女も知ってしまったというだけのこと。

団地に帰りついた。予想通り、キーコは甘えた口調で僕に寄りすがってきた。

「ねえ、今日ももちろん、やるんだよね」

「ああ」僕は頷きつつも、常々の疑問を口にした。
「でも、どっちかが直接部屋にいったほうが早くない？」
「だって……」うつむいて髪の毛をいじるキーコ。
「私たち、まだ中学生だもん」
「危険だ」と僕は改めて思った。そう、キーコはとにかく危険な女の子なのだ。頭のねじが確実に何本か外れている。
こんなクレイジーな子と、この先ずっとつき合い続けていられるのだろうか、と不安になってしまうが、カメラの件を経ているのだから、どんな衝撃にも耐えられるような気もする。
キーコと別れ、僕は階段を上がった。玄関を抜け、すぐに自室へ入る。テレビを点け、チューナーの電源を入れると、僕もそれほどのんびりとしていたわけではないのに、早くもキーコが待ちきれないといったふうにカメラの前にいた。
キーコの部屋の僕が仕かけたカメラは、テレビの上に移動していた。一方、僕の部屋のキーコが仕かけたカメラもこちらの同じ場所にあった。僕らはテレビのモニター越しに向かい合わせていた。
キーコがカメラにノートをかざした。「準備はオーケー？」と書いてある。彼女は携帯電話を持っているが僕は持っていない。よってこんなふうに筆談形式で会話しなければならない。だから直接会えばいいのだ。僕らが本当に中学生の身分をわきまえているとでもいうのか。
わくわくとした様子で、キーコはセーラー服を脱ぎ始めた。
「僕も人をとやかくいえないな」と思った。息子はとっくに元気に

なっている。
ノートに「好きだよ、りっくん」の文字。僕は苦笑し、また頷いた。

互いにモニタリングし合いながらのセックス。
モニタリングセックスじゃあんまりなので、モニタリングラブとでも命名するか。

かつて毎晩のように繰り返していたそれを、「これからも続けていこう」といいだしたのはキーコだった。なんというか、よほど気に入ったらしい。僕はどちらかというと生身の彼女と愛し合いたいのだが……

キーコはすでに上半身裸になって、急かすように僕を見つめていた。その顔には、かつて僕が心の底から求めていた、あのにこにことした無垢な笑みが浮かんでいた。

「本当に危険な子だ」と呆れながらも、僕はずりっとずぼんを下ろすのだった。

モニタリングラブ　＞完＜

20　モニタリングラブ（後書き）

ご愛読ありがとうございました。
興味が湧いたら他の作品も読んでみてください。
ブログにもあります。ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇ．ｌｉｖｅｄｏｏｒ．ｊｐ／ｎａｔｓｕｎｏｒａｄｉｏ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6255k/

モニタリングラブ

2010年10月12日01時46分発行